
ちいさな力ケラ

夏詠水面

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ちいさな力ケラ

【Zコード】

Z5742U

【作者名】

夏詠水面

【あらすじ】

疫病から村を救うため、イングリットは高名な「森の魔女」の元を訪れる。しかし、魔女に関するうわさは、とんでもないものばかり。

曰く、サンバを踊りながら薬を調合する。

曰く、ゴスロリ趣味。

曰く、興奮すると刻の声を上げる。

……イングリットは、無事、村を救えるのだろうか？

何年か前に書いた作品を、羞恥心にもだえつつ投稿します。どうか、生暖かい目で見守ってください。基本、一日一回、22時の更新です。

なお、本作には若干一名変態が登場します。注意してください。

プロローグ

プロローグ。

雨がしとしと降っていた。

イングリットの体は、その雨に体力を奪われ、もはや動く気力すらもわからない。

それがどういうことなのか、イングリットは理解している。

(死んだら、そのあとどうなるんだろう)

もう薄れかかった意識の中で、イングリットは思う。もちろん、死後の世界とか、そういう死んだあと魂の行き先のことではない。そんな非現実的なものがこの世に存在しないことぐらいは田舎の村の子供でも知っている。

ただ、肉体。

この身体は、死んだあとも放置されるのだろうか。誰にも目を向けられないままここで腐るか、あるいは獣たちの餌になるのだろうか？

そんなのは嫌だ。

あたしはイングリットだ。人間だ。誇り高き父と慈悲深い母との間に生まれた人間だ。たとえ死して人里はなれた大地にその屍が打ち捨てられようとも、誰がこの身を汚すことを許されようか！

あと少し。もう少し頑張れるはずだ。

こんな森の中で死ねるはずがない。

父の誇りにかけて、救わなければいけない人たちがいる。

母の愛にかけて、守らなければいけない約束がある。

じり。と、イングリットの手が地面の泥をつかんだ。その手は硬く、硬く握り締められ、寒さで細かく震えながらも強い意志がこも

つていよいよだつた。

じり。

もう動かないと思つていた足に力が入る。

じり。

光を失つていた瞳に命の炎が宿る。

じり。

体が再び自由を取り戻す。

(やり遂げてやる)

心の中でも眩いて、イングリットは一気に起き上がつた。
気がつくと雨も小降りになつてゐる。

いける。

いまなら、まだ頑張れる。

・ ・ ・ ・ けど。

「 ・ ・ ・ ・ とつあえず、一眠りしてからにしよ 」

イングリットはもう一人、ちぢれんと横になつた。

開幕。少女、イングリッシュ

「…………くちゅん

なんとも情けないくしゃみであたしは田を覚ました。
そしてすぐ、田と鼻の先に黒い見たこともない生き物がいるのに気がついた。

その生き物はすんすんとあたしのにおいをかいでいる。一見小さくて愛らしく、よつとも見えるが、おなかをぎゅるると鳴らしながら涎をたらしてこちらを見ると、明らかにあたしを食料として認識しているようだ。

雨はやんでいるようだったが、服が濡れているせいでも寒い。周囲の明るさから見るに時刻は一回りして昼なのだろうが木々が光をさえぎるために太陽がどの辺りにあるのかおおよその日星しかつかない。身体は動かない。

恐らく寝たせいで気が緩んだのだ。寝る前に感じた燃え滾る炎のような気力は微塵も感じられず、捕食されよつとしているこの瞬間ですらも倦怠感が身を包んでいる。

てか、のんきに状況観察している場合じゃない！

誰か、誰でもいいから助けて！？

・・・・・あ、でもやっぱり助けてくれるなら白馬に乗った美形の王子様のほうがいいな。

それで「姫、御無事でしたか？」なんて訊きながら手の甲にキスしてくれるの。

なんてバツチグーなアイディアなのかしら。
じゃあこういなおすべきね。

「美形でやせし白馬に乗った王子様なら誰でもいいから来てー」

・・・・・あ、まだ叫ぶだけの体力はあつたんだ。

あ。

黒い動物が、あたしの悲鳴に驚いて口を空けた状態で固まつた。

そこで、待ちに待つた助けの声が聞こえた。

「アサさんダメよ。それは食べ物じゃないんだから」

残念ながら女性の声らしい。

・・・・・しょんぼり。

あたしは助けが現れたことに安堵しながらも心のどこかで落胆した。

「そんなものを食べたらおなかを壊すわ」

そんなものの呼ばわり。

もつちよつと、なんか、まともな言い方はないのだろうか。
助けられておいて言つのもなんだが、そんなものといわれて気持ちいいはずがない。

「味見も駄目」

それでもせうせうと舌を伸ばさうとしていたアサという黒い生き物にその声はぴしゃりといった。

あわてて舌を引っ込めつつも悶めしそうな顔であたしを見下ろすアサ。

そのつぶらな瞳が何よりも明確にアサの心境を語つていた。

(あたしの「ほん・・・・・・」)

とこう声が今にも聞こえてきそうだ。

声の方向に少しだけ体を動かすと、サンダルを履いた白い足が目に

入った。雨で地面はぬかるんでどろどろになつているはずなのにその足はなぜか少しの泥もついていないまつさらなものだつた。

「えつと、確かに初対面の人には自己紹介をするのよね

その声は震つ。

うん、まあ、確かに初対面の相手には自己紹介をするのが普通だが瀕死とも言える状態の人間を前に自己紹介をするような空気が読めない非常識な人はいらないんじやないかな。

「私の名前はハルよ」

・・・・・いないんじやないかな！

「趣味は日光浴。職業は魔女だけれど、副業として薬師もやつているわ。時々非常識だつて言われたりするけれど、私的には非常に常識的な人間のつもりよ」

ちやつかり自己紹介しやがつた。

いやつ、本当に今の状況を理解していない。

空氣読めつつーの。

「ところであなた、一体こんな森の中で何をしているの？」

死にかかってます。

「それと、これは善意からいうけれど、その「ゴキブリが肥やしの中を走り回つたあとみたいな身なりは見ていて見苦しいわ。そんな格好で魔女の館の前に居座らないで頂戴」

「喧嘩売つてんのあんた！」

思わずがばりと起き上がりつて怒鳴りつけた。

つて、え？

魔女の館？

あたしは女性の背後にある門を見る。

大陸じゅうに名前をどうかせる魔女の住む館が、目と鼻の先にあつた。

「イタ力の村から？」

熱い風呂から上がったあたしにそつと薬湯を差し出した、ハルという名の女性、もとい少女は驚いたようにいった。

噂に聞いていた森の魔女というのはもつと年寄りだったはずだが、あれは尾ひれがついたものだったようだ。今日の前にいる少女は、どんなに年上に見積もってもまだ二十歳になるかならないかという年齢で、簡素だが清潔そうな白い服を着たどこにでもいそうな普通の人間だった。

「イタ力の村つて、確かに大人でもここから歩いて五日はかかる場所よね。王都に近くで、そもそもが王都に新鮮な穀物を運ぶために作られた農村都市じゃなかつたかしら。いくらこここの薬が国内随一とはいえ、どうしてあなたみたいな小さな女の子が来るの？もつとちやんとした大人の人とかはいなかつたの？」

魔女の疑問は至極もつとも。

けど、魔女は王室の偉い人達とも強いつながりがある。何が起きたのかを知つての質問だろう。

黙り込んでうつむいたあたしに、魔女はほんわかした笑みで「「めんなさい」といった。

「「」の質問は、あなたを傷つけるだけね。私、妹からよく言われるんだけれど、他人の心の機敏を察したり場の空気を読んだりするのが苦手なのよ。許して頂戴」

魔女はそういうつてあたしの向かいの席に座る。
つて、え？

妹！？

「魔女に妹がいるの！」

あたしはやや身を乗り出しつつ聞いた。

魔女に妹がいるなんて初耳だ。そりや勿論魔女だつて人間だし、家族を持つていたつておかしくないが、噂に聞く魔女というのは、もつと気難しくて、人間嫌いで、一人ぼっちのはずだ。いくら尾ひれがついた噂とはいえ、妹と一緒に「くすりやさん」を喰んでいるような家庭的な印象はカケラも受けない。

魔女と呼ばれ、敬遠されがちな存在に、妹がいるとは・・・・・！
目を真ん丸くしたあたしに、魔女はくすりと笑つて、冷めないうちに薬湯を飲むように促した。

「自分では気がつかないかもしねないけれど、あなたは相当体力を消耗しているのよ。今は全然疲れた感じがしないかもしねないけれど、それは精神的安堵感から来る一時的なもので、いつ高熱を出して倒れてもおかしくないわ。その薬湯は即席のものだから栄養回復ぐらいにしかならないけれど、ちゃんと休んで体に無理をさせなければ一日ぐらいで体調は万全になるはずよ」

あたしは魔女に言われるままに薬湯を口に呑んだ。

確かに、甘い。

それも、街の薬屋が子供用の薬として提供している砂糖の混ぜられたものではなく、もつと自然な甘味。

率直に表現すれば、そつ、ミルクのよつ。

「わー。それはシシマヤミの樹液 通称、樹の母乳が入つてい
るわ」

魔女が教えてくれる。

シシマヤミの樹は、とても栄養価が高く森にすむ動物たちが冬越しの食料とすることもあるらしい。中でも樹の幹に傷をつけて採集する樹液は甘く、白濁色をしていることから樹の母乳といわれ風邪を引いたときなどに重宝する。生殖数こそあまり多くはないが、ライビビ王国の中ならどこにでも生殖していたりする。

「おこしこよ、これー!?

一気に飲み干したあたしの顔は、大げさではなくきらきら輝いていた。

それを受けて、魔女が声を上げて笑う。

「ふふふふ。それは重複。気に入つたならあとで作り方を教えてあげるわ。そんなに難しくないし、すぐに覚えられるはずよ

「本当ー?魔女の秘薬とかじやないの?」

あたしが驚いて言つと、何がおかしいのか魔女はぶつと吹き出す。あまりにも唐突だったので一瞬呆然としてしまつたが、それから少しもつとした。

「ちょっと、なにがおかしいのよ？わたし別に変なこと言つてないでしょーーー？」

「いや、だつてあなたの反応つて、大げさといふかオーバーアクションといふか、すごく真つ直ぐで、それに」

そこで魔女はいつたん言葉を切り、すつと目を細める。

思わずたしなんでいた

魔女の姿が一瞬とことなく慈愛を帯びたものは見えた

「それに、思っていたより元気そうだつたから、よかつたなつて思つて。だつて最初に逢つたときのあなたは本当に死にそうに見えたんだもの。いくら私の薬でも、助けられる自信はなかつたわ」

この餓てあなたが死ぬといふことも
覚悟していただけども、魔女が
続ける。

自分の家に焼き入れられる人間が一
いっ死ぬかもしれない人間を
体どれだけいるだろうか。

わざわざ救いの手を差し伸べられる人間が一体どれだけいるだろうか。

かつたが、噂どおりの優しさをそなえた人だつた。

お礼を言わなければ、と思った。優しさを与えてくれた、この清らかな魔女に、お礼を言わなければいけない。けれど、なんといえбаいいのかわからなかつた。学のないあたしには、美辞麗句を並べて相手をおだてることも、心に響くような大層な台詞をはくことも出来ない。

「助けてくれて、ありがとうございます」

結局、口から出たのはそんな有り体な言葉。

あたしには、この深い感謝の気持ちをどうこう言葉に置き換えていいのかわからなかつた。

けれど、ちゃんと想いは伝わつた。魔女ははにかむように笑うと誠意を持つてあたしの言葉を受け取つた。

思えば、先程から魔女は笑つてばかりだ。その表情はいつも千変万化に変わつてゐるが、まるで幸せ以外知らないかのようにいつも笑つてゐる。その笑顔を見ているとなんだか心が解され、あたしもつられて口元が緩む。

と、そのとき玄関が開いた。思わず振り向くよりも早く、「ただいまーっ」という元気のいい声が聞こえた。

「あ、漸く帰つてきたわね。紹介するわ、あれが私の妹のロッキンツォン。歳は先月漸く十歳になつたところだけどあなたと同じぐらいかしら?」

パタパタと軽い足音が響いて、それからロッキンツォンといつ少女の姿が現れた。

「あ」と、ロッキンツォンがあたしを見つけて一瞬目を丸くし、それからぺこりと頭を下げる。

「はじめまして。サチ・アデライト・ジョンナル・マダリテリテールティング・メズアマティティテルト・ロッキンツォンと申します」

いや、それ名前なの!? ていうか、そんなの一度聞いたぐらいで覚えらんないよ!

「…………えつと、ただ単に、ロッキンションって呼ぶけど、いい？」

やや引き気味に尋ねたあたしに、なぜかまた魔女が笑い出す。本当に、よく笑う人だ。

「『ロッキンションさん』って呼んでください。あなたを助けたのは確かに私の姉ですけれど、実際にあなたを見つけたのは私なんですから」

なんと！

じゃあ命の恩人ということになるのか！？

あたしは姿勢を改めてもう一度深々と礼を言った。そこでロッキンションの持つている籠に気がつく。

「う、ロッキンションさん、その籠の中身って……」

「え？ あ、はい、これですね」

ロッキンションが籠を持ち上げ覆つている布を掀起る。

「あなたの体調をよくするための薬草ですよ。これを飲んで、元気になつていただけたらと思います」

なんていい人……！

あたしの中のパラメーターが一気に振り切られ、嬉しさのあまり涙まで出てきた。なりふり構わずロッキンションさんを抱きしめたら奇妙にくぐもつた声を上げられた。顔を上げると目を丸くしたロッキンションさんがいた。こちらを見つめ返している彼女はすぐにこつこりと笑うと、あたしの頭にポンと手を載せる。

なんだか、ロッキンションさんからとても懐かしいにおいがした。
きゅっとロッキンションさんにしがみつく手の力を強めてすんすん
とこおいをかぐと、ロッキンションさんは困ったように苦笑する。

「なんだか妹が出来たみたいですね」

ロッキンションさんはそうこうで、離れよつとしないあたしを見下
ろす。

昔から、きょうだいが欲しかった。孤児だつたあたしは親切な村の
人たちのおかげで今日まで飢えることも凍えることもなく幸せに暮
らしてきたけれど、血のつながった家族というものに思いをはせた。
どんなに求めても作り上げる事のできない、生まれついてしか『え
られる事の無い親愛の絆』というものが欲しかった。

だから、思わず甘えてしまう。甘えられるときに甘えておかないと、
本当に人肌が恋しくなったときに寄りかかる相手がいなくなつてしまつよつな気がして。

「姉さん、これ、頼まれてた薬草」

ロッキンションさんがあたしを貼り付けたままえつちりおつちりと
魔女のほうに移動して、魔女に籠を手渡す。魔女に話しかけるとき
のロッキンションさんの口調はあたしに向けるときの丁寧なものと
違い、しゃわか碎けたものだ。

「それも何かの薬になるの？」

とあたしが尋ねると、魔女は水道の水で薬草を洗いながら否定する。
というより、水道があることにあたしは驚いた。普通水道というの
はお金持ちの家だけに配備されているもので、豊かさの象徴だ。そ
れもそのはず、川から一個の家庭に水を引くだけで街のあちこちを

改造しなければいけなくなるのだから莫大な資金が必要になる。
驚いたあたしの視線に気がついたのか、魔女が地面を指差す。

「こ下に地下水脈があるのよ。ただ単にそこから水を引いただけ。
全部先代の魔女が自分の手でやつしたことだから、お金はかかっていないわ」

「そ、それこそすこいじゃない……!?」

どうして地下水脈の場所がわかるのだろうか？

地面の下に水脈があるかどうかなんて普通の人にはわかりっこない。
相当地面を掘り下げないと見つけることが出来ない地下水脈なんて、
何十年かに一度偶然で発見されるような代物だ。

けれど、ライビビに住む人間はそれに対する答を持ち合わせている。
魔女だから。

人と自然との間に立つ、調停者にして**交渉人**。
ネゴシエーター

神の存在が否定され宗教が忘れ去られた、この歪で平和な世界において唯一、人ならざる奇跡を起こせる存在。

魔女の役割というのは、本来は薬師ではない。

ライビビ全体を占める、森という雄大で漠然とした意志に対し、人間が恩恵を授かるためにいる者。

他の国人間に説明しても、きっとわかつてもらえないだろう。でも、あたしたち森国ライビビに住む人間にとつては、森というのはなくてはならない絶対のものなんだ。森には意志が存在するなどといふと、他国の懷疑主義者はそろつて異議を唱えるだろうけど、じつさいに森に暮らしてみればわかる。木や狐や、栗鼠といった小さな生命ではなく、もっと大きな何かが森を支配していることに。そして人間はその恩恵を受けているから生きていけることに。

魔女は、その何かと人間の間に立つものだ。何かをかつて信仰の対

象であつたとされる神と例えるならば魔女は巫女。神に愛された寵児。

そもそもが、人間に生まれながら人間とは違つ存在なんだ。やがて、魔女はあたしの前に小さなコップを差し出した。その中にはさつきの薬草を使って作った緑色のどろりとした液体が入つている。

「今度のやつは、結構不味いわよ。まず最初に苦味が来て、それから喉の奥から吐き気がするわ。最後にヘドロのような生臭いにおいがする」ともあるけど、それはあなたの体質しだいね」「

・・・・・なんとも不味そうな説明をありがと。おかげで飲む気がうせました。

「そ、それでこれは何の薬?」

あたしが尋ねると、魔女は氣まずそうに手をそらす。仕方なくロッシンションさんのほうを見たが、彼女もまた同じように目をそらした。

あたしの手の前には、異臭を発する小さなコップが一つ。なんだかコップの周りからどよ～んとしたオーラが漂つてこむ気がする。薬といつよりかはむしろ劇薬だ。

何とか飲まずにする方法はないだろうか。と思考を巡らし、すぐに思いつく。

「あ、ほら、あたしあお金持つてないし、魔女さんことつて薬は商売道具なんだから、この薬も他の人に売るべきよ

「え? お金? じゃあ懐に入つてるのは何なの?」

きょとんとした顔をした魔女に言われ、あわてて懐を押された。鎌をかけられたのだと気がついたのは、その直後だった。

魔女がわざとらしく両眉を上げ、唇の端を上げる。

「そもそも、お金をとる気はないわ。行き倒れの人にはここまでするほど私は守銭奴じゃないもの。その薬は・・・・・まあ、なんていうかしらね、その、あれよ、あれ、あれだから。そうよね、ロッキンツォン？」

「え？ あ、私？」

いきなり話を振られたロッキンツォンさんは、あたしに抱き着かれたままの状態で一瞬あわてて、それから一瞬だけ真っ直ぐにあたしの目を見て、

「惚れ薬よ」

といつて、すぐに目をそらしやがった。

本当に一瞬だけだったな・・・・・

・・・・・しかも惚れ薬つて・・・・・・

明らかに嘘だとわかる台詞に顔を引きつらせて、漸くロッキンツォンさんから離れ、あたしはコップを口元に持つていく。

ちらりと魔女を見る。

・・・・・なぜか応援された。

ちらりとロッキンツォンさんを見る。

・・・・・なぜか拌まれた！？

「ぐくり、と喉を鳴らして意を決したあたし。

沈黙があたしたちの間を流れた。

五、四、三、二、一、

ぐいっとカップを傾ける。途端にあたしの口の中に苦味があふれ、

あたしはしわくちゃのおばあさんみたいに顔をしかめた。意思に反して吐き出しそうになる口を必死に押さえながら、なんとか胃袋に流し込もうとするが、何かが喉につかえているみたいにそれを邪魔する。

あたしは涙目で魔女のほうを見て、吐き出してもいいかと視線で聞いた。

「イングリット。その薬はね、とても大切なものの。その薬を飲めないで死んだ人や、その薬が開発される前だつたせいで殺された人が数え切れないほどいるの。あなたがここにいてその薬を飲めるという事はとてもありがたい事なのよ。その薬がとてもなくまざいことはわかつていいわ。でも、ねえ、イングリット。私はあなたに生きて欲しいの。あなたみたいな小さな女の子がどうしてこんな森の中で倒れていたのか、私には想像する事しかできないわ。けれど、きっとあなたがこの森に来たのはとても悲しい事だと思うの。私のところに来るのは病人ばかり。たまに健常者が来ても必ずその影には病気の一文字が付きまとっている。そしてそのうちのいくらかは元気になつて帰つて行つて、残りのいくらかは　　この館で死んでしまう」

あたしの事からは完全に話がそれていたが、魔女の台詞に、あたしは薬を含んだまま聞き入つてしまつ。

そうだ。

この歳若き魔女は、妹と一人つきりでたくさん人の死を見てきた。時には、あたしのように事情を背負つた幼い子供もいだらう。時には、つい患者に情が移つてしまつた事もあつただらう。

嗚呼。

お金がないから薬が飲めませんなんて、あたしはなんて失礼な事を言つたのだろう。

魔女は、純粹に、真つ直ぐな気持ちであたしに死んでほしくないと

思っている。

なぜそんなにも、魔女は他人を思えるのだろう。

野垂れ死にしかかった子供なんて、助けなければいい。

ただ他人からもらうだけで、何も返す事のできない子供なんて、無視すればいい。

気づかなかつたといえばいい。知らなかつたと嘘をつけばいい。関係ないと主張すればいい！

なのに、魔女は手を差し伸べて。あたしの魂を温かい心でそつと包んで。

（切ない）

切ない。切ない。せつないせつない。胸が切ない。

あたしの心が震えて、声をつむぎだす。言葉にならない、意味のない声が。

だつて初めてだつた。

無用心に好意を振りまける人間が。

だつて初めてじやなかつた！

他人のために心を開く人間が。

嗚呼。

いつそのこと、あたしなんて助けないで欲しかつた。

ねえ、わかつてる？

あたし、ほんとは死にたかつたんだ。あそこで野垂れ死にたかつたんだ。

行きようと頑張つて見せたのは单なる悪あがき。

あんなところで少しぐらい頑張つたからつて、死ぬのはわかつてた。

あなたはあたしのためにあたしを助けたんじやない。

ただ目の前で人が死にかかっているのが我慢できなかつただけ。ねえ。

誰でも彼でも生きたいと思っているなんて思つてているの？

子供だつたら悲しい経験をした事がないなんて信じているの？

（生きて、）

そして何かいい事があるの？

（何かを我慢する必要があるの？）

（あたしなんか）

あたしなんか

（あたしなんか）

あたしなんか。

「イングリット、私たちを助けてくれるかい？」

村を離れるときに聞いた大切な人の声が頭に響く。

あたしが、初めて村の人たちに嘘をつかれたとき。

嘘だとわかつていても、あたしは頷かざるをえなかつた。裏切られたからこそ、村の人たちがどういう目であたしを見ていたかを知つてしまつた。

じわりと、目の前がにじむのがわかつた。

目の前がやみ色に染まる。

喉の奥から、熱いものがとめどなくあふれ出した。

腐死病。名前だけは知つていた。人の体が徐々に腐つたような黒色に染まつていき、数日で死に至る恐ろしい病氣だという話は、お世話になつていた家が開業医だつた事もあつて、時々耳にした。

「イングリットちゃん、ちょっと手伝ってくれる?」

階下から聞こえてきたおかみさんの囁太い声に、あたしは「はあい」と返事をして、友達の誕生日プレゼントのために編んでいた小さな手袋を放り出した。

あたしは、孤児だ。夫婦で旅をしていた両親はあたしがまだ四歳のころに山賊に襲われて負傷し、ほうほうのいで逃げ込んだ村で息を引き取つた。それ以来あたしはその村の人たちの中で育てられた。本来招かれざる存在だったであろうあたしに対し、村の人は誰一人として嫌な顔一つしなかつた。

彼らは、病気になつたときに医者がいないと大変だらう、貧しくても子育ての経験がある家に預けるべきだらうか、子供がいなくても裕福な家に預けるべきか、などと、あたしが村に来て以来彼らは何度となく集会所に集まり、たかだか四歳の子供一人のために額を寄せて話し合つた。結局、あたしは中年の医者夫婦のところに居候することになり、その家の二階にあたし専用の部屋が与えられた。

とんとんとん、と階段を下りていくと、おかみさんが鍋で医療品を煮沸消毒していた。

「ああ、漸く来たね、イングリットちゃん」

あたしを見つけたおかみさんはそういうて手招きする。

「そろそろだんなが帰つてくるはずだから、パン買つてきててくれるかい?白い大きいのがいいねえ。小麦のやつだよ」

おかみさんの言つ、「だんな」は文字通りだんなさんのリットさん
の事だ。この村唯一の医者の上、とても腕が立つのであちこちから
引っ張りだこで、いつも回診に行つてゐる。

おかみさんはあたしに小銭を渡しつつ、頭をくしゃっと撫でた。あ
たしはくすぐつたさにちょっと畠を細める。おかみさんの手から消
毒薬のにおいがするのはいつも事。そのにおいあたしの友達は嫌
がるが、あたしの大好きなおいだ。

元気よくドアを開けて、あたしは秋空の下を走り出す。両側の小麦
畠には麦がたわわになり、そろそろ刈り時だ。

いつもバターの香りのするHマーさんのパン屋に飛び込んで、あた
しは「小麦の食パンください!」といつ。それこそパンのよつにふ
つくらした顔のHマーさんは、あたしがパンを買いに来るといつも
おまけをしてくれるので、現金だと思いつつもあたしも惜しげなく
愛想を振りまく。

Hマーさんがおまけしてくれたチラコパンをほおばりながらパン屋
を出たあたしはそこで「だんな」さんと鉢合わせし、驚いただんな
さんは、

「

・・・・・え?

視界がぐるりと暗転する。

小麦畠が真っ黒に染まり、腐つたよつなにおいが辺りを覆つ。

「

リット

グリット

「イングリット!」

そこには、いつもどおりのだんなさんがいた。
けれど、その日はいつもと違い、優しさの代わりの恐怖をたたえて
いた。

がしり。と、想像もできない力で肩をつかまれ、あたしは思わず怯む。心臓が高鳴り、つる草でも絡みついたかのように体が動かなくなる。

恐怖を感じた。

「イングリット」

後ろから別の声が聞こえて振り返ると、焼きたてのパンをたくさん抱えたエマーラさんがあった。身じろぎしようとして、何か奇妙なものに触れて、あわてて身をすくめた。

ぐによりという、不気味な感触。背中の上をぞわぞわと恐怖が駆け抜け、心臓が痛いぐらに高鳴る。

「イングリット」

右から、漁師のゴーラルさんの声。

「イングリット」

左から鍛冶屋のシムちゃんの声。

みんな、黒かつた。

強烈な酸の臭いにあたしは両手で鼻を覆う。

村のみんなの体が、濁った闇色に染まっていく。だらんと皮膚がたるみ、目は腫み、頬は垂れ、赤黒く膨れ上がった唇からはでこぼこの歯が見える。

「イングリット」

誰かが呼んだ。もう誰の声だかわからない。喉の奥から搾り出したようなその声は、あたしの頭の中でがんがん響く。

「・・・・・・」

あたしは耐え切れなくなつて耳をふさいでしゃがみこむ。けれどもあたしを呼ぶ声は絶えず、何かがあたしの体に触れるたびにあたしは嫌悪感で身震いする。

どれほど時間、そうしていただろうか。

気がついたら、焚き火に照らされたやや広めの建物の中にいた。粉臭いにおいに（ああそうか）と気がつく。ここは、村の集会所だ。村で栽培される麦をいつたん集めて王都へ出荷するための拠点で、隣に麦を挽くための風車小屋が隣接しているうえ、窓が小さいいで風通しが悪いから、秋のこの時期はいつも粉っぽい匂いが漂っている。

あたしが立っているのは、集会所の玄関戸口。そして集会所の中では、大人たちが難しそうな顔で話している。いつもの話し合いとは違い、集会所に入りきらないほどの大人數だ。普段の寄り合いでは見かける事がないお年寄りや、女人までも混じっている。

誰も彼も、体の一部に黒いシミのような跡がある。そのシミは、この数日徐々に体全体に広がつていて、ひどい人だと体の半分以上が侵されていた。

この村にいる、わたしも含めてたつた五人の子供はまだ幼かつたので寄り合いには参加していなかつが、あたしだけは家が遠い事もあって、家に一人で置いておくのが不安だつたのかおかみさんとだんなさんに連れてこられた。

寄り合いは、いつも以上に緊迫していた。

剣のある低い声が集会所の中を行きかい、声を荒げる人も何人かいた。

一体どんな話し合いが行われ、どうこう提案がなされようとしていた。

るのか幼いあたしにはわからなかつたけれど、「腐死病」「焼き払
い」「国王軍」という物騒な言葉は、状況が理解できない分余計に
あたしを不安にさせた。

ときどき村の人たちはあたしのほうにチラシチラシと田配せし、や
がて村の指導者的立場の口々さんがあたしのほうに近寄ってきた。
決して他人に己の苦労を悟らせるような事のない口々さんには珍し
く、憂いを帶びた顔。

「イングリット、助けてくれるかい？」

今でも覚えてる。
口々さんの必死の声も。
媚びへつらうようなまなざしも。

「イングリット、腐死病といつ言葉を知つていいかい？」

普段とは様子の違つ口々さんに、あたしは身を引いた。慌てたゴル
さんがあたしの両肩をがつしりとつかむ。
やや弾力に欠けた、その手で。

「腐死病というのはね、恐ろしい病気なんだ。村の人たちはお前を
除いてみんな、それにかかつてしまつた」

「…………どうして、あたしだけかからなかつたの？」

村の人はみんな腐死病にかかつたのに、どうしてあたしだけがかか
らなかつたの？

あたしは聞いた。

同じものを食べて、同じところで同じように暮らしていたのに、何
であたしだけが仲間はずれなのか

と。

村の人たちはみんないい人達だったけれど、この村の生まれではないあたしはいつも仲間はずれにされる事を怖がっていた。一人だけ疎外感を感じる事を恐れていた。この村にあたしの家族はない。おかみさんとだんなさんも、結局はあたしとは血のつながらない人たちだ。

いつかはこういつ日が来るとわかつていた。村の人たちと自分が違う存在なのだとまざまざと自覚させられる日が来ると知っていた。

「イングリット。今からお前に村の全財産を預ける」

「すぐに」、口々さんが何を言おうとしているのか気がついた。病気にかかっていないあたしを、病気にからないうちにこの村から出す気だ。

「収穫前のこの時期だから、銀貨のような大きな貨幣はないが、それでも銅貨三千枚はあるはずだ。それを持って、森の魔女のところに、腐死病を治す薬を依頼してきて欲しい」

あたしは、この村の人間でないから。

一緒に死のうとは、言ってくれなかつた。

口々さんは、あたしが腐死病がどんな病気は本当に知らないと思つていたんだろうか？

村の人たちの余命は、せいぜいあと三日、長くても一週間。子供の足では、魔女のところまで行つて帰つてくる間にみんな死んでしまう。

「そうしたら、みんな助かるの？」

棘の「もつた口調であたしは口々さんに聞いた。

「ああ」

それに気づかず口コさんはこいつ、こいつと笑う。
うつすらと腐敗臭がした。

「イングリットが頑張れば、みんな、助かるのさ」

生まれて初めて、嘘を吐かれた。そしてその嘘は、あたしと村の人達との関係を、決定的に壊した。

第一章。まだ、少女イングリット

「つまり、イングリットの村の人々がみんな腐死病にかかったのになぜかあなただけ難を逃れて、その上薬を依頼しに行くところ名田で村を追い出された、というわけね」

一日遡つて翌朝である。

あのあと、結局あたしは意識を保ちきれずに眠つてしまつたらしい。一体その間にどういうことがあつたのかは知らないが、気がついたらあたしはふかふかのベッドで寝かされていた。雨と泥でぐちゃぐちゃだつたせいか、あたしはいつの間にか魔女やロッキンツォンさんとおそろいのやや質素な白い服に着替えさせられていた。空腹でおなかを高らかに鳴らしながら田を覚ますというなんとも恥ずかしい起き方をしてしまつたあたしは、なぜか床に並んだ大量の皿を片付けていた魔女と眼があつた。

さすがに魔女といわれるだけのことがある。

あたしが話をするまでもなく、どこからかあたしの村の情報を仕入れてきたらしい。

素直に感心したいものだが、えつちらおつちら皿を片付けているその姿ははつきり言つて間抜けだつた。

あたしは大量に皿が並んでいる理由について、一つ仮説を立ててみる。

「IJの部屋、そんなに雨漏りがひどいの？」

「え？ そんなことないけど。・・・・・ああ、IJのお皿ね。これは餌

「餌？」

「セリュ。ほら、アサさん、覚えてる?」

「アサ?」

「…………ああ、昨日あたしを食べようとした小動物か。あたしは」「見て自分で嫌な事はすぐ忘れる性格だから、もう少しで忘れる」とだった。

「あの子の餌よ」

「えええええーっ。どう考へても体積分以上食べてるじゃん!/? 一体どうこう買袋してるのよ!」

「あの子、大喰らいの上にグルメだからね。当然、あたしやロッキンツォンよりもいいもの食べてるし、ずぼらなくせに食事の時間にだけは厳しいし」

「だからつてありえないわよこの量はっ。一十皿以上あるじゃない!見てるだけで気分が悪くなつてくるわ!」

「まあ多少食費がかさむのは ああ、言い忘れたけど、起きたばかりであまり大声を張り上げないほうがいいわ。一時酸欠状態になつて気が遠くなるから」

そういうことは先に言つてほしい。あたしはすうーっと意識が遠くなりそうになつたところを根性で何とかこらえて、両頬をぱちぱちとたたいた。このあたしがこんなに簡単に気絶しかかるということは、やっぱり雨で打たれたせいで体力をかなり削られているみたいだ。

「それで、どうするの？」

唐突に魔女が話題を変えて、あたしは一瞬何の事かわからずに混乱する。

「腐死病に利く薬、私に依頼するの？それとも依頼しないの？」

「あ・・・・・・」

どう、しようか。

そのために、ここまできたんだ。

けど、もひ、薬を必要としている人達はない。

「薬は・・・・・・」

あたしは、返答に窮した。即座にいらないとは答えられなかつた。頭では無駄だとわかつていても薬を作つて欲しいと思つていて自分がいる事に違和感を覚えた。そのまま、ずいぶん長い事逡巡した。皿を片付け終わつた魔女はその間一言も発せず、ただじつとあたしの顔を見つめていた。

やがて導き出された結論。

「あたしは、あたしの目的を果たすまでよ

確かにあたしは村の人たちに裏切られた。けれどもそれによつてあたしは助けられて、生き延びる事ができた。だから、たとえ無意味な事だとわかつていても今度はあたしが村の人たちを助けるために努力しよう。それが、彼らの弔いになるだろうと信じて。

村を出るときにはかばん一杯に詰まつていた銅貨も、途中で親切な旅人に銀貨四十枚と交換してもらい、その後立ち寄つた商館で金貨

十枚と交換してもらつた。商館での両替では多少手数料を取られたとしても、あたし自身はこの旅程で一切そのお金には手をつけていない。秋の森には果実や水が豊富だつたし、雨が降つたりしなければ森の中で野宿するのも悪くなかった。何度か、空腹や寒さにまけかかつたこともあつたけれど、これは自分のお金じゃないと言い聞かせて我慢した。

いくら森の魔女の薬とはいえ、それだけのお金があれば村の人全員分の薬代を払うぐらいたやすいことははずだ。だが、あたしが金貨を魔女に渡すと、魔女は一瞬変な顔をした。

「ねえ、イングリット。確か元は銅貨二千枚だつたわよね」

「三十五三十一枚よ。何度も数えたから、間違いないわ」

「…………そ…………う…………」

何を思ったのか、魔女は手元の金貨をもてあそびながら黙りこくれつてしまつた。

「ひょっとしてあたし、両替したときにお金くすねられてる？」

ふと沸いた懸念。

だが、魔女は否定した。

「銀貨に換えてもらつときとか、金貨に換えてもらつときとか、相手の人に事情を話したりした？」

「ん？ そりやまあ、いくら平和な世の中とはいえこんな小さな女子が一人で旅をするなんてそういうことだから、興味本位から聞かれたりはしたよ。腐死病って言うとそれだけで差別されたりするからそこらへんは適当にぼやかしたりはしたけどさ。故郷で疫病

がはやつてあたし以外みんな大変な状況だから、薬を買いに行くんだって感じに」

「そう。だからかしらね」

「何が?」

「銀貨つて。銅貨何枚分の価値だか知ってる?」

また唐突に話題が変わった。

あたしは元の銅貨の枚数と銀貨になつたときの枚数から、ざつと暗算する。

「八十枚ぐらい?」

「はずれ。銅貨百枚で銀貨一枚分よ」

そういうて、魔女は金貨一枚、指の間に挟むように掲げる。

「そして銀貨五枚が金貨一枚分の価値と等しいわ。もつとも、金貨つて価値が高すぎで逆に使いにくいから、大抵銀貨を金貨に両替する人はいないんだけどね」

「それじゃあ……」

「金貨十枚という事は、銅貨五千枚分もの大金よ。あなたの身の上に同情した人たちがこつそり寄付してくれたおかげで、額が膨れ上がったのね」

そういうて、魔女は優しく笑つた。

世の中には、いい人がいる。

それは村の人たちだつたり、旅人だつたり、商館の館長だつたり、森の魔女だつたりする。

あたしは、そういう人たちに支えられているから生きている。それはひょっとしたら、とてもすばらしい事なのかもしれない。感動に打ちひしがれるあたしをちょっと見た後、魔女は、不意に表情を暗くした。

「依頼は、確かに受理したわ。……でもね、これじゃあ駄目なのよ」

「え……駄目？ 駄目ってどういふこと？」

「腐死病に利く薬草は蒼人参と言う植物の実から作られるの。でもその実は春にしか取れない上に、その植物の特性から群生する事がない、さらに言うと生薬でないと薬効は著しく低くなるのよ。今はもう晚秋だから、薬を作ろうにも最低でもあと百日は待たなければいけないわ」

「…………そんな…………」

「もちろん、今現在保存している分がないわけではないわ。一度この実から作った薬草を北の氷国に運んで氷漬けにして、それから再輸入したものならまだ少しなら残つていい。でもね、そちらは絶対量が少ないうえに移送費用と保管費用が馬鹿にならないからね。金貨十枚じゃあ一人分も買えないのよ」

「…………」

魔女の言う事は正論だった。

ただ薬を作れないといわれただけなら駄々をこねていただろうわたしのために、薬がどうして高いのか、その理由までも理路整然と説明してくれた。

確かに金貨十枚は大金だ。あたし一人ぐらいなら一年は遊んで暮らせる。でも、魔女の薬はあたしが普段眼にしている薬とは額が違う。森の魔女は、王様や、国の偉い人たちが買いに来る様な格の違う薬師だ。

「金貨十枚で、どのくらい買えるんですか」

でも、あたしも引き下がるわけには行かなかつた。

正直、魔女は優しそうだから、頼み込めば少しは譲ってくれるんじやないかという甘えがあった。お金持ち相手の商売ばかりしている魔女だから、少しごらいただで薬をくれても懐は痛まないだろうと、いう打算もあつた。

魔女は、冷ややかな目であたしを見た。
親しみのこもつていない、見下した視線だった。

「金貨十枚分あなたに譲つて、その薬であなたは何をするの？誰かを助けられるの？」

「た、助けるつて・・・・・あたしはただ、村の人たちを・・・・・

「もう、死んじゃつてるのに？」

かつとあたしの頭に血が上る。それは分かっていても言われたくない事だった。

怒鳴り散らそと口を開きかけたあたしを制するよつこ、魔女が言う。

「あなたのエゴのせいで、私のところまで充分なお金を持ってきたのに薬を買えずに死ぬ人がいるとしたらどうするの？」

ずん。と胸が重くなつた。

金貨十枚でも一人分も買えないほど貴重な薬。

あたしがここで薬を買つたら、その代わりにあたしの知らない誰かが死ぬかもしない。それで村の人が一人でも救えるならいい。一人救つて、一人見捨てる。それなら大切な人のために見ず知らずの人を犠牲にしてもいいだろう。

あたしはただ、自己満足のために薬が欲しいだけだ。

自分は村の人のために頑張つたという、全力を尽くしたという免罪符が欲しいだけだ。

そうでもしなければ、村の人たちを見捨てたあたしはあたし自身を許す事ができないから。

（金貨十枚もあるなら、それで生まれ変わればいいじゃないか）

あたしの中で誰かがささやく。

（それだけのお金があれば、子供でもかくまってくれるやつがたくさんいる。ここでごみにしかならない薬を買って文無しになるよりもそつちのほうがずっと村の人たちへの恩返しになるんじゃないのか？）

薬を買って、誰かが死ぬなら。

あたし自身が幸せになつたほうが、村の人たちも嬉しいだろう。

考えれば考えるほど、薬を買わない方向に意志が傾いていく。

誰かのために薬を買わないという、新しい免罪符を手に入れたあた

しは、急に目の前の金貨が惜しくなった。

そもそも、村の人たちはあたしのためにこのお金を用意してくれたんだろう。保護してくれる人たちがいなくなつても、わたしが食べるのに困らないようにお金を残してくれた。それがわかつていたからこそ、あたしは意地でもそのお金には手をつけなかつたし、他人のお金だと言い聞かせてきた。

プライドが許さなかつたのだろう。

所詮、自分を支えていたのはそんなくだらないものだつたんだ。

「魔女わん」

しばらくぶりに、あたしは魔女としつかり目を合わせた。

そして、魔女の手の中に在るきらきら光るお金に視線を落とす。

「そのお金の分、次にお金が足りなくて薬が買えない人が来たときに、薬を譲つてあげてください」

・・・・・あれ？

・・・・・・・・・あれれ？

今あたし、なんか間違つたこといわなかつた？

思考と発言がかみ合わずに一瞬きょとん。

それからあたしは小首をかしげた。

魔女が笑つて、あたしの頭を撫でてくれた。

「そうね。あなたなら、そういう答えを出すかもしれないわね」

うんうんと頷く魔女。

いや、だからあたし、言い間違えただけなんだつてーー！

この話はもうおしまいといつよいに、魔女がまた話題を変える。

「何日か、この館で休んでいきなさい。家事を手伝う事を条件に食費とかはこいつらで面倒を見てあげるから」

「…………はあ

もはや自分で勝手に結論を出してしまっている魔女に、あたしは仕方なく頷いた。

数日後。

まだ体が弱っていて固形物の消化を受け付けないらしいあたしの胃袋のために木の母乳を混ぜた栄養ドリンクを飲んで、それから例の苦つがい薬も飲んで、あたしは漸くベッドから降りる許可を得た。許可とはいっても制限付で、魔女かロッキンソンさんと一緒にやなれば外に出たらいけなかつたり走り回つたりしたらいけなかつたり、まるで重病人に対する扱いであたしはちょっと体力をもてあまし気味。

そんなあたしの様子に気がついたのか、昼食のあとで魔女が森の散策に誘つてくれた。

「散策といつより、搜索ね」

「え？ 誰かを探しに行くの？」

「そんなところ。マサさんつて言つんだけどね、アサさんと同じ猫つて言う動物で、盗癖がある上に方向音痴なのよ。マサさんが遭難してしばらく帰つてこないのはいつもの事なんだけどそろそろ冬も近いからね。薬草を採集するついでに家に連れて帰ろつと思つてね」

「猫？それってあの絶滅危惧種に指定されている猫の事！？」

あたしは驚いて目を見開いた。

あたしの記憶が正しければ、歳経た猫はやがて人を食べるようになるという噂から何十年かまえに乱獲が行われたはずだ。その結果今では百匹も残っていないといわれ、半ば伝説の存在と化している。でもあの愛らしい姿からは到底人を食うような印象は・・・あ、そういうば出会いがしらに食べられかかったな。

それにあの猫、普段から一十皿完食するぐらい大食らいだし。

「アサさんの大食らいは別に猫全般に共通する特徴じやないわ」

まるで心を読んだかのように魔女が言った。

「それに、家の猫は一匹とも変わってるのよ。本来猫は方向感覚がよくって、半日ぐらいの絶食で飢え死にしかつたりはしないんだけどね」

半日食べないでもう飢え死にかい！
そりやあ変わってるよ！？

「もつとも、私だってアサさんとマサさん以外の猫にはあつた事がないから猫の特長なんていうのもいい加減なものなんだけどね・・・

・・・あら？」

ふと、そこで魔女が顔を上げた。

あたしもその視線を追うと、なぜかエプロンをつけてハタキを持ったロツキンツォンさんがいた。

「わざわざ見送りに出てくれたの？珍しいわね」と、魔女。

ロツキンツォンさんは魔女のほうを向いてちょっと呆れたような表

情をすると、あたしのほうを向いていった。

「イングリットさん。ぐれぐれも体調にはお気をつけて。体に痺れを感じたり、指先が急に冷たくなつたりしたらすぐ森の魔女に言うんですよ」

・・・・・ん?

ずいぶん症状が細かいな。

体調が悪くなつたらすぐ言つたらわかるけど、どうして体が痺れたり指先が冷たくなるつてことが前提なんだろ?」

あたしは疑問に思つて後ろを振り返つたが、もうロッキンツォンさんはいない。わたしとほんの何歳かしか離れていないのに、一人前の働き手としてこの館の事を切り盛りしているのだ。その事にあたしは少し敬意を払いしたい。

「あの子つたら、それだけのことを言つためにわざわざ顔を出したのかしら?私がついているんだから患者の体調悪化に気づかないなんてことはないのにね」

あたしと魔女は、顔を見合わせて笑つた。

改めて魔女と一緒に森の中を歩いてみると、まるで整備された道があるときのように簡単に移動できる事に気がつく。魔女以外ほとんど誰も入らない森なのだから未開地といつても語弊はないようなどろなりに、平らな道を歩くのと大して変わらない速度で移動できるのは、きっと魔女と一緒にいるからだ。そのため、あつという間に魔女の館が見えなくなつてしまつた。

時刻はそろそろ三時過ぎのはずだが、森の中にはいる限り、時刻はほ

とんど関係ない。木々はうつそうと茂り陽光をさえぎり、立ち込める蒸気が熱気を帯びてむしむとしている。森国といつてもここまで植物に侵食されている場所というのも珍しい。なれない環境に、あたしは少し居心地の悪さを感じて身じろぎした。

「どうしたの？ 眠いの？ それともお腹が空いたの？」

あたしの動きに反応して即座に魔女が尋ねてくる。

・・・・・てか、まるであたしが食べる事と寝る事しか考えてない単細胞生物みたいな言い方は止めてほしい。

ここ何日か一緒に過ごしたんだから、いくら他人とはいえ魔女もあたしの生活パターンぐらい知っているだろに・・・・・朝起きて、ベッドに寝つこうがつたまま薬を飲んでご飯を食べて寝して、昼食の後に居眠りをして夕飯を食べて就寝・・・・・・

・
・・・・・あれれ？

あたしはがくつと肩を落とした。

本当に食べて寝るだけしかやっていない。

一応、ベッドから出る事を魔女から禁止されていたと言い訳できなくもないけど、それにしたつて意気地がしゅんと萎えてしまつ。

「ま、まあ、果物ならいくらでも食べ放題よ。ほら」

意気消沈したあたしに、何を勘違いしたのか魔女があわてて手を差し出す。

すると、まるで示し合わせたかのように上の木々から林檎が一個、魔女の手の上に落ちてくる。

嗚呼。

やつぱり、魔女っていいな。

わざわざ木に登つてぐだものを採つてこなくとも、魔女が望むだけ

で森がいくらでも果物を分けてくれるんだもの。

あたしは魔女から受け取った林檎をかじりつつ、遠い目になった。
森の魔女といえば、誰もがなりたがる憧れの職業だというけど、そ
れも確かに頷ける。おいしい果物は、誰にとつてもあがないがたい
魅力だ。

「・・・・・普通、魔女になろうという人は林檎ではなくて権力
に魅力を感じているのよ」

魔女があきれつつも訂正を入れる。

・・・・・心読まれた！？

「森の魔女ほどの薬師になれば当然注文に来る顧客も選ばれた人た
ちになるわ。魔女は大臣とか宰相とか国王とのつながりも強いし、
他の国にもコネがある。だから大抵森の魔女になりたい人って言う
のは権力は欲しいけれども努力をするのが嫌いな無責任な人たちね」
もつとも、今の時代努力をしたり苦労をしたりしてまで権力を得た
いと思う人は少なくなってしまったけどね。と、魔女が、森の魔女
について説明してくれた。

「魔女さんも、権力が欲しかったから魔女になつたの？」

「んん？私は違うわよ。ただ単に先代の魔女に憧れたつてだけのこ
と。・・・・・あと、成り行きかな？」

「成り行き？」

「ええ。昔私が住んでいた町でも、腐死病が流行してね。私も両親
を亡くしちゃつて、まだ赤ん坊だったロツキンツォンを育てるため

に先代の魔女のところに身を寄せたのよ。・・・・・ああ、今思
えがあれが全ての始まりだつたわ」

なぜか遠い目をする魔女。

いろいろ思つとこりがあるらしい。

「じゃあ、あたしと同じような境遇だつたつてこと?」

「ええ。見方によつてはそうなるわね。もつとも、数年に一回は腐死病で滅びる村や街があるんだから、私やあなたと同じような境遇の人なんて沢山いるでしようけどね。ただ、まさか自分の村で腐死病が蔓延するとは思わなかつたけれど」

「・・・・・それも、そだね」

あたしは大きく目を瞠り、ややあつてうつむいた。
「きょう
村の、」
口々さんの声が頭に響く。

イングリットが頑張れば

たいていの人にとって、腐死病は自分とは関係のない事なのだ。でも、当事者たちにとっては運が悪いという言葉では済まされない。いくら魔女が腐死病を治せる薬を作れるからといって、魔女は大陸中でたつた一人しかいないんだし、どんなに魔女が頑張つても作れる薬の量には限界がある。それに、魔女の言葉が正しければ腐死病の薬草自体稀少なものらしい。

誰かが頑張つたところで、救える命の数なんて高が知れている。

・・・・・うん、わかっているつもりだ。精一杯頑張つても、どんなに手を伸ばしても、指と指の間から零れ落ちていつてしまふ命があるのは避けられない。それは魔女のせいでも他の誰のせいでも

ない。

でも、それを仕方がないとしてしまつのは、違うと思う。精一杯頑張つても助けられなかつた命だつて、何とか助ける事ができた命だつて、どちらもかけがえのないものであつたのには変わりがないんだから。

「ごめんなさいね」

ふいに魔女が言つた。

イタ力の村の人たちを助ける事ができなくて、ごめんなさいと。

魔女は、そういう人だ。

自分の力の及ぶ限界まで頑張つて、それでも助けられなかつた命に對し、ごめんなさいと涙を流せる人だ。

その優しさは、ロッキンソンさんに通じる。きっと、先代の魔女もそういう優しい人だつたんだろう。

「魔女さんは、悪くないよ」

まだ何かを言おうとする魔女を制して、あたしは言つた。

「あはは。なんかさ、魔女さんって言つてもあれだよね、普通の人と変わらないような気がする。村にいたときにはあたし、魔女って言つと森の奥で隠棲生活を送つてゐ悟りきつた人みたいなイメージがあつたのに、田からウロロだよ」

「魔女について今流れている噂のほとんどは、先代の魔女のものなのよ。魔女の姿つて言つと腰の曲がつたしわくちゃ顔のおばさんみたいな感じがするでしょ？それは明らかに先代の特徴だし、薬を作るときにサンバを踊るつて言つのも先代の魔女が編み出した技法なの」

「ちょっと待つて！その噂は聞いた事がないわ！？しわくちゃのあ
ばあさんがサンバを踊りながら薬を作るの？それつてある意味・・・
・・・」

想像開始。
想像終了。

「・・・・・絶対見たくない光景だわ」

むしろそんなファンシーなばあさんが森の魔女なんてやつてたから、
魔女に『近寄りがたい』みたいな印象があるんではないでしょうか。

「知りたくなかった魔女の実態、というより噂のまんまの怖そうな
おばあさんのほうがまだよかつたわ・・・・・・」

弱弱しく頷くあたし。

気がつくと口元に手を当てた魔女がぶるぶると震えている。
笑ってる！？

「ちょっとー何でそこで笑うのよ！？魔女って言いつと結構憧れの存
在だったのよ！あたしの夢を返してよ！－！」

「まあ、あなたの夢が壊れてしまったのは残念に思うわ。でもそれ
を私に当たるのはお門違いじゃないかしら。誰かに責任を取らせな
いと気がすまないなんて・・・・・そんなの、ただの横暴よ」

魔女の言っている事は正論だった。
でも納得は出来ない。
正論は必ず人を傷つける。
ここに引いたらイングリットの名が廃る！

「じゃあ魔女さんは一度も誰かに文句を言ったことないって言つたの…！」

「ないわね」

即答！？

てか、嘘でしょ！

「魔女さん！」

あたしは断固とした抗議の意味をこめて、魔女の前に立ちふさがつた。

一体何事かといった感じで、魔女が目を丸くする。

その魔女に向かつて、あたしは大きく息を吸つた。

普段なら、いくらあたしが抗議したところで、魔女に軽く言いこめられて終わるところだ。けれど、今回は例外だつた。

突然、あたしたちのすぐ横の木が倒れなければ。

ぎいいい、ばたんっ！

そんな、立て付けの悪いドアみたいな感じで腐つた巨木が倒れ、一瞬、誰もが硬直した。・・・・・いや、あたしと魔女の一人だけだけだ。

「あ、あつぶなー。なによこの木、もう少しで怪我するところだつたわ」

「一応、謝罪しておくわ。森の管理人たる魔女として」

森の魔女が淡々と言つて倒木に近づく。

「ああ。 やつぱつ」

やがて魔女は言つた。

「やつぱつって何？ その木が何か変なの？」

「イングリット。 とりあえずあなたは館に帰りなさい」

「へ？」

唐突に言つ魔女に、 あたしの頭には「？」が浮かんだ。

「森林散策は中止よ。 薬草もまだ全然採れてないけど、 そつちの予定も後回しね。 ほり、 見てみなさい」

森の魔女に促されるままに、 倒木に近づいたあたしは、

「な、なによ」「れー？」

倒木に深々と突き刺さつた矢を発見した。 矢は真つ直ぐに、 魔女のいた場所に向いている。 枯木がたまたま倒れたから、 その矢が防がれたのだ。

「ま、魔女を殺そなんて考える人がいるの ー」

「安心しなさい。 彼が自分の登場シーンを派手なものにしようとして悪質ないたずらをするのはいつもの事だから」

「彼つて…………もつ少しで魔女さん、死んでたんですよ……。」

そういうて、ハタと氣づく。

魔女がこんな事で死ぬわけがない。森にいる限り、全てが魔女の味方だ。

「森が傷つくからやめてくれとはいつも言つてるんだけど、聞く気はまったく無いようなのよね。書意は無いんだろうけど……。と、言つわけだから、イングリット」「アーティ」

魔女は、ぐるりと辺りを見回しながら言つた。

「あなたがここにいると無駄に話がこじれそつだから、先に館に帰つていなさい」

「でも、帰り道わからないし……。」

「案内をつけるわ」

魔女がそういうと、どこからとも無く狼の群れが現れる。総勢数百匹、これが魔女の言つ「案内」なのだろう。

案内なら一匹でいいだろうとか律儀に心の中で突っ込みを入れながら、あたしはとりあえず狼の群れについていく事にした。

なぜ、あたしがいると話がこじれるのか、その理由には気がつかず。

第一幕。魔女、ハル

狼の遠吠えが小さくなつてこゝのを聞きながら、私はほつと胸をなでおろした。

これで、あの子は大丈夫だらう。ロッキンシオンならすぐに事情を察してイングリットを匿つてくれるはずだ。

まだ、あの子が自分の秘密に気がつくのには時期が早すぎる。選択肢が一つしかなくとも、あの子にはちゃんと、自分の意思で歩むべき道を選んで欲しいから。

でも、彼女がどういう選択肢をとるかはわかつてゐる。彼女は私と全く同じ道を歩んでいくべきだ。

私は軽く溜息をつくと、森の一方を睨みつける。

「今日はまた、ずいぶんと地味な登場ですね、殿下」

私が皮肉を言つと、木々の間から私と同じ年の男が現れた。

「まあ、今日は先客がいたようだし、少々羽田をはずしそると兄上のようになつて『森の魔女のいる半径一千歩以内に立ち入り禁止』の刑を食らつてしまふからね。愛のキュー・ピットにちなんで、僕の愛情がたつぱりこもつた矢を放たせてもらつたよ」

私は呆れて目を細めつつ、彼から目を逸らした。

目を逸らした理由は明快だ。

愛のキュー・ピットにちなんでいるといつ彼は、愛のキュー・ピットにちなんでこるとこゝ言葉のとおりに、なんとも変態的な格好をしていたからだ。

正確に言つと、一糸まとわぬ姿に羽根姿。

それこそ、愛の使者たるキュー・ピットを冒瀆してゐる。

「（）めんなさい」

とうあえず、私は目を逸らしたまま彼に謝る事にした。

「私はこれでも世界一の薬師のつもりだけど、あなたの思考回路は人類のそれとはあまりのもかけ離れていて、私でも治療は不可能だわ」

本当は意地でも治療してあげたいのだが。
あなたのためではなく、私のために。

イングリットを逃がしておいてよかつた。森の魔女がこんな変態と知り合いだと知れたら、それこそ森の魔女に関する頓珍漢な噂を流されかねない。

曰く、人里はなれた森の中で暮らす世間知らずの魔女は、裸で往来を歩くような男が好みらしい、とか。

「…………」

私は弱弱しく頭を垂れた。
嫌だ・・・・・

そんな噂を流された日には、魔女の沾券にかかる。

サンバを踊りながら薬を調合する先代の魔女を見るときのような好奇の視線が、今度は私に向けられる事になるんだろうか？
確かに魔女には変わり者も多い。社会と隔絶された環境で暮らしているせいか、先代の魔女を初めとしてサンバだつたり、ゴスロリだつたり刻の声だつたり、頭を抱えたくなるような微妙な性癖を持つ傾向が、たしかに、代々の魔女には、ある。

でも、そこに「ヌード趣味」なんていう破廉恥な性癖は、付け加えたくない。年頃の女の子として。

とりあえず、そのためには田の前の男を闇に葬らなくてはいけない。私は固い決意をこめて、ぐつと手を握り締めた。

幸いな事に私はこの男を私の前から消し去るステキな呪文を知っている。

ただ、これは本来最終手段だ。

あまりに効果絶大すぎるので、普段は使わない事にしている。

「殿下、公務はどうなされましたか？」

しかし、彼は既にこの呪文に対する防衛呪文を会得していた。

「ふふん」

と、まるで鼻歌を歌うようにしながら彼が背中の羽根から取り出しだのは一枚のスマギク紙。

それをこちらに向かつて差し出しているところを見ると、受け取れとこう事なのだろう。

私は目をそっぽに向けたまま慎重にじりじりと彼に近づいて行く。彼の体温で微妙に生暖かくなつたその用紙には、ライビビ王国の宰相の印が押してある。保管に適したスマギク紙を使う事といい、どうやら正式な公文書のようだ。

「『大陸暦1006年海老月六日。本日、怠惰でぼらりで怠け者のライビビ王室第七十七代国王が三男、イーマ・ライビビ王子殿下が先一ヶ月分の書類公務を全て一日で片付けてしまう』という、世界の終末が目前に迫っているとしか思えないような奇行に走ったため、非常に、とても、むちゃくちゃ遺憾ながら闇下の魔女の館で休暇をとりたいというワガママを阻止する事ができず、ちゃんと仕事が出来るならサボるうとせずについつもまじめにやれよ糞王子とか思いながらもここに王子が一週間の休暇を取ることを認めます』と書いて

ありますね」

一度音読した後、私は、田をこすつてから何度も見直したが、本来あるはずのない田の前の手紙が消える事は無く、ついでに視界の隅の変態男も消えてくれちゃつたりはしなかつた。

公文書偽装の可能性もまじめに考えてみたが、平民出身の宰相閣下独特の乱雑な言葉遣いは紛りつこともない本物だつた。

「殿下、お付の方々はどうしました？護衛もなしでは危ないでしょう」

「お、魔女殿が私の心配をしてくれるか！？」

いや、むしろあなたみたいなアブナイ奴が野放しになつていい事のほうが私は心配だ。

こんなのが一応王子だと他の国に知れたらこの国の品位を疑われてしまつ。

「宰相たちはな、うん、いろいろとつるさいから何とか振り切つてきた。まあ、こぞとなつたら魔女殿が守つてくれるだらうから、護衛などいらなか！」

すっかり当てにされていた。

こういつとき、普通は男性が女性を守るものではないだらうか？私は彼が私を守つてくれているといふを想像してみた。

想像開始。

想像終了。

死んでもそのような事態は避けなければいけないと心に誓つた。

「さて、魔女殿。まだ他に言いたい事はあるか？」

「…………とつあえず服を着てください、殿下」

「…………とにかく腰に手を当てて胸を張る彼。

「は？」

「『は？』じゃありません！大体今が何用だと想つてゐるんですか？見ていろひつちが寒くなりますー？」

「ああ、そういうとか。大丈夫だ。これくらいなんとも無い。例え世界が氷で凍ざされたとしても、この魂は魔女殿の愛で暖かく包まれているー」

私はツワツワのよつなまなざしで彼を見た。見てしまつてからあわてて、田を逸らした。汚れる汚れる。

「…………とりあえず、お引取りください、殿下。私の館には今、重病患者が保護されてゐるんです」

「ふふふ、魔女殿はシャイだな。私と田を合わせることすらも氣恥ずかしいと感じるか。…………ああ、それと、重病患者とこののは先ほど魔女殿と一緒にいた女の子の事か？いつの間にいなくなつてしまつたようだが」

「いたいけな少女があなたの毒牙にかけられる事の無こよう、避難させたんです」

ふんっ。と、彼がむくれたよつて腕を組む。

そして、ふいにまじめな顔になった。
やや間があつて、彼が口を開く。

「あの娘、よもやイングリットといつ名前ではなかろうな？」

空気が、止まつた。

違うと即答したかつたけれど、口が動かなかつた。

「先月、イタ力の村が腐死病に滅ぼされた」

「…………」

「秋の刈り入れの時期だったのが幸いしてな、王都から麦の買い付けに行つた商人たちによつてすぐに腐死病の蔓延が確認、対処されたが、一人だけ、イタ力の村に籍を置くもので死体が確認できなかつたものがいる」

腐死病に対する対処、といふのは村中に油をまいて焼き払つてしまふ事だ。例え生存者がいたとしても、ぐるりと村を取り囲む兵士達によつて皆殺しにされる。村は、文字通り灰になる。

今のところ、それが腐死病に対抗する最も有効的な手段といわれている。

まだ幼いイングリットは、そこらへんのことは知らないようだつたが。

「私はイタ力の村を焼き払つときに、現場責任者をやりされた」

私は思わず、はつと息を呑む。

彼の言つてゐるのは、それくらいの言葉だった。

「今でも、彼らの苦しむ声が頭の中で響いている

彼の格好はともかく、彼の言葉は恐ろしくはつきりと森の中に澄み渡つた。

「なあ、魔女殿。実のところ、どうなのだ？腐死病は絶対に対処が出来ない病気なのか？王都からここまで大人の足で五日。イタ力の村のほうが多少距離が近いとはいえ、あの歳の少女が一人で旅をするとなると、二週間はかかるだろう。それなのになぜ、あの少女は死んでいないのだ？腐死病に対して先天的に免疫を持つている人間というのがいるのか？」

矢継ぎ早に質問してくる彼。

それは、微かに見出した可能性に何とかしてしがみつこうとしているようにも感じられた。

けれど、その質問に対する答えは、否だつた。

「潜伏期間、つて知ってる？」

私の問いに一瞬、呆けた顔をする彼。

「医療用語で、感染から発病までの期間の事だろ？その間に病原菌は人間の体内環境に適応したり、増殖をしたりする。潜伏期間中に病気が発見できるかどうかが生死にかかわるような事もあるそうだが、腐死病に関しては潜伏期間なんてものは無いはずだぞ・・・・いや、また、あるのか？腐死病にも潜伏期間が・・・・まさか、あの娘がそうなのか？」

相変わらず、聰い。

人は見かけによらないとは、よく言ったものだ。

「正確に言えば、潜伏期間というわけではないけれどもね。腐死病は数日のうちに生物を死に至らしめてしまう恐ろしい病気だけれど、逆に言えば感染者がすぐに死んでしまう分、感染範囲はあまり広がらないのよ。だから大抵、感染エリアにおいて一人ぐらいは感染から発病までに一定の期間がかかるの。その間にその人が行動して、感染エリアが広がっていくのよ」

私は、彼が理解できないだらうと半ば確信しながら言った。病原菌の特徴と呼ぶにはこれはあまりにも異常すぎるし、私の乏しい語彙力では簡潔に説明する事はできない。

彼はしばらく考えるように腕を組んでいたが、やがてぽんと手を打ち鳴らした。

「つまりはこういうことか。人に感染して繁殖する腐死病は、人がいなくなってしまっては繁殖が出来ない。だから人の命を奪うだけ奪いつくした後、他の街に移動して新しい獲物を獲るために、最低でも一人は生かしておくのだな」

「…………なんでなのかしら、私がそれを理解するのに何日もかかったという事は別にして、少なくともすっぽんぽんのあなたにだけは理解されたくなかったわ」

別に彼に悪意があるわけではないのだが、侮辱された気がした。屋外全裸破廉恥男よりも自分の頭脳のほうが劣っているといわれた気がして。

「では、改めて聞く。腐死病に対抗する手段は、本当にペッタラしかないのでな？」

ベツタラといつのは、イングリットが結局買つのをあきらめた蒼人参の隠語だ。

ベツタラの実は春先にしかならず、大抵腐死病が蔓延するのは秋だ。それに、ベツタラの生殖数はあまりにも少なく、ベツタラが腐死病に有効だと他の薬師たちが知つたら、我先にと乱獲してすぐに絶滅してしまうだろう。

森の魔女が腐死病に効く薬の作り方を公開しないのは、薬の利益を独占したいからだと薬師の間でひそかに囁かれているのは知つている。でも、腐死病に対する唯一の対抗手段を失つてしまつては、今度こそ手詰まりになつてしまつ。

「その通りよ。腐死病を直す手段は、ベツタラしかない。腐死病の蔓延を防ぐ手段は、焼却処理しかない。死期を延ばす手段は、・・・・・まあ、いくつかあるけどね」

「・・・・・・そうか。いや、詮無い事を聞いた。結局、人間にとつて腐死病は抗えぬ天災なのか・・・・・・つて、マテ」

口で言うのと同時に、手でも待てといつてくる彼。

「腐死病の死期を延ばす手段なんものが、あるのか？」

「あるわよ。一番単純なのは、体の、腐死病に感染した部分を焼くなり切るなりする方法。あとは新陳代謝を薬によつて低下させる方法や首から下を水中に沈めて生活するという方法も場合によつては有効よ」

驚きとも、喜びともつかない表情をする彼。だがすぐに、警戒のそれへと変わつた。

「では、なぜ魔女殿はそのやり方を実行しない?」

五
五
五
五
五

彼が筋縄でいかないのは、こういう所だ。

「よつほど初期症状で無いと通用しないとこつだけの話よ。後は、
イングリットのように潜伏期間中の患者の場合でないとね」

仕方が無いので、わたしは正直に答える。

「…………ふうむ。まあ、魔女殿のことだから審意あつてのこ
じでせなこと思つが…………」

彼は、まだ納得がいかないのか眉をしかめていたが、渋々ながらも引き下がってくれた。

今更思い出したように言ひ、今更思い出したように私は目を逸らした。

「ですから、服を着てください、殿下。まさか服を持っていないと
ということはないのでしょうか？」

もつていなない可能性も充分あつたが、幸いにして、彼は「ぐりと領いた。

彼がいそいそとはあつた服を見て私は大きく溜息をつく。とりあえず、裸に黒マントという趣味が私にない」とだけは、弁解しておこう。

第三幕。魔女の妹、ロッキンション

姉の事を尊敬しているかと聞かれたら、私はしばし首をかしげた後、
肯と答えるだろう。

姉は空気が読めない性格で、意思疎通能力が低く、誰かと話してい
るのを傍からみていて気を揉む事がしばしばだが、魔女なのだから
仕方が無いといえばそれまでの事だし、逆に姉が普通の街娘のよう
な調子で誰かと会話していたらそれこそ頭でも打つたのかと心配し
てしまう。

つまりは、姉には姉の生き方がある、ということだろう。だが、そ
れを見習いたいかという事と尊敬しているかという事は、違う問題
だ。

それはともかく、今現在私たちの館に宿泊しているイングリットと
いう女の子は、ずいぶんと姉の興味を引いているようだ。どこが姉
の琴線に触れたのか、姉はイングリットをやたらと気にかけている。
具体的にどうこうと例が挙げられるわけではないが、生まれてから
今までの全ての時間を姉と共有してきた私は、姉のわずかな態度の
違いでそれがはつきりとわかった。

そして、姉がイングリットに興味を持った事よりもさらに驚いたの
は、姉がイングリットを次世代の魔女に育て上げようとしている事
だ。魔女にするということは、いろいろなしがらみを与えるという
事に等しい。だから、姉がこうもあつさりと後継者を決めてしまつ
たことは私に戸惑いをもたらした。

私には、イングリットと並ぶ少女が魔女になれるほどの器を持ち合
わせているとは思えない。魔女というのは王侯貴族とも渡り合つて
いかなければいけない職業だ。扱うお金の単位も、命の重みも、並
みの薬師とは比べようにならないぐらい違う。それこそ一度の診察

ミスが十年単位で国に被害をもたらしてしまつ。

腐死病で身寄りを失つた、右も左も、自分の進むべき明日もわからぬ少女にいきなり魔女になれといつても、プレッシャーに押しつぶされてしまつだけだらう。あの子には、ただの人間として普通の人生を送つてもらつべきだ。

私は、そんな事をつらづらと思いながら洗つた食器を棚にしまつてゐる。

家事の出来ない姉に代わつて、この家を人が住むにふさわしいレベルに保つのが私の役目だ。この家は人の世と森との玄関口。塵一つ積もつていてはいけない。

石段が塗めばすぐに新しいものに取り替えて、木の床が濡れれば撓しならぬいうちに拭いてしまう。そういうた細かい手入れは当たり前として、勿論汚れないようにするための手間も惜しまない。土足など言語道断だ。

まあ、とはいつても姉はしおちゅう靴を脱ぎ忘れたまま上がりこんでくるし、どちらかといえば落ち着いた性格のわたしがいくらほんわかと諭したところで姉は全く私の言う事を聞く気が無いようなのだが。

「ロッキンツォンさん！」

「靴を脱いで足を拭いてスリッパを履きなさい今すぐにといつてゐるそばから床を泥だらけにしないでくださいそれは私に対する宣戦布告と受け取りますよつ！！」

私がほんわかと諭すと、イングリットは一瞬呆気に取られた後、あわてて靴を脱いだ。
なぜ呆気にとられたのだろう?
不思議だ。

「それで、どうしたのですか？そんなに顔を引きつらせて……。
・それでは一見かわいい顔も台無しですよ」

イングリットと視線を合わせるために、少しだけ私は前かがみになつて尋ねた。

「魔女さんが、『』で撃たれて、それで木が防いで、それで……。
・」

慌てて、両手をばたばたと振りつつ途切れ途切れの単語をつむぐイングリットをとらあえず落ち着かせようと、私はしまいかけていたコップに水を注ぎイングリットに手渡す。

「イングリット。深呼吸をしましょ。吸つて、吐いて、吸つて、
吐いて……。」

すう一つ。
はあ一つ。
すう一つ。

「……イングリット、落ち着いたなら深呼吸を止めてもかまわないんですよ。そんなに必死に深呼吸してたら、深呼吸の意味

「ありませんから」

「この子、素直というかいい子というか……。
私がやめろというまで深呼吸をずっと続けるつもりだったよつだ。
ぴた。とイングリットが深呼吸を止めて、それと同時に体の動き求める。

「…………」

「…………」

沈黙。

やがてイングリットが声を放った。

「む、む、む、」

「…………イングリット、深呼吸というのは息を吐いたという
で止めるものです。息を吸つたといひで止めてしまつたら、苦しい
でしょ？」

優しく、諭すように言う。

イングリットがいい子過ぎて、私の趣味にストライクゾーンなのは
大歓迎なのだけれど、こんな性格をしていては将来他人にカモられ
るのは目に見えている。

「ふは。」とイングリットが息を吐いた。

「要するに、貴方と魔女が森を散策している途中、何者かによつて
魔女が襲撃を受けた。矢による攻撃は魔女を守るのとした森の倒木
によつて防がれたものの、何がどうなつているのかわからない。お
まけに魔女は貴方だけ先に館に戻るよう指示した。そうですね？」

イングリットが田を丸くする。

あれだけ切れ切れとした単語では何を言つてこるのか伝わらないと、
イングリット自身自覚してはいたのだろう。

「別に驚く」とでもありませんよ。ただ単に、そういう愚かなこと
をするような方に心当たりがあるだけのことです。安心してください
。いつも事ですし、彼だって本気で魔女を狙つて居るわけでは
ありませんよ」

「で、でもっ、魔女さんはあたしだけ逃がしたしつー。」

「別の意味でアブナイ方なのですよ。名田上はーの國の第三H子つ
てことになつていますが、城にいるよりも市井の繁華街にいる事の
ほうが多いお方でね、ちゃんとその才能を正しい方向に使えば優秀
な方なのですが、忌憚無く才能を發揮するのは己の趣味と道楽のた
めだけとこ、ちょっと困つた方なのですよ」

そういつて苦笑すると、イングリットは愕然としていた。一体何に
驚いたのだろうか？

私は自分の言動を振り返つた。

「ひょっとして、王族だというのがそんなに驚きでしたか？この國
の王族など、他国に比べたらたいしたことがありませんよ。水国の
国王や砂国の中室などは指一つ動かすだけで百人の人間の命を左右
できるほどです。それと比べれば、どれだけこの國の王族が庶民的
な生活を送つて居るかがわかるでしょ？」

「いや、分かんないからー王子様の日常生活とか知らないしー。」

ああ、そういうわれればそつた。

魔女の関係者という立場上、どうしてもイングリットとは違う視野になってしまつ。イングリットからすれば、王子の日常生活について当たり前のようになつて話されても、ただ当惑する事しかできないだろう。

この子がもし、本当に魔女になりたいといつながら、いつこいつとも知つていかなければいけないのだが。

いずれにしろ、当面のところはこの子には関係の無い話だ。

「要するに、この国の王子様は、貴方が思つてこらるよつもずっと夙々くな方だというだけの話ですよ」

これで、この話はおしまい。

再び皿をしまいながら、私は次の話題を持ち出す。

「イングリット、貴方、料理はどの程度出来ますか？」

「え？ あ、お粥とか、おひたしとか、野菜スープとか、ポテトサラダとかなら作れます。あと、簡単なお菓子とかも」

「なぜ作れる料理といつて一番最初にお粥が出てくるのでしょうか。・・・・・ ああ、そういうえば貴方の育つた家は個人病院を経営していたのでしたね。ところには病院食といつことですか」

「何で知つてゐるのー？」

イングリット、？然。

「貴方が寝言で、自分の育つた環境とか、この館に来る事になつた理由とかについて物語のようになつて語つていましたから」

イングリットの丸い眼が、さらに大きく見開かれた。あの語り口調からして寝たまま物語をつむぐのは初めてではないと思うのだが、どうやら本当に気がついていなかつたらし。

「まあ、それはいいとして、ケーキをつくたことは?」

イングリットの眼がいきなりきらつと輝く。そしてきらめくと…・・・・・とこうよりかむしろギラギラとした目をしたまま、ぐいっと私に詰め寄る。

「ケーキを作るの? ひょっとしてチョコレートケーキ? !」

私が一步退かる。

そんな私を物凄い形相で見上げるイングリット。じつやらケーキの事になると目の色を変える性格らしい。
なんだかイングリットの意外な一面を知つてしまつた気がした。

「ええ。本来は貴方と姉が帰つてくる前に作つてしまつ予定だつたのですが、予定などずれて当たり前のものですし、貴方と一緒にケーキを作るというのも、楽しいかもしません」

満面の笑みを浮かべたイングリット。果たしてイングリットは、ケーキを作るのが好きなのか、食べるのが好きなのかはわからないけれど、作つて食べるのだからどちらでも変わらないだつと思つ、私もイングリットににっこりと笑いかける。

「一緒にチョコレートケーキを焼きましょ!」

そのとき、だつた。

館の門が勢いよく開かれると同時に、どやどやという、閑寂な魔女の館にはふさわしくないほどの数の足音が聞こえた。

一瞬、私もイングリットも何が起きたのかわからず、呆然と門のほうを眺めて

その足音が一体何を意味するのかに気がついたときには、既に手遅れだつた。

館の中にまでその足音が進入してきて、やがて銀色の鎧を纏つた兵士達の姿が見えた。

「いけない！ イングリット。隠れなさい！ ！」

私がそう叫んで、一瞬呆気に取られたイングリットが慌てて奥の部屋に入り込むよりも、

「 その娘を捕らえなさい！ 」

という胸のむかむかするような声にしたがつて一人の兵士がイングリットを抱え上げるほうが一瞬早かつた。

兵士の手から逃れようと手足をばたばたとさせるイングリットだが、大の男とイングリットでは体格が全く違う。結局イングリットの口がふさがれ、より一層強く拘束されただけで、無駄な抵抗でしかなかつた。

「 やれやれ、本来は王子殿下を連れ戻すためにきたのですが

私は声の主を睨みつけるが、所詮は私も子供。そいつは何事も無いよつて私の視線を跳ね返してくる。

「思わぬ大捕り物、といつわけですか、宰相閣下？」

私の声に、宰相は普段から鋭い目をさらに細める。

長い銀髪は背中の後ろまで伸び、まるで針金細工のようじにひょい長いからだ。眼鏡といつ高級品を身につけたその男に対して、今の私はあまりにも無力だ。

（お姉ちゃんがいれば、どうともなったのに）

そういう思いが頭をよぎる。

「あの一瞬でイングリットの顔の上に浮かんだわずかな黒いシミを見つけてしかもそれが忌諱すべき腐死病の証だと気がついたのはさすがですね、宰相閣下」

イングリットが目を見開き、抵抗を止める。

彼女は自分が腐死病にかかっていると知らなかつたのだから、それは当然の事だ。

「それだけが、私のとりえですかね」

返事をするのも面倒だといつよつにそつけなく答える宰相。姉がいないうときの私など、彼からすれば取るに足らない存在なのだろう。このままではイングリットは殺されてしまう。宰相にとつて、腐死病が駆除で来るのなら一人の少女の命など安いものなのだ。

でもまさか宰相も今この場でイングリットを殺すようなことはしないだろ。ここは魔女のお膝元ともいえる館の中。魔女を敵に回すのが下策だといつことぐらいは宰相にもわかるはず。だが、それは逆に言えば、ここで私が身を引けばイングリットの死は確定するという事。それだけはなんとしても避けなければいけない。イングリ

ットにはそれがわからないだろうから、イングリットのために何かが出来るのは、ここでは私だけだ。

姉がこの場にいないからこそわたしの発言力が弱いというのであれば、姉が帰つてくるまで時間稼ぎをすればいい。

しかし、それは不可能に近い。

宰相が王子を迎えるということは、あの変態王子はまたお付の人を放り出して一人でふらふらとここまでやつてきたのだろう。姉のような不器用な人が王子ほど雄弁な方をそう簡単にあしらえるはずがないから、薬草を摘みながら帰つてくるとして、下手をすれば日没だ。悠長に待つている時間は無い。

私は、ハタと顔を上げた。

何のことは無い。宰相がイングリットを殺せないような状況を作り上げればいいだけのことだ。腐死病に潜伏期間があることは一般にほとんど知られていないはず。判断力と決断力の高さを買わされて今の地位についた宰相は、そういう知識分野に限れば普通の人と大して変わりがない。

「その子供、イタカの村からやつてきたのですよ」

急に話題が飛んだことに、宰相は警戒の色を見せる。

「戸籍を確かめていただければわかると思いますが、その子供イングリットという名前でして、イタカの村からここまで一人で旅してきたそうです。賢明な宰相閣下ならその意味がお分かりになるでしょう？」

宰相と兵士達の顔が驚きにゆがむ。

イングリットほどの歳の子供の足でイタカからここまで歩いてくるのだとしたら、それだけで一週間はかかるだろう。一般に知られている腐死病の症状では、そんなに長い間生き延びることは不可能だ。

「姉はどいつも知りませんが、われわれはその子供がひょっとしたら腐死病に対する免疫を持っているのではないかと思つています」

「…………その子供を拘束して馬車に載せなさい。王都まで連れて行きます」

判断力だけがどりえの宰相は、とりあえずは私たちにとつて都合のいい判断をして、館を出て行つた。どやどやと、銀色の兵士達も続く。

ぶつん。と、緊張の糸が途切れ、私はペちゃりと床に座り込んだ。これで何とか時間稼ぎが出来た。後は姉が帰つてくるのを待つて狼で追いかけてもらえばいい。人の足と狼の足だつたら狼のほうがはるかに速いから、あつという間に追いついてイングリットを取り返す事ができるだろう。

私に出来るのは、姉を待つ事だけだ。手持ち無沙汰になってしまつたが、ケーキを焼くのは後回しだ。

一緒にケーキを焼こう。

そう、イングリットと約束したから。

第三幕。魔女の妹、ロッキンション（後書き）

次の更新は7/10です。

第四幕。H子、イーマ

「なあ、魔女殿。聞いているのか？なあ！」

私が服を着てからしばらく、森の魔女ことハルは一人でどんどんあるいつて行つてしまつて、森歩きに慣れていないわたしを全然気遣う様子を見せてくれない。それがハルなりの照れ隠しなのはわかるのだが、こうもそつけない態度をとられると、知らない人が見たらまるでハルが私の事を嫌がつてゐるかのように見えてしまつので止めてほしい。

まあ、そんなハルも愛らしいからといって、許してしまつてゐる私も同罪なのだが。

「なあ、魔女殿」

「…………」

「ま～じょ～の～」

「…………」

「ま～じょ～の～」

「…………」

「魔女殿」

とことん無視をされている。私はハルとおしゃべりをしたいしハルも絶対そうであるはずなのだが、ハルの場合その欲求は恥ずかしさで隠されてしまっている。

とりあえず、楽しいおしゃべりのためには田の前の女をふりむかせなくてはいけない。

私は固い決意をこめて、ぐつと手を握り締めた。

幸いな事に私はこの女の目を私に向けるステキな魔法を知っている。

ただ、これは本来最終手段だ。

あまりに効果絶大すぎるので、普段は使わない事にしている。ぴた。と私が足を止めて俯くと、気配でそれに気がついた魔女が怪訝そうにこちらを振り向く。

私はハルのことを、捨てられた子猫の視線でじいっと見上げた。思わぬカウンターattackに、冷ややかな表情を浮かべていたハルが大いに怯んだ。

「・・・・・

じいっと。

「・・・・・・・・・

ただ、じいっと。

「・・・・・・・・・

ひたすらにじいっと。

ハルが目を逸らした。

勝った！

こほんっ。と、じまかすように咳払いするハル。

「ええーっと、殿下。私としては殿下には早いところお帰り頂きましたのですが、まあさすがに貴方を一人でほっぽり出すわけにも行きませんし、貴方が振り払ってきたという宰相閣下以下お付の方々が到着するまでの間、森の館で休息をとることを認めます」

「素直に、私と一緒にいたいといつたらどうだ、魔女殿？」

「まったくもう、素直じやない！」

そこが、ハルの魅力なのだが。

「…………お付の人たちは、どこで振り払ってきたの？」

「その間は一体何なのだろうか！？」

まあいい。ハルの口調がフレンドリーなものに変わっただけでも、私は十分幸せだ。

「ここに一番近い村だが、それがどうかしたか？」

なぜだか知らないが、ハルの顔がほっとしたものに変わる。むしろ、どこまでも続く闇の中に一筋の光明を見い出した感じ。

「それじゃあ、一日ぐらしあれば追いつくわね

ああ、なるほど。ハルはひょっとしたら少ししか私と一緒にいられないのかと気を揉んでいたのか。一日は確かに長くは無いが、決して短くも無い。

一緒にいたいにもかかわらず宰相たちが来たらすぐ帰つてくれなどと照れ隠しをして、なんてかわいいのだろうか、私のハルは！だが、残念なお知らせがある。

今回、私は少しでも長い時間ハルと一緒にいたかったので馬車を使つてここまできたのだ。当然付き人たちも馬をあてがわれているし、宰相の目を逸らすためのおとりとして私の馬は付き人ともども村においてしまった。今頃は私の不在に気がついた宰相たちが魔女の館についているかもしれない。

私は歩調を落とした。ただでさえ慣れない森の中で歩きにくいくらいに、さらに意識してペースを落とすのだから龜の歩みのようになつくりな動きになる。もう照れ隠しに私を無視する事も無いらしく、ハルも私と歩調を合わせてくれた。館に着くまでが、私に残された幸せな時間だ。

「うううとき、時間がゆつゝと過ぎてくれたればいいと思つ。ゆつゝ、ゆつゝと。

「ところで、コスモスはどうしてこりの? やっぱりあのやんぢやは変わらない?」

暫く他愛の無い会話をした後、魔女殿は不意に思い出したように聞いてきた。「スモスどこのは、あの宰相の娘で私の許婚の事だ。

「ああ。全く困ったものだよ。しそっちゅう侍女の目を盗んで城下町に出ては夜まで遊びほうける。仕事をすれば優秀なのに、その才能を仕事をサボる方法にばかり忌憚無く發揮させる。父親があれだけ堅物なのに、一体誰に似たらあんな性格になれるのだろうか」

私が溜息をつくと、共感したのかハルも盛大な溜息をつく。憂いを帯びた表情のハルに私が見とれないと、私のほうを見たハルが再度大きな溜息をついた。

「確かに、あなたは鏡を持っていたわよね」

「うん?」

急に話題が変わった。

「まあ、王族というだけあって一応金だけはあるからな。魔女殿は持っていないのか? 透貨一枚ぐらいの値段だが」

金属をこれでもかというぐらいピカピカに磨き上げる技術は、この国には無い。だから鏡は全部フェリントナーからの輸入品だ。ちなみに透貨というのはダイヤモンドを削って作られた貨幣だ。国と国との間での商品取引は時にとてつもない額になってしまつたため、到底重くてかさばる金貨などではやってられないという事で作られた信用貨幣なのだが、金属製の貨幣と違い、形や大きさがまちまちのダイヤモンドの原石を削つて全く同じ規格を作らなければいけないというのは非常に困難を伴い、そのため透貨の値段というのは非常に高いものとなつている。

具体的に言つと、金貨一万枚で透貨一枚。

それこそ、透貨が百枚もあれば国家予算が賄える。

透貨を作るフェリントナーがその技術力だけでどれだけ甘い汁を吸つているかというのが伺える。

でも、ハルほどの収入があれば、鏡ぐらい持つっていてもおかしくはない。

「私は生憎。そういうつた外来品を買うツテがありませんもの。とにかく、鏡をもつているならば一度覗いて御覧なさい。コスモスさんが誰に似たのかわかるから」

よくわからなかつた。

鏡はあくまで己を映すためのもの。それを覗いたところで口スモスが誰に似たのかという問いの答えが返つてくるわけではない。

「魔女殿の言つてゐる事は、複雑過ぎるぞ」

私は苦言を申し立てた。

「似たもの夫婦つてことですよ」

やつぱり意味不明だつた。

どんなにのろのろ歩いても、歩けば前に進むもの。

あつという間に、魔女の館が見える場所まで来てしまつた。長い歴史の中で、魔女の館が出来るまでの経緯というのは忘れ去られてしまつたが、この色とりどりの館は、どう見ても悪趣味だと思う。

赤、青、白、黒、黄、紫、茶、灰、橙。

木々に囲まれてゐる事を考慮したのか縁だけは使われていないが、森の中にあつてそれは異彩を放つてゐる。

構造はのつぱりとした平屋根造。一見住み難そうにも見えるが、階層式に地下に広がつてゐるため案外住み心地はいい。

と、そこで妙な事に気がつく。

馬が、一頭もいないのだ。

ハルが家畜の類を好まないのは知つてゐるが、宰相たちはここまで馬で乗りつけたはずだ。奴らは私が館にいると踏んでいるはずだから、私が馬の嘶きに気がついてこつそり逃げ出さないよう馬に猿轡をかませていたにしても、これはおかしい。

まだ奴らが到着していないのか、あるいは

(とつぐに到着して、私を捕まえるための罠をしいたか)

あるいは事情が変わつて、一度この館に来た後私を置いたまま王都に帰つたという可能性も無きにしも非ずだが、そんな都合のいいことは無いだろう。仮にそうだとしたら、何が起きたのか私に伝達するため伝兵の一人ぐらいは残しているはず。よもや透貨のような高価なものを運搬しているのでもあるまいし、伝兵一人分の人員も割けなかつたということは無いだろう。

「妙ね・・・・・・」

ふと、私の横にいたハルも呟いた。

「臭いがしないわ。ロツキンツォンは私たちが森の散策をしている間にケーキを焼くような事を言つていたのに」

ふつ。と辺りが暗くなつた。一瞬遅れて、私たちは夕日が沈んだのだと認識する。

おかしい。何かがおかしい。

頭ががんがんと警鐘を鳴らす。急がなければいけないと本能が叫ぶが、何を急がなければいけないのかわからない。

暗くなつて、魔女の館もその様相を変える。

派手な色で塗られていた外壁はのっぺりとした灰色に染まり、冬を前にして枯葉色になつた芝生は人のいなくなつた廃墟を思わせ、なめした動物の皮を張つた薄暗い窓からは、本来もれてくるはずの生活の灯りがもれてこない。

ハルの足が、私を気遣う事を忘れかようにだんだんと早くなる。なだらかな道になつたため歩きやすくなつた私の足もそれにつられて

加速して

玄関のドアを開けたとき、まるでそれが合図だつたかのようにボッシュと灯りが灯つた。

思わず安堵の溜息をつき、ハルと顔を見合わせる。根拠も無く早とちりした事にお互い苦笑しながら、私はわずかに胸の中に残つてゐる不安をそつと払拭した。

と、何の前触れも無くロッキンション顔を出した。

「あ、お姉ちゃん、お帰りなさい」

おそれくはこれが姉の前でだけ見せる素の表情なのだ。ロッキンションはいつもの馬鹿丁寧な口調ではなく、幾分砕けたしゃべり方だ。

それにしても、普段ロッキンションはハルのことをお姉ちゃんと呼んでゐるのか。

だとしたら、将来私はロッキンションになんと呼ばれる事になるのだろう?

?お義兄ちゃん?・・・・・か?

(それはなかなか、悪くない)

「お姉ちゃん、すぐに狼を呼んでくれる?」

思わずやけた私を無視してロッキンションはいたつてまじめな顔で言つた。

「イングリットが宰相閣下に攫われたの。狼で追えば簡単に追いつくでしょ?」

「あ・・・・・・・・・・・・」

ガツンと、拳で頭を殴られたような衝撃。

宰相が腐死病の少女を見れば、どういふ反応をするのかなど田に見えていた。

適当に人気の無いところに連れて行って殺そうとし・・・・・いや、殺したのならば宰相たちがここにいない理由がわからない。それにロツキンツォンだって、腐死病の少女がどういう扱いを受けるかはわかつているだらうから、殺されるのだとしたらこうも落ち着いていられないだらう。

恐らく、腐死病の少女がこうも長い間生き残っている理由を調査しようとして、王城に連れ帰ったのだ。

私が来るときに乗っていた馬車ならば気密性が高いし、腐死病は空気感染で伝染する病気だ。城についてからも、人気の無い牢屋の密閉性を高めて閉じ込めておけば、感染の可能性は考慮に入れなくていいぐらいに低くなる。

ロツキンツォンの態度からして、腐死病の少女を城に連れ帰るよう仕向けてたのは彼女の入れ知恵だらう。彼女は、魔女が帰ってきてから狼で追いかけても十分間に合ひうつと思つたのだ。私が魔女の館に来る時は、大抵徒步だから。徒步の人間になら、飼育されていない野生の獣でも簡単に追いつけると思つたから。

都合がいいなんてとんでもない。

途方も無く、都合は悪い。それこそ、運の悪さは数え上げたら切が無いぐらいだ。

たまたま、馬で來ていたこと然り。

私が館にいると思った宰相が、馬の嘶きを抑えるために猿轡をかませていて、そのせいでロツキンツォンが馬の存在に気がつかなかつた事然り。

透貨よりも貴重な観察素材を運ぶために、宰相が伝言兵すらも割かなかつたこと然り。

宰相が館にいると思い込んだ私が、張ると一緒に居る時間を少しで

も稼働しようと館に帰るまでの時間を引き延ばしたこと然り。

「…………」

馬の速度ならば、ここから城まで半日だ。速度においては狼が勝つ
ついても持久力においては馬が勝る。いくらハルでも、物理的距離
と速度だけは覆せない。

「…………」

私は、ハルの服の袖をつまんで、謝った。

謝罪は後で聞くといつて狼に乗り込もうとした魔女に、現状を説明
した。

魔女の顔が、今までに見た事が無いほど鋭いものになつた。

とりあえず私は準備をするから、貴方は狼に乗つて追いかけなさい。
城に着いたら、イングリットのために可能な限りの手を尽くしなさい。

そういうハルに急き立てられて、私は狼と共に闇夜を疾る。
一体何の準備をするのか、それを聞く資格は私には無い。
ただひたすらに、ハルのために駆けるだけだ。

第五幕前半。王手の許婚、コスモス

何日かぶりに街に出てみると、晩秋ならではの「こたごたとした通り」が目に入る。もう肌寒い時期なのにむわっとした熱気が立ち込めているのは、そこで働く者たちの活気のせい。この時期は地方で収穫された穀物を運ぶための荷馬車で町中「こつた返」している。

わっちは市井の町が好きで、よく城下町に繰り出す。そのせいで侍女にこつひどくしかられる事もしそうだが、それだけの魅力が市井の市場にはある。

「婆、鳥の串焼きを一本じや」

わっちはそういうと、顔なじみの婆は「まだですかア」という顔をしながら串焼きを渡してくれた。城を抜け出すたびに個々の串焼き屋に顔を出すので、今ではすっかり常連になっている。

「婆、何か最近、面白いことはないか?」この時期だから旅芸人が來たりとか、してゐるだらう?」

麦商人は勿論の事、冬になる前にいろいろなものを揃えておこうと、いう地方からの人であふれるこの時期、そういう人たちは粗つた旅芸人やら、珍しい品物を売る土産物の露店なども立つ。だから、わっちはそういうことにやたらと詳しい婆に尋ねたのだ。

「そうですねえ、今年はイタカからの穀物が無いせいで少し閑散としていますからねえ。もう暫くはそういう旅芸人たちも来ないのではないかと思いますよオ」

やたらとおつとりした口調は婆ならでは。

イタカというのは毎年王都の穀物需要の大半を賄っていた村の名前だが、少し前に腐死病で滅びてしまった。

もちろん、そこで取れた麦も焼き払われてしまい、一時期、軽い食糧難に陥つて國の上層部は対策に追われていたらしい。らしいなどというと、侍女あたりから「他人事じやありません」などといわれそうだが、わっちにとつては他人事だ。わっちにとつて大切なのは自分の田の前にあることだけで、行つた事もないし知り合いかいるわけでもない畠だらけの村の住人がいくら死んだところで心が痛みようも無い。

「あー、そーでしたそーでした」

ふと、婆が思い出したように言つ。

「(ル)から少し裏路地に入つたところ(ル)、ほら、酒屋があるでしょ
オ」

ふんふん。酒屋で何か面白い事があるのだろうか。

「その酒屋の裏口を抜けて、真っ直ぐ進んだところのオ、突き当たりをさらに右に進んだところのオ、服飾店のオ、だんなさんがア、この前亡くなつてエ、奥さんのアリスが後を引き継いだんですけれどオ、」

「…………え？」

服飾店のだんなは、わっちの顔なじみだ。城下町のことをぜんぜん知らずにふりふりの夜会ドレスで街に出てきたわっちに、街娘の服を譲つてくれたのがその服飾店のだんなだった。

(「へんなつ、た・・・・・・?」)

そんな、死ぬような高齢ではなかつたはず。持病も無かつたし、食欲は人並みはずれていた。よく奥さんと喧嘩したと言つては繁華街で全店制覇する勢いでやけ食いしていた。

(あの、おじさんが・・・・・・?)

いつの事だらうか、最後に話したのは、

いつだつただらうか、あの店に最後に寄つたのは、

「それでエ、その奥さんがア、服飾店のよこのオ、空き地を買い取つてエ」

婆の話はまだ続く。

いい加減まどろつゝし。

「店を建て増ししてエ、それで服飾店をやめて宿屋にじよつとしてたらしこんですけれどねエ」

「え、ええい、とつとと興點だけ述べんかいー聞いとつてだんだんいろいろしてくるじやうがー」

このまつたりした所がこの人の味なのはわかっている。

しかし、我慢にも限度がある。

そしてわっかりの沸点は結構低い。

「エー」

「なにが『エー』だつ！ そんな枝葉末節まで説明されでは一体どこが話の要点なのかわからんであろう！ 『結論だけ言え、結論だけ！』

「それじゃア、その『酒の魔術師』がア」

「結論だけ言われてもわからんであろうが！ 酒の魔術師といつのは何者だ！」

「でもオ、コスモス様が結論だけ言えとおっしゃつたんですしね。噂といつのはあ、要約したり枝葉末節を省くから尾ひれがついてしまふんですからア、少しごらい時間をとつたとしてもオ・・・・・・・

」

「ま、待て。ちょっと待て」

わっちは婆の言葉をとめて周りを見回す。どうやら侍女はまだこの付近にはいなによつた。城に連れ戻されるのは暫く後になるだらう。

「ええい、いいだらう。枝葉末節まで付き合つひやる。婆、串焼きのお替りじや！」

わっちは景気よく言い放つた。

要点だけ言つと、服飾店の横の空き地にて、水を酒に替えてしまつといつ奇妙な男が居座つてゐるといつ事だつた。魔法などあるわけが無いのだから絶対に詐欺の類なのが、いろいろ言つてその酒を高い値段で売り捌いて法外な金を手にしているらしい。はなはだ許しがたい。ここは国王のお膝元とも言える王都。そのよ

うな詐欺師の居座つていい場所など裏路地にすらない。

（わっちがじきじきに裁きを加えぢやるー）

そう息巻いて向かつた件の空き地には、一体何事かというぐらいの人ばかりが出来ていた。

その威圧感に一瞬ビビった後、わっちは腹をくくつてその局地的過密現象区域に飛び込む。

（ええい、どかんか。こいつ）

両手で泳ぐように入垣を掻き分けて前に進んでいく。わっちの身分とか立場とかを述べれば手つ取り早く道を作れるのだが、相手の詐欺師にも警戒心を与えてしまつ。それでは意味が無い。

「こひらの酒は、万病に効く薬ともなり、死者をも生き返らせたとされる生命の酒。香りたつ果実の香りは奇跡の香り。さあさ、来て、見て、買って行くことだよ」

漸く、ベタベタな売り文句が聞こえてきた。そしてすぐに、黒い服を全身に纏つた男が、ぽつかりと出来た空洞の真ん中に座っているのが見えた。この男が、婆の話していた酒の魔術師だろう。酒の魔術師の見世物はちょうど今始まつたようで、彼の前に置かれた手桶には水がいっぱいに張られている。

「さあさ、ここの水にこじ注目。今からこれが果実酒に早代わりするからね

そういうてポケットから丁寧に折りたたまれた紅い布を取り出す魔術師。

(ああ、なるほど。考えたものじゃな)

一瞬、わっちは不覚にも感動した。

酒の魔術師の使っているトリックが解かつた。べらぼうな値段で売りさばいているといつても、仕入れ値を考えれば妥当な値段といった。口ハ丁手ハ丁で売りさばいても、これなら大して利益が出ないだろう。

(なれば、種を暴いて、晒し者にする事もあるまい)

自分の言動がどれだけの効果を持つていいのかは理解している。場合によつては、許婚のイーマにまで迷惑がかかつてしまつだらう。王族にとつて人望を失うことは命を失う事に等しい。イーマもわっちに負けず劣らず無鉄砲な性格だが、それでも王子だ。自分とは違ひ、いろいろな気苦労も耐えない。わっちは無力で、イーマを影から支える事もできないけれど、それでも足手まといにだけはなりたくない。

それにわっちは王都内の不正を正そうと思つてここにきたのであって、そこにいるのが単なる商人ならばわざわざ揚げ足を取つてその商売の邪魔をするつもりは無い。ここにきたのは、己の觀察力をひけらかして自己満足を得るためではない。

・・・・・ちょっと悪人をからかつて退屈しおぎをしてやるつとか、そういうことは全然思つていいのじゃ！

「・・・・・なんじゃうか、この、言い訳をした後のような居心地の悪い罪悪感は・・・・・」

わっちは一人じりちて、人ごみを後にしようとした、その時

「買つわーそのお酒、全部頂戴！」

まるでこりえていた言葉を一気に吐き出すよつた叫び声が、わっちの後ろから聞こえた。

わっちはその声に聞き覚えがあった。それは、とある服飾店を影から支えていた、気丈な女性の声だった。

酒の魔術師が、のそりと顔を上げる。黒く、よどんだ目をしていた。

「全部、ねえ。いいよ、それも。でも、払えるの？ 駄金で、金貨千枚」

一言一言、言い聞かせるようにする酒の魔術師。その言葉は魔法のように周囲に響き渡る。

服飾店主人の妻、アリスが躊躇したのがわかった。金貨千枚というのは、そういう金額だ。

「生命の水つて言つぐらーなんだから、そのへりこの値段じゃなきゃ割に合わないでしょーつー」

(わつか)

生命の水、死人を生き返らせることすらも出来る水。そんなものがあれば、真っ先にそれをほしがるのは最近大切な人を亡くした人たちだつ。

アリスは気丈だ。どれだけ辛くとも歯を食いしばって、周りには何事も無いように振舞う事ができてしまつ。そうやって我慢して、胡散臭い詐欺師が店の横に居座つて嘘としか思えない命の水なんてものを売り出しても、死んだ人は生き返ることが無いのだと自分に言い聞かせて我慢してしまつ。

我慢して、我慢して、我慢して。

水が酒に変わるのを見ても、奇術だと自分に言い聞かせて。その酒が飛ぶように売れているのを見ても、皆がだまされているだけだと信じて

限界が、来た。

自分はそんなものに頼らなくても、一人でやっていけるのだと、自分の旦那が死んでも耐えることができるのだと、自分自身をだまし続ける事に、限界が来た。

(これが、酒の魔術師の手口だったわけじやな)

生命という言葉に後押しされて、アリスが口を開く。

「店を抵当に入れれば、そのくらいのお金は簡単に手に入るわ」

酒の魔術師から見て、アリスの今の姿はどいつも映るのだ。ここには、悲しみを受け止めてこらえようとするアリスに蛆虫のようにたかり、アリスのことを何も知らず、知りうとせず、亡き夫の亡靈に執着して蘇りを妄信する、滑稽な未亡人の財産を吸い取くそいつしている。

ぶつんと、わっちを押さえていた何かが切れて、胸の奥底から熱いものが湧き上がった。

それは、イーマや婆や父に対してあふれ出すのとは真逆の感情。暗くでどろどろした、おぞましいもの。殺意すらもこもつた、憎しみだった。イーマのことが頭をよぎる。

あの、変態で心優しい王女に、迷惑はかかるだらうか？

(そんなこと、どうでもいい)

わっちの沸点は結構低い。いつもは怒り出しそうになつても、イー

マの面影が頭をよぎってわっちを諫めてくれるが、今日だけはイーマも役不足だつた。

わっち自身が、この怒りに身を投じたいと強く願つていたからだ。未練がましく脳裏をよぎるイーマの影を心の外に追い出す。

(イーマ、すまぬがな)

最後に、謝罪する。

(あの男を許したら、わっちは、大切な人たちへの気持ちにうそをつぶことになるんじや)

「じりじりと耳鳴りがするのは、猛る血潮のせいだろ?」

「待ちんしゃい」

酒の魔術師のほづを向き直つてわっちが一歩歩み寄ると、周囲の目が全部わっちに集められた。

いつもならその視線に心地よさを感じるところだが、今はそもそも言つていられない。怒りに身をゆだねつつも、怒りにおぼれてしまわないよう、全神経を使わなければいけない。感情に任せて殴りかかつてはいけない。それで切り傷ぐらいいはつけられるかもしれないが、こいつは切り傷が癒えて無くなるころにはまた同じことを繰り返すだろう。

とことんまでこいつを貶めて、可能な限り辱めるには冷静でいなくてはいけない。

(考えろ)

考える。才媛といわれたその知恵を、この男を晒し者にするためだ

けに搾り出せ。

「アリス、その薬で旦那が生き返ったとしても、店がなくなつていては路頭に迷うであらうが」

とりあえず、アリスを何とかする。酒の魔術師^{じゆじゆ}とき低俗な詐欺師にだまされていたのだと知れば、アリスは癒しよりも無いほど深い傷を心に負うことになるだろうから。

「わっちは、行きつけの服飾店がなくなつては困る」

ちよつと苦笑してみせながら本心を言つてみた。服飾店は王都に沢山あるが、この服飾店だけは、特別な存在だから。暗に、おじさんの思い出が詰まつた服飾店を辞めないでほしいといふ思いをこめて。

「じゃから、そ奴とはわっちが話をつける。アリスは店で待つておれ」

アリスが眉をしかめる。何か言おうとする前に、わっちが口を開いた。

「ライビビ^{ライビ}、イーマ・ライビビの許婚としての、これは正式な命令じやぞ」

あえて、いつもおじさんと言つていたのと同じ言い方をしてみた。わっちはこう言って我慢を押し通してはおじさんを困惑させていた。周囲がどよめく。結構わっちの名乗りの効果は大きいようだ。

「それと、服屋がいきなり宿屋なんぞやつたといひで人が入る訳が

無いじゃね。アリスの飯の不味さはわっちが保障するぐらじゅからな」

立ち去るうとしたアリスの背に、そう声を投げかける。相手に聞こえるように、けれども独り言のよう。

アリスなら、これだけ言えば立ち直れる。旦那の面影を、命の水などではなく共に過ごした服飾店の中に見い出して、それを頼りに生きていける。

「次は、おぬしの番じゃが」

アリスがいなくなつたのを確認して、わっちは酒の魔術師のほうに向き直つた。

いつたん飲み込んでいた憎悪の感情をもう一度吐き出す。けれども今度は、簡単に自分を制御する事ができた。

「わっちも解せんのじゃが、ぬしは水を酒に変えるとう売り文句で酒を売りさばいているのに、先ほどから見ていて主が水持つていてる様子は無い。何でじや？」

「な、何を言つのかな？水ならいい、この桶に入つていいんじゃないか」

そういうて後ろに詰めた桶の山を示す詐欺師。

「ほつ、それが水じやつたか。しかしあわせにここまで水を汲んでこなくとも、王都には公共の水路が沢山ある。どうせならこう水路のそばに店を構えたらよからう」

わっちが衆人觀衆の中指摘すると、詐欺師は怯んだように顔をしか

めた。「確かにそれもそつだ」という囁き声が聞こえる。

…………いや、わっちはじに指摘されるまで本気で気づかなかつたのか、こいつら。

まあいい。人を疑う事を知らない純粹な奴らなのだと思い込む事にしよう。

「それはそうと、わっちはじと喉が渴いてな。酒はいらんから後ろの水を飲ませていただきたい。案するな。後で飲んだ分ぐらいの水は汲んできてるから」

「いや、そ、それは……」

「清酒でもあるまいし、王都において水が高価なわけがあるまい」

ぴしゃりと指摘してやつた。すっかりおびえきつた詐欺師が「ひつ」と情けない声を上げる。

そう。

『酒の魔術師』の使つてゐるからくじは簡単。

清酒を張つた桶を用意し、水だと偽つた上で布にくるんだ染色料の粉をこつそり混ぜているだけ。清酒はそもそもこの国の酒ではないから観客の中にそれと気づける人はいないだろうし、じたごたじた町の中では酒の臭いは他の臭いにまぎれて薄くなる。

ただ、清酒の値段は高い。他国から輸入してくる費用と、詐欺がばれて投獄されるリスクを考えれば利益は薄い。人をだましていたのが事実でも、こいつがつけていた値段は清酒としては妥当なものだ。この詐欺師が明らかに法外な値段をつけたのは今この瞬間、アリスから店を奪い取ろうとした瞬間だけだった。

(もつとも、最初からそれだけが目的だったのじやろうがな)

奪い取つた服飾店を誰かに転売し、自分はその利益を手にして闇へと消える。

「清酒は、米といづ穀物から作る水のよつに澄んだ酒じや。もともとからこやは水を酒になど変えていないのじやよー。」

傍観者どもに説明する。敗北を悟つた詐欺師が逃げ出でようとするが、そのうちの一人に取り押さえられた。

ごつつい腕に拘束された詐欺師が、抵抗できない猫のよつにわっちの前に連れてこられる。

「貴様の罪は片手の指では足りぬほどある。一つ。清酒を命の水と偽つて売つたこと。一つ。空き地を不法占拠したこと。一つ。届出をせずに無断で店を構えた事。一つ。酒の売買に際し酒税を納めなかつたこと。一つ・・・・・・」

わっちは詐欺師の罪状を一つ一つあらためる。
抑揚無く言つわっちは声に、詐欺師はだんだんとうなだれていく。
頭をたれているのは、己の罪深さを悟つたからではあるまい。

「そして、おぬしの犯した最も大きな罪は、わっちの友を貶めようとした事じやー！」

わっちは、決め台詞を言つたためにいつたん言葉を区切る。

「貴様など、詐欺師の鏡じやー！」

・・・・・む？

なんか、ちょっと違つことを言つたような気がする。

神妙な顔でわっちは言葉を聞いていた周囲の者達が一斉に「は？」

といつ顔をした。

「え、ええい。そ奴を警備隊に突き出せー。」

・・・・・無理矢理押し切ることにした。

第五幕前半。王女の許嫁、コスモス（後書き）

コスモス登場。一番好きなキャラです。

詐欺師が連れて行かれた後、わっちが人垣を離れようとしたらぱちぱちと拍手が聞こえた。その視線を追つと、笑顔を浮かべた侍女と目が合つ。

「お見事でござります、コスモス様」

「うむ。我ながらよく立ち回つたと自負している……つてわっちは侍女見た。

今頃、わっちを探して町中を走り回つてゐるはずの侍女を。

「あー。主が一体何者かは知らぬが、わっちはコスモスといつたのではないぞ。そそう、先ほどわっちによく似て美しい金髪の可憐な少女が大通りで鳥の串焼きをほおばつてゐるのを見かけたぞ。人探しならそこらへんを探してみたらどうじゃ？」

「ええ。たしたにコスモス様は大通りにいたでしょうね。実は私も、串焼き屋のお婆さんに貴方のいる場所を聞いてきたんです」

とつやに誤魔化そうとしたわっちに侍女は満面の笑みを返す。この侍女は怒つていてるときしか笑わないのだ。

「くつ。よもや婆が敵に回るとは思つておらんかった……。
油断した！」

裏切りは國をも滅ぼす。わっちは敵に回つたかつての戦友に涙を流しながら、戦線離脱をしようと/or>して

「その人を捕まえなさい！」

鋭い侍女の声で反応した周囲の人々に捕まえられた。ごつつい腕に拘束されたわっちは、抵抗できない猫のように侍女の前に連れてこられる。

「わっちは何も悪いことをしていないぞ！…ええい、放せ、わっちは自由にしろ！…ライヒビ王国王子、イーマ・ライヒビの許婚としての、これは正式な命令じゃぞ！…？」

怒鳴り散らしてみるが一向にその腕は離れようとしない。

「あきらめてください、コスモス様。叫んでも助けなんて来ませんよ」

「何じゃ その悪役のような台詞は…・・・・・ぬしらも傍観しとらんで助けんか？！」

わっちが叫ぶが誰も助けようとはしない。かっぽかっぽと馬車が道を走っているが、特にわっちたちに関心を示さずに通り過ぎていってしまった。その後ろに続く馬に乗った兵士達も硬い表情のままわっちをあえて避けるように進んでいく。

「コスマス様。みなさんは、私に逆らつ事がどういうことが本能的に理解しているのです。底知れぬ恐怖と共にあむこの人たちに今の貴方の声は届きません」

「あ、貴様、魔王か何かだつたのか！？」

愕然とするわっち。

と、そのとき先ほどわっちたちの前を通り過ぎた馬車が止まつて人が飛び出してきた。

ぱあっ。とわっちの顔が明るくなる。助けがきたのだと思ったからだ。

「えーーー！放せ、あたしを自由にしろー！」

だが、馬車から出てきた人影、もとい少女はついさっきわっちがはいたのと同じような台詞を吐くと、すぐにじつつい兵士に捕まつて再び馬車の中に放り込まれた。

暫し、きょとん。

突然現れて突然去つていった馬車に、わっちは視線をむける。

（あの少女、顔が黒かつた）

顔の右頬の部分が、まるで腐つたような色をしていた。顔が黒い人間の話など聞いた事も無い。

それに、あの少女は両手に枷をはめられて目隠しまでされていた。あれがイーマだつたというなら解せる。城を抜け出したイーマが手枷をはめられて宰相に連れ戻されるのはいつもの事だからだ。だが、突然の事態に啞然としたのはわっちだけだった。その間にごつつい男から侍女に引き渡されたわっちは、ずるずると城のほうへ連れ戻されようとしていた。

「なつーーいつのまにーーええい、放せと言つておぬしつがーーおぬし、女の癖に何でそんなに力があるんじやーー？」

ずるずるとわっちを引きずる侍女の力は思いのほか強かつた。

彼女の体格からは到底これだけの力が出せるとは思えない。女性が

筋肉をつけていいことは何も無い。

「いつもこうしてコスモス様を連れ戻している間に筋肉がついてしまったんです。コスモス様が悪いんですよ？」

なぜか疑問形で責められるわっち。

わっちの叫びもむなしく、やはり助けてくれる善良な市民はいなかつた。

コスモス様はそこで暫く頭を冷やしていくください。
侍女にそういうわれて部屋に閉じ込められてしまつた。ジーニー寧にドア
には鍵までかかっている。

失礼な！！

これではまるで田を放したらわっちがすぐどこかに遊びに行つてしまふような無責任な道楽者のようにではないか！

・・・・まあ眞実なので怒りもわいてこないが。
やる事も無いのでベッドに寝そべる。

いま、脳裏を占めるのは馬車に乗つていたあの少女の事。今から思
い返してみると馬車の後ろに続いた兵士の中にわっちの父である宰
相の顔が混じつっていたような気がする。

あの少女は何者なのだろうか？

（悪人、という雰囲気ではなかつたが）

第一、それだつたら出張つてくるのは城の兵士ではなく警備隊の連
中のはずだし、囚人を護送するのにあんな立派な馬車は使わない。
そもそも、父は王子と共に魔女の館に向かつたはず。あと何週間か
帰つてくる予定は無い。

(謎、じやな)

わづかの口元がきゅうとつりあがる。「…」に面白に謎に出てくわしたのは久しぶりだ。
胸が高鳴るほどの快感。今すぐ「あの少女と話をしてみたい衝動に駆られた。

(楽しい。楽しいのに、なぜ…?)

何故、わづかはこんなとこで窓じもめられておるのじやわづか！
ベッドから降りて窓を開けてみるが、「…」三階。フローリンター
帝国から輸入した高層建築技術によつて建てられた城は、こういう
ときわづかに歯痒い思いをさせる。そもそも標高の高いところに立
てられているため、ここからの見晴らしは絶景なのだが今はそれを
眺める氣にもならない。

再びドアに近寄つてみてチョイチョイと鍵をつづく。ちなみにこの
鍵もフローリンターナ製。石と木でできた鍵のようにカーテンレール
でぶつ叩いて壊すことは出来ない。

「これじゃからフローリンターナは嫌いなのじや。鍵がなくては開か
ない扉など造つてどうするといつのじや」

侍女あたりが「…」にいたら「鍵がなくても開いてしまう扉など意味
が無いでしょう」と突つ込まれそうだが気にしない。
再びベッドに突つ伏そうとしたとき、窓の外から視線を感じた。
つと頭を上げると、閉め忘れた窓の窓枠に茶色い子猫が座つていた。

「はて、城の猫ではないようだが」

城の猫はちゃんと管理されている。こんなところにいるわけがないし、そもそも茶色い子猫などいなかつたはずだ。

わっちは猫を脅かさないようこそつと近づいてから首をかしげた。絶滅危惧種に指定されている猫を飼えるような場所は限られている。国王の許可が無ければ飼えないことから権力の象徴ともされるし、野良猫ということは無いだろう。

「ここから一番近いところで他に猫がいるといつと……魔女の館じやな」

だが、魔女の館でもここから大人の足で五田。そこから来たとするには少し無理がある。

と、そこで気づく。その猫が鍵を咥えている事に。そのうえ、その鍵がこの部屋のものである事に。わっちは眼がキラーンと輝き、子猫がひるむ。

「一体どうしてぬしが鍵を持っているのか解からんが、おとなしく渡してもうか」

十分後、ムギヤーという猫の悲鳴が城中に響き渡つたといつ。

あの少女の様子だと城の最上階の牢に幽閉されているだろうといつわっちは勘は当たつていて、牢の一番奥に閉じ込められていた。城の連中はよっぽどこの少女の事を恐れているのか、わざわざ牢屋の入り口を気密性の高い金属の扉に付け替えたようだ。

「……」

いざ少女と檻越しに相対して、わっかはかける言葉を見つけられず、に困惑していた。

町で見た光景は見間違えではなかつたよつて、顔の右半分ほどが腐つたような黒で染まつてゐる。それは少し吐き氣すらももおさせらる色だつたが、それがなければどこでどもこの普通の少女のようこ見える。

軽くカーブを描く麦色の髪は肩口で切りそろえられ、程よく日焼けした肌はこんがり焼けた鳥の串焼きを連想させる。思わず涎が出た。

（皿をうだな・・・・・つて、いかんいかん。そういうことを考えに来たのではなかつて）

横道に逸れかかつた思考を慌てて修正する。

ジユルツと涎を飲み込むとその音でわっちの存在に気がついた少女が顔を上げ、慌てて壁際まで逃げる。なんだか、蛇に睨まれた蛙、とこうよりも猫に目をつけられた鼠のようなおびえた視線だつた

「あへ、なんじや、これ、怖がらんでよい。わっちは別におぬしを捕つて食おうとか、そんなことは思つておらんから」

まあ、おこしやうじやなへ。とは思つたけれど。

「ほ、本当に？あたしのこじ、食べようとか思わない？」

「ああ。思つとらん」

少ししか。

不意に少女が瞼を下げた。

その様子は少し悲しそうだつた。

「ねえ、あたしの顔、黒い？」

暫く悩むような素振を見せた後、少女はいきなりそんなことを聞いた。

わっちはまじまじと少女を見下ろす。

「黒い、というか腐つたような色じゃな。それがどうした？」

「あたし、腐死病にかかるみたいなの」

「ま・・・・・・」

まさか。という言葉を途中で飲み込んだ。

イタ力の村で腐死病が蔓延したのは、一月ほども前の事だったからだ。それ以来、腐死病の発生情報は入っていない。

一瞬、からかわれたのだとと思い込もうとして、それから少女の瞳が真剣なのに気がつく。

「・・・・・まあ、この質問はおいておいつ。おぬしが仮に腐死病なのだとしたら今の病状について聞きたくも無いだろうし、わっちもそんな重苦しい話をしにきたわけではないのじやからな。おぬし、名はなんと言つ？」

少女は、むすつとした不機嫌そうな顔で「イングリット」と答える。

「ふむ。イングリットか。神聖語で『黄金の穂』、つまりは麦穂を表す単語だな。いい名じや。名づけ親は誰じや？」

わっちはそう聞くと、名前を讃められたのが嬉しいのかちょっと氣

を良くしたようなイングリットが答える。

「お父さん。まだあたしが小さいときに死んじゃったけど、旅をしながら昔の事を勉強するのがお仕事だったの」

「ほひ、成る程なあ。神聖語など知っているものはほとんどおらんと思つておつたが、戦乱期のこと学ぼうとすれば当然必要となつてくる知識じやからなあ」

この大陸には、四つの国がある。

森国ライビビは、国土の八割を森に埋め尽くされた緑色の国。
砂国フェリンターナは、国土の十割を砂漠に埋め尽くされた土色の国。

水国ミレイアは、国土の十割を水に埋め尽くされた青色の国。

氷国ハルファナは、国土の十割を氷に埋め尽くされた白色の国。
大陸をきれいに四分割したような国土分布は、二〇〇十年、全く変わつていいない。

また、この世界における基本原則といつのはいくつかある。

一つ。他国に一定期間以上留まろうとする環境の違いに体が耐え切れず死に至る。

例えば、多湿な気候で育つたライビビの人間が、乾燥した砂漠の国フェリンターナに住む事はできない。

一つ。自国だけで全てのものを貪れる国は無い。

例えば、フェリンターナは穀物の需要を百パーセントをライビビに頼つているし、ハルファナは肉の需要の百パーセントをフェリンターナに頼つている。

一つ。戦乱期に比べて、何かを欲するという人間の欲望が明らかに小さくなっている。

例えば、権力を手にするために権謀術数を廻らそつという人間はない。「とりあえずご飯食べるのに困らないなら別に権力なんて無い

くても良いやー」という人間ばかりになってしまった。

一つ。宗教や神といった概念が無くなつた。

例えば、死後の世界を信じている人など今の世の中にはいない。

一つ。言語が変化しなくなつた。

例えば大陸のどこであつても共通語が通じるし、社会から隔絶された未開の村であつても言語に訛りは無い。

そんなルールが突如として発生し、この大陸が「平和」になつてしまつたのがおよそ千年前。今でもその原因を解き明かそうとするものは多いが、千年という期間は多くの記録を奪い去つてしまつている。

神聖語や古代語を勉強するのは貴族や、昔の事を勉強しようとしたるものたちだ。

「？・？・？・ふうん？ そりなんだ」

わっちが説明すると、イングリットは始めて知つたといつぱうに小麦色の目をぱちくりとさせた。

「なんじや、おぬし、自分の父親が調べていた事の内容も知らなんだか」

「あたりまえよ。だつてお父さんとお母さんが死んだのつて、あたしが四歳のじるよ」

少女はせらりと両親の死を口にした。どうやらそのことはイングリットの中ではあまり悲しい事ではないらしく。

(いい人たちに囲まれて育つたといつ事じやろうな)

両親の死の悲しみを忘れさせてくれるぐらいいい人たちがイングリ

ットの周りには集まつていたのだ。それでなければ両親が居ない悲しみは心に重くのしかかる。

だったら、そんな環境で育つたイングリットもいい子に違いない。ただ、イングリットが腐死病だということはイングリットがイタ力の村で育つたという事に他ならない。親が死んだときは村の人間の励まして立ち直つたのだろうが、村の人間たちが死んだ今、誰がこの少女を励ますというのだろうか？

「それじゃあ、お父さんはどうやってお金稼いでいたの？勉強をしていいだけでお金稼げるの？」

「いや、勿論ただ勉強をするだけでは稼げんよ。そういう昔のことに興味のある貴族や王族に雇われていたか、調査の過程で立ち寄つた村々で商いをしたり、地方の子供たちに教育をしながら旅をするというのが一般的じゃな。要するに、千年前に何があったのを解き明かして戻りたいのじゃよ。戦争だけの剣と流血の時代に」

イングリットが眉をしかめた。どうして平和なのに戦争などにあこがれるのか理解できないのだ。

「簡単に言えば怖いのじゃよ。同じ人間同士ならば言葉が通じで、言葉が通じなくても戦えば決着がつく。じゃが、今の平和は明らかに何者かの干渉によつて生み出されたものじゃ。それが神じゃとは思わんが、神の様な力を持ちながら神で無いというのは神なんぞよりもよつぱだたちが悪い。戦う事すらも出来んのじゃからな。解かるじやろ？努力してもどうにもならんことがどれだけ恐怖か」

イングリットは解からないように首をかしげる。田に見え無い敵も居ると言つのが理解できないのだ。

「「」の世界の歴史が、誤った歴史、つまりは誤史と呼ばれるやうじやよ」

「誤史？」

「正規の進化をしていない、神やそれに類似したものに干渉されてしまつた間違つた世界の事じや。もつとも、」

今を生きるものたちからすれば、間違つた歴史だらうと正しい歴史だらうと関係ないじやうがな。と、そういうてわつちは言葉を切つた。

イングリットの顔を見るに完全に理解しようといつ努力を放棄していたからだ。

わつちは「ちと話が逸れすぎたな」といつて苦い笑いを浮かべる。ふと、わつちはまだ名前を名乗つていのを思い出した。

「こひまで話しこんでおいて、それは失礼だらう。」

「名乗りを上げよう。わつちの名は、ナタリエール・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チヒヒンス・ニヤマラ・スズラヒ・レノハ・コスモスと申す」

「・・・・・長こよ」

イングリットの突つ込みにわつちは苦笑した。

「わつちの故郷の町には名前を受け継いで継ぎ足していく伝統があるじくてな。解かりやすく言えば、親の名前に新しい名前を継ぎ足して子の名前を作るのじや。じやからわつちの名前は一番最後についたコスモスの部分じやな」

ちなみにこひのよつな長こ名前を持つ文化は國中探してもわつちの故

郷の村にしかないようだ。逆に言えば感心するほど長い名前の人間が居ればほぼ間違いなくわっちの村の人間だという事だ。

イングリットの村はどんな村なのかと聞こうとして、すんでで思いとどまつた。気になるといえば気になるが今聞くのは逆効果だろう。腐死病という単語が出たからにはイタ力の村の住人なのだろうし、イタ力の村の住人ならば故郷の話などしたくないだろう。

（ああ、この大陸のどこにも共通する事が、もう一つあつたな）

わっちは心の中で呟く。

腐死病は、この平和な世界にあつて常に死の恐怖を忘れる事ができない四国共通の問題だった。

最初の日は、そんな感じで自己紹介と世間話で終わつた。二日目はほとんどわざわち一人が喋つて終わり、三日目には漸くイングリットがここに閉じ込められている理由を聞き出せた。腐死病にかかりながら三週間近くも生きながらえているということは常識では到底考えられなかつたが、その実例が田の前にいるのだから信じるしかないだろう。

そして四日目。つまりは今日、わづちがイングリットを訪ねると、イングリットは泣きはらした顔をしていた。

「な、どうした、イングリット…」

わづちの声に反応して、イングリットが涙の跡の残る顔を上げる。慌てて檻越しにハンカチを差し入れてイングリットの頬をぬぐうと、イングリットの顔がくちゃっと歪んだ。

「夢を、見たの」

「…………」

「村が兵隊に囲まれて、油をまかれて焼き払われる夢だつたの。実際にあたしはその場所に居たわけじゃないのに、なんだか物凄くリアルで、ああ、帰る場所が無くなつちゃつたんだなア。つて解かっちゃつたの。あたし、実は腐死病に汚染された村は人の手で焼き払われるつてことすらも知らなかつたんだよ。あたしをここに閉じ込めた兵隊さんたちが言つているのを聞いてはじめて知つたの。なのに、夢に見たの。ロコさんも、エーマさんも、ヨビツツも、コルさんも、おかみさんも、みんな焼かれて死んでいくの。熱い熱いって

言いながら、半分腐つて動かなくなつた体を無理矢理動かして、泣きながら這いすりまわつて

」

「イングリット」

わっちは、檻の間から手を差し伸べてイングリットを抱きしめた。抱きしめておいて、手でイングリットの口をふねぐ。取り乱して身じろぎをするイングリットを頭から押さえつけ、イングリットが痛がるぐらいの力を込める。

痛み以外の全てを忘れてしきりに願つて。

イングリットはすぐに抵抗をやめ、その代わりに静かに涙を流し始める。

その顔の黒いシミは、心なしか大きくなつてゐる気がした。

「コスマス。あたしの帰るといひは、無くなつたやつた」

腐死病の少女の口から手を離すと、案外冷静な声。涙声ではあったけれど、血暴自棄にはなつていなかつた。

「あたしと一緒に何かをしようといつてくれる人は、居なくなつちやつた。あたしだけ残して、居なくなつちやつた」

ボソリボソリと語る声に抑揚は無く、感情がこもつてゐるわけでもなかつたが、心にずしりと響いた。今語つたほんのわずかの言葉が、ずつとイングリットの心の中を占めていたことなのだと、即座に理解できた。

イングリットが考へてゐることはわからなかつたが、かけるべき言葉はわかつた。

「誰も、おぬしが生き残つた事を責めたりはせんよ。仮に誰かがお

ぬしを責めるところなら、わっちが庇つちやる。安心せい」

大切な人を沢山失つて、僥倖で生き残つてしまつのは罪悪感だ。イングリットは、自分だけ生き残つてすまないと、ずっと心の中で謝り続けている。

「コスモスが庇つてくれる保障は？」

「ない。完全に口約束じや。じゃから、おぬしがわっちのこと可信して頼り続けている限りはわっちもぬしを守り続けよつ」

「…………」いつ時、はつきりと保証がないと言い切るのはどうかと思つわ

わっちの腕の中でイングリットが小さく笑いを零す。

「想いを形のあるものにしてはならんのじゅよ。形のあるものは、いずれ壊れるからな」

「田に見えないものは信じない、といつ人もいるわよ？」

「誰かが疑つたところで、形の無いものが全てなくなつてしまつわけでもあるまい。じゃが、そうじゅな。形があつたほうがわかりやすいといつことも事実じゅ。じゃからおぬしにいい物をやろつ」

いつの間にか、自分がこの少女を気に入つていてる事に気がついた。そうでなければ、腐死病の少女の元に足しげく通つたりはしないだろつ。

「イングリット。それと、イタカか。両方同じ音で始まつてているの

は紛らわしいな。ならば間にわっちの名前からとつて何か入れよう

「はい？」

小首をかしげるイングリット。麦色の髪が彼女の動きに合わせてくれる。

その様子すらも、愛おしいと思つた。ひょとしたらこの少女には人に好かれる才能があるのかもしれない。

「イングリット・コスモ・イタ力。わっちの権限にて、おぬしを一代限りの準男爵に任命する！」

言つまでも無く、次の瞬間、少女の目がこれまでに無いほど大きく見開かれた。

仮にあの娘が腐死病だつたとしても、今のところはわっちに病気が移つたような気配は無かつた。念のためにこまめに自分でボディーチェックをしているが、さすがの腐死病もわっちの美しい肌にはシミ一つつけられんようだつた。

イングリットに爵位を与えたのに深い理由は無い。強いて言つなら、名前を与えるおまけのようなものだ。

イタ力という言葉を性に持つてきたのは、イタ力の村で育つた事をいつまでも誇りに思つて欲しいから。

コスモスを意味するコスモという言葉を間に入れたのは、イングリットを敵に回すということがわっちを敵にまわすという事になるからだ。ライビビの国においてわっちの名前の持つ意味は大きい。侍女のナコのような例外が居ない限り、大抵の人に言つ事を聞かせることが出来る。

「おはよ〜」と叫んで、「コスモス様」

数日振りに外側からわっちの部屋の扉が開き、侍女のナゾが顔を出した。

侍女は部屋の鍵を扉近くの小さい台の上に置き、わっちに一礼した。
「先ほど城下町の巡回兵から入った報告によると、王子殿下が単身でご帰還なされたそうです。よつて、一応コスモス様も解放させていただきます」

・・・・・うん。なんというか。

平和なのは良いが、王子が一人でふらふらしていて何の問題も無いって言うのは、ちょっと寂しいな。

もつちよつと、こう、王子を人質にとつて身代金を要求しようとか、権力を手にして国をのつとか考えるような骨のある輩はいなのだろうか。

例えそいつがどんなに少数兵力で攻めてきたのだとしても、面倒臭がり屋の今の国王なら喜んで玉座を譲りそうなものだが。なんだか、そうしたら王位をくれてやるといわれた奴の方が「えー、嫌ですよ、面倒臭い。何でそんなことを私がやらなくちゃいけないんですか? 王様なんて貴方がやつててくださいよ」といいそうだ。ライビビの人間はもうちょっと貪欲になるべきだと思つ。

「コスマス様。いつまでもベッドの上に居座らないでください。アントがそこにいると私は仕事が出来ないんです」

ナゾの冷ややかな声にわっちは慌ててベッドから飛び降りた。

「せめて、面倒臭いから貴方が国王やれとか言つなら、もつちよつ

「いや、王とか王子とか貴族とか王子の許婚といった人種は敬われるべきだと思うんじゃがな。具体的にいうとわっちの様な人間が！」

わっちの抗議に全く耳を貸すことなく、侍女は淡々とベッドのシーツを取り替える。

「私はわざわざ毎朝、こつしてコスモス様を起¹しに来て、その上でベッドメイキングまでしてくるんですよ？これが私なりの最大限の敬意の表し方です。」

「それは敬意ではなくて仕事だろ？！侍女の義務だろ？！ナコは知らんかもしねんがフヨリンターナの皇族では、入浴から着替えから食事まで全部執事や侍女がやってくれるそうじゃぞ」

「じゃあお着替えをお手伝いいたしましょうか？」

わっちは即座に首を振った。さすがにこの歳で着替えまで手伝つてもらつのは恥ずかしい。

そこで、ふいと思い出す。

「のうナコ。確かにマーマはイタカの村の焼き払い時に、現場指揮官をやっておつたな」

「…………はい。左様です。確かに、国王陛下からの直々の命令だつたはずですが」

「…………こつも思つのじゃが、何故おぬしはそつこつ機密情報を当たり前のように知つておるのじゃ？」

わっちが冷や汗を流しながら聞くと、なぜか侍女はにやりと笑う。

微妙に凄惨な笑いだつた。

「言つてもかまいませんが、聞いた後で後悔だけはしないでくださいね」

「…………う、うむ。いつてみよ」

「ただ単に、私の笑顔が魅力的で、私が笑いかけるどんな殿方も
ころりとやられてしまうだけの事ですよ。ちなみに失神する方もま
れにいらっしゃいます」

繰り返し、思う。

この侍女は怒つたときしか笑わない。そして城の連中は当然ながら
その事を知つてゐる。

「ちなみに、この情報は国王陛下から直接お聞きしたものです」

「…………おぬし、絶対魔王か何かじゃね」

国王すらも屈服する影の支配者は、心底楽しそうにクククと笑つた。

「それで、どうしてイタカの村のことなどお聞きに…………あ
あ、そういうえばコスマス様をここに監禁する事になった日、馬車か
ら逃げ出そうとした少女が腐死病患者でしたね。あの一瞬でそれだ
けの事を理解したのですか。流石です」

心底感心したような、憧憬さえも滲ませる侍女の姿とこゝのは殊の
外不気味で、わっちはさりげなく目を逸らした。

あの一瞬、というのは城下町でイングリットのことを見かけた一瞬
のことと言つていいのだろう。その一瞬でイングリットの顔が黒い

事に気がつき、そのような少女が何故馬車に載せられて護送されているのかを判断すれば確かに腐死病という答えが出てこないでもないが、生憎ながらわづちの知る情報は推理によりもたらされた発想では無くイングリットから聞いて知ったものだ。

父なら、そのくらいの判断力を持つているだろうが、父の血を引いているからと言つて私は父ではない。

「王子殿下もずいぶんと心を病んでおいで您的でした」

唐突に、侍女は目を伏せて言つ。会話をしながらもまたくよどみなく仕事をしていった両手を止め、体の前に組んでこぢりて向き直つた。

「今でもイタカの方々が火に焼かれて苦しむ姿を夢で見たりて吐いたり、夜中にどうしようもなく震えて寝付けない事もしばしばあるそうです。だから、今回森の魔女のところに行こうと計画を立てたのは、心療旅行のためだと聞いております」

「…………そうだったのか？」

これはまた新事実だつた。そもそもイーマは悩みがあつても一人で抱え込むタイプだ。誰かに相談しようとしているから誰もイーマの悩みに気がつけないし、漸く悩みを披瀝してくれたと思つたらもう自分で乗り越えてしまつた後だつたりする。

だから、侍女が王子の悩みを知つていて、その上でわづちには一言も言わなかつた事がちょっとねたましかつた。

「さて、私はいまひとつだけ嘘をつきました。それはなんでしょうか？」

「森の魔女のところに言ったのが心療旅行のためといつといつ?」

「どうより、傷心を癒すためなら魔女のところではなく幼馴染にして許婚のわっちのところに来て欲しいというのが本心だ。イーマからわっちでは力不足だといわれたようであつと辛い。それも確かにまあ、私の憶測ですが。と、侍女は苦笑する。

「正解は、王子殿下にお聞きした、のところですよ。私は単に様子のおかしい王子殿下を気に病んで夜な夜な窓の外から王子殿下の部屋を覗き込んでいただけです」

「…………それを世の人は、覗きといつのではないか?」

そもそもイーマの部屋はわっちと同じ三階のはず。窓から覗き込んだということは城壁をエッチラオツチラと這い上がって言ったということになる。不可能ではないだらうけれどこの侍女以外はそんなことをしようと思わないだらう。

具体的に言えば、普通の身体能力しかない人間は。

「まあ、わっちと違つてイーマは優しいからな。本来が人殺しには向かん性格をしてあるのじや。村一つを焼き滅ぼしておいて平静としていられるほうが妙じやう」

わっちが髪でも梳こうと化粧台の前に座りながら言つと、なぜか沈黙が返つてきた。鏡越しに見ると、侍女は微妙な表情をしている。

「コスモス様」

「何だ?」

「コスモス様のほうが王子殿下よりもずっと弱くて優しい性格をしていますよ。だってほら、大切な人のためなら、体面とか他人への迷惑とか顧みずに平氣で怒りに身を投じられるじゃないですか」

城下町の服飾店のことをとつても然り。と、侍女は呟く。

「あ、あれは、違うぞ。ただ酒の魔術師に腹が立つだけじゃ……」

わっちが言い終わるよりも前に侍女が歩み寄ってきて、わっちの手から櫛を無理矢理奪い取ると、やや乱暴にわっちの髪を梳かし始めた。
「痛い。」

「自分のためならいざ知らず、本氣で他の人のために怒れる人間など近頃ではめったに居ませんよ。もっと素直な目で自分を見てください。コスモス様は王子殿下に負けず劣らず、お優しい方ですよ」

わっちの髪を梳く侍女の手つきはやや強引で、頭皮を引っ張られる痛みにわちは眉をしかめた。

「強いて言つなら、王子殿下は何でもかんでもに心を配つてしまつて、コスモス様は目の前の事だけに目を配るという違いでしそうかね。普段は厭世的なことを言つておきながらいざ目の前に困つている人が現れるとほつておけないといつのは、コスモス様だけではなく森の魔女にも共通する性格ですが」

「それは優しいとは言わんじやろ？。つまりこいつ自分の目の前さえ何事も無ければ他がどうなつていてもいいところじや」

それは自分本位な理由だろう。

「自分の田の前にいる人全てに幸せであつてほしいというのはとても難しい事ですし、気配りは疲れます。それをやろうとこの時点で十分お優しいですよ」

だから人は大切な人を決めるのだ。と、侍女は言う。守りたいものを、守りべき大切なたつた一つのものを選ぶのだと。それだけは譲れないと、そう言える存在を造るのだと。

「私は、コスモス様さえ幸せならば今この瞬間に王都の人間全員が死んだとしてもちつとも心が痛みませんが」

春風が吹いた程度には感じるかもしれません。と、侍女は続ける。侍女の選んだ譲れない存在は、私のことらしい。それはお世辞ではなく嬉しかった。

「それに、優しさなんて所詮は自分本位な物でしょう。誰かのために何かをしたいという気持ちは、誰かのために何かをしなければ自分が嫌な思いをしてしまつから、という気持ちを言い換えただけのものですから」

「もう。と、わっちはうなり声を上げる。

「おぬしの言つ事はどうも概念的で解からん。具体例を挙げてみせよ」

侍女がはいはいといつた感じで溜息をつく。
どうやら髪を梳かし終わつたらしく櫛を化粧台の上に置き、今度は口紅の粉を練り始める。どうやらわっちに何もやらせる気は無いら

「簡単には言えども、私はコスモス様のことしか考えられなくてコスモス様と森の魔女は目の前の事しか考えられなくて王子殿下は全部のことが考えられてしまつ。と、そういうことですよ」

「ふうん」

「わっちは鏡を見て眉をしかめた。わっちの首元に本来あるはずのない黒子のようなものが出来ていたからだ。

「…………なんだかい加減な返事ですね。いいでしょ。要するに、王子殿下はいつも全部を守ることを考えてばかりいらっしゃるから、何かを切り捨てる事によって他を守るという事ができない。例えば膾が湧いている肉を見つけても、膾の部分を切り取つてしまわずに食べるからおなかを壊して大騒ぎするんです」

わっちは苦笑した。侍女が今言つた事は実際に数年前に起きた事だからだ。

「国王陛下がイタカの村の焼き払いを王子殿下に命じたのは、諦める事の大切さを教えるためでしょうね。王子殿下は次期国王の最有力候補ですし、国王になればそれは当然必要になつてくる事ですか

ら

「じゃあわっちは、『国民とわっちは大切なのー?』みたいにことを聞いて困りせりみよつが?」

「その答えを王子殿下の口から聞きたくは無いでしょ。国民を選ぶにしる、コスモス様を選ぶにしる、どちらも選べないにしる」

「…………じやな

黒子は、一度気づいてしまつと、脳に存在感を増した。わっちはそのまま黒子がただの黒子でない事に気がつき、眉をしかめる。イングリットの顔を覆う腐死病の黒が、脳裏をよぎった。

「…………」

わっちははつゝ、とひじを動かすと、さうげない動作で口紅の粉が入った壺を床に落とす。

「あ、すまぬ」

侍女が「アンタ餓鬼ですか」という視線でこちらを見てくるが、特に何も言わない。

「わざわざないんじやよ

「わざわざいたなら私は笑つてこます」

・・・・・わざとめつた身體とじては、それは恐ろしく怖かった。

「絨毯が汚れてしましましたね。何か拭くものを持つてきます。暫くお待ちください」

そういうて一礼して退室してみつとする侍女。

「うん。すまぬな

そういうつて、侍女が出て行つてすぐにわつちはドアの鍵を閉めた。先ほど侍女が敷いたシーツを引き裂いて布切れを作り、鍵穴やドアの下の隙間に押し込む。それが終わつてから漸く一息をつき、もう一度化粧台の前に座つた。それからまじまじと首元を眺める。

黒い黒子は、腐死病に感染した証拠だった。

次の更新は1ヶ月です。

第六幕 コスモスの侍女、ナコ

コスモス様はわざとやつたのではないとおっしゃいましたが、そもそもがコスモス様はわざとやつたときにしかわざとではないと弁解なさらないお方です。だから私は「思いつきで絨毯を汚そぐなんて思わないでください。それだつて高い物なのですから」と心の中だけ眩いでコスモス様の部屋を後にしました。

私は先ほど私がコスモス様に對して言つたように、コスモス様だけのために生きています。フェリントーナには女性騎士の地位を捨ててまで皇后の侍女になつた方がいらっしゃるそうですが、コスモス様に対する私の忠誠心はその方にも負けていないと自負しております。他の誰でもない、私自身の意志でコスモス様のために死くそつと決めたのです。

恐らく王子殿下は、全てを捨ててまでコスモス様をお守りすることは出来ません。それは王子殿下の立場と良心が許さないからです。それに、王子殿下が国民を捨ててコスモス様を選べるような冷酷な方だつたらそもそもコスモス様のお傍に立つのにふさわしくありません。

さて、私が掃除用具を持つてコスモス様のお部屋に戻ると、何を思つたのかコスモス様は内側から扉に鍵をかけて、呼びかけても返事をしてくれません。数日前にこの部屋の合鍵がなくなつたという話は聞いていましたし、私が持つていた鍵もコスモス様の部屋の内側に置いたままになつてしているので、コスモス様が開けてくれない限り私は中に入ることもできません。金属製の鍵なのでカーテンレールで叩き壊すというわけにも行かず、私は部屋の外で呆然と佇んでおりました。

と、そこに変た・・・・・ではなくて、王子殿下が現れます。

・・・・・・なぜか裸に黒マントというモダンな格好ですが、そこに突っ込むと異世界から沸いて出たとしか思えない王子殿下の高尚な趣味とやがてついてイーマ語という謎の言語で延々と語り切れてしまうので無視させていただきます。

とりあえず王子殿下から田を逸らしつつ「コスモス様が閉じこもつてしまつた事を話すと、王子殿下はいつもと代わらない冴え渡る頭脳でいつも簡単に「コスモス様のお考えを理解してしまわれたようでした。

「閉じこもつも何も、じつにコスモスらしい単純な思考ではないか」

ビシッ！

王子殿下が、両腕をびしと伸ばし、唸ります。

「コスモス、よもやこの程度で私が途方に暮れるとは思つておらんよな！」

シャキーン！

王子殿下が、両腕を交差させて、吠えます。

「観念しろー！」

ドンッ！

王子殿下が、ポーズをつけて叫びます。

変態の所業でした。

そして、そんな効果音の聞こえてきそうなポーズを扉に向けてとつた後、王子殿下はビシッとコスモス様・・・・の手前にある扉を指差しました。

長年「コスモス様と共に過ごした私にはわかります。

扉の向こうの「コスモス様がドン引きしているのが！？」

「…………あの、王子殿下、ナーラナサッテオイデナノデスカ？」

出来れば他人でいたいと思つ私の本心が私の声にどいてよそよそしい響きを『えていますが、王子殿下はその事にすらも気がついた様子がありません。

「馬鹿者！ヒーローというのは登場したときに例え相手が扉であつたとしても格好をつけなくてはならん義務があるので！」

「その理論には異議がありますーアナタ、ヒーローって風じやないでしょ！ー」

「む。ヒーローだけを身につけた王子殿下がつなります。流石に思ひ立つことがあります。」

「…………やうだな。ヒーローとこからにはマントでなければなるまい」

「それはさらこいつらんな意味で異論があります！？ですがとつあえず、コスモス様のことですがっ！」

やつこつて私も王子殿下と同じよつて扉を指差します。

「コスモス様は一体ビうなつてこいるんですか？ー」

「ああ、それはだな」

王子殿下は改めてそうこうして扉に向き直ります。

「腐死病だらう、コスマス。大方城に運び込まれた腐死病の少女の存在を知つて好奇心を押さえきれずに会いに行つたのだらう」

私は予想をはるかに上回る答えに言葉を失いました。

コスマス様はずつとこの部屋に居たはずだと言おうとして、この部屋の合鍵が紛失していた事を思い出します。コスマス様は何らかの手段を使ってその鍵を手に入れたのでしょう。

なんて無様なんでしょう。私は、コスマス様のために生きているなどと大言壮語を吐いておきながらそのコスマス様が何を考えてどういう行動をするかも理解できていなかつたのです。

「じゃつたらどうなるとこいつのじゃ？」

扉の向こうからコスマス様のぐぐもつた声が聞こえます。コスマス様の声が普段のものと違つて聞こえるのは、扉越しの声だと言う事だけではないでしょう。

「とりあえずこの扉を開ける。コスマスが開けてくれないのならこじ開ける。久しづりに会つたのだからお前もわたしの顔がみたいだらう。違うか？」

「…………」

扉の向こうから伝わつてくるのは沈黙。肯定だという事でしょう。王子殿下は何かを言つ素振すらも見せずにじつヒドアのほうを睨みつけます。王子殿下も言いたい事は沢山あるのでしょうか、ぐつとこらえているのです。

重苦しい緊張が周りを漂いました。

「…………イーマに何が出来るのじゃ？」

先に痺れを切らしたのは、いつものようにコスモス様の方です。そして、その問いに含まれていたのはコスモス様の『想い』でした。コスモス様が腐死病にかかったのならば我々人間は無力です。努力をしてもコスモス様の死を免れることは出来ません。やれば出来ると無責任な人たちは言いますが、努力をしてもどうにもならないことがどれだけ恐怖か、私も、そして私以上に王子殿下もご存知です。取捨選択をする事を知らず、当たり前のように全部を助けてきた王子殿下でも腐死病だけは何とかできないからこそ、イタ力の様な腐死病に汚染された村は焼き払わなければいけないです。王子殿下は何でもかんでもに心を配つてしまい、その上でたいていはそれでは何とかなつてしまつから、たまに王子殿下でも力が及ばない事があると無力感と罪悪感に簡単に押しつぶされそうになつてしまふのです。

「さあな。私に何が出来るのか、私にも分からん。だが、何かは出来るだろ？。私は最初からあきらめてかかるつもりは無いぞ」

「腐死病が王都に蔓延したら、国が滅びるが、それでもいいのじゃな？」

王子殿下がだから扉を開けてくれ、の、だ、のところまで言つたところでそれを遮るようにコスモス様がおっしゃいました。私はとつさに理解します。

「コスモス様は、『国民とわづちのどつちが大切なの！？』と先ほどおっしゃった言葉通りに国王陛下に天秤を押し付けているのです。腐死病は王子殿下でも何とかすることができない唯一のものだからこそ、この質問が意味を成すのです。

しかし、王子殿下はせつと笑つてアラをぽんぽんとあやかよつて叩きました。

「コスモス。国民のために死ぬ、などとは言つてくれぬなよ。私が見たらお前だって立派な国民なんだからな。取捨選択も何も、片側の目が空の天秤など無意味だろ？」

王子殿下は私とコスモス様の会話を盗み聞きしてこたかのよつじをやめて、それから私の肩を叩きました。

「わて・・・・・お前、なまなとこいつのだ？」

「ナ」です。ナ・パンナコッタ

「よし、ナ」。風呂を用意しや

「・・・・・は？」

「延命だよ。ベッタラの実がなる春まで持たせられるかは分からんが、私に唯一できる事があるとこつたらそのへりいだしな」

さわやかに微笑む王子殿下は、白マントを身につけていたのならば確かにとても魅力的だったでしょう。

第七幕。宰相、レノハ

俺が毎日、嫌だ嫌だと言いながらも書類仕事を懸命にこなしているのは、宰相というなんともめんどくさい地位を国王が俺に押し付けたからだ。確かにこの地位を押し付けられた当時は腐死病で壊滅的な被害を受けた俺の村を復興するのにそれなりに役に立つたのも事実だが、それが終わってしまえば単に迷惑な肩書きが残っているだけだ。

「お前が俺の養子になれば楽なのにな」

と、国王は溜息混じりに言う。それは俺が楽になるという事ではなく国王が俺にその地位を押し付けて隠居するという事に他ならない。「誰が国王になんかなるかあかんベヒ」と、最初にそういうわれたとき俺は言い返してやつたが、急に国王が泣き出しそうな顔になつて「れのはア～」と俺に抱きついてきたのでそれ以降は仕方なく笑つてごまかす事にしている。

あの、妙に艶っぽい顔は反則だろ？。

宰相というだけあって部下だけは生え抜きの優秀な、それこそ俺が居なくても政務に差し支えの無いぐらい優秀な奴らがそろつているのだが、どいつもこいつも出世欲のカケラも持たない奴らで、「おまえ、俺の代わりに宰相やれ」といつても「嫌ですよ面倒臭い宰相なんかになつたら週末まで城に出勤してこなくちゃいけないじゃないですか宰相なんてやるのはよっぽどの暇人ですよ」と、俺が宰相を辞めたがっているのと同じ理由で首を横に振るのである。だが、仕方なく面倒臭い書類仕事を午前中のうちにぱぱぱぱと片付けてしまつた俺は、生まれて初めて新しい自分を発見するという珍事に直面した。

こうも書類仕事が恋しくなるとは思わなかつた。仕事に忙殺されていた昨日までが懐かしい。

「とりあえず、御用件をじうぞ、『森の魔女』殿

早く自分の縄張りに帰つて草むしりでもしてろやこのアマ。と、内心では思いつつも表面上は笑顔を浮かべて丁寧な言葉遣いをする。魔女はそれを受けて、向かいの椅子に座つたままぼーっとした笑みを浮かべた。

お茶を持つてきます。と、明らかにこの場から逃げ出すための言い訳としか思えぬ言葉を発言してこの場を立ち去るうとする秘書と、「なんで森の魔女なんか通したんだよこのフヌケ。宰相になるのがイヤだつて言うならせめて自分の仕事ぐらいちゃんとしやがれや」「だつてアンタ今日暇だつて言つてたじやないですか。国内視察つて言い訳で城下町のお姉ちゃんナンパするなら森の魔女だつて美人だしナンパしがいがあるんじやないですか。というか私みたいな中介の秘書が魔女をとめる事なんてできるわけ無いでしようだつてこの国の王子三人のオキニーの女性なんですよ」という視線だけの会話を交わした後で俺は魔女のほうに向き直る。この魔女は空気が読めない性格だが、逆にいえば今の俺と秘書が交わした心の会話にも気づけないという事で、俺はそつと安堵の溜息をつく。

「…………ところで魔女殿、御趣味は何ですか?」

「え? 趣味? ··· ··· ··· 日光浴かしら」

「それはそれは、太陽の光を受けた貴方は大層美しく輝いている事でしょ。城の様な重苦しい空間も貴方が居るだけで華やぎます。しかし私のようなものからすれば森と共に暮らす貴方は手の届かぬところに咲く高嶺の花も同じ。貴方の愛を一身に受けた森に私は嫉

妬の炎を燃やす事しかできないのでしょうか…」

何処からか「魔女のこと迷惑そうにしてたのにちやつかりナンパしてるんじゃないですか」という声が聞こえてきそうだったが、気にはしない。

このナンパはただのナンパではなく城下町のオネエチャンをナンパできなかつた事に対するハツ当たりだからだ。

（・・・・・まあ、どう言い訳したといひでナンパしているのに
は変わりがないんだけどな）

とりあえず、と、俺は魔女の両手を握る。森の魔女は女としてはやや背の高いほうだったが、俺も男にしては背の高いほうだったので、やや前屈みにならなければならない。あえて俺の息が魔女にかかるよつな角度にして、俺は魔女に囁きかける。

「魔女殿・・・・・ああ、貴方はなんと罪深い方なのでしょうか。貴方の名前を呼ぶだけで私は天にも昇る気持ちになつてしまします」

「え？あの、え？」

「ぜひとも貴方には私の傍にいてもらいたい。魔女殿、この心臓の鼓動が聞こえますか？小鳥のさえずりよりも美しい貴方の声がこうも私の心臓を高鳴らせるのです。薔薇の花すらも色あせる貴方の笑顔のせいでもうも私の血は騒ぐのです」

そつと魔女の手を俺の胸に当てた。自分の銀色の長髪やほつそりしたようで筋肉のついたこの体が、女性に対しどれだけ強力な武器になるかは心得ている。

魔女も例外ではなかつたようで、俺の握つた手をもじもじと恥ず

かしそうに動かしながら田を逸らす。

「や、宰相閣下、いけませんよ、昼間から」

「じゃあ夜までじつして共に語りいながら待つとしまじゅつか

オイオイ何でそこまで飛ぶんだよ俺はちゃんと段階だつた恋愛をしようとしてるんだからな。

・・・・・とせ、思つたが言わない事にした。

「貴方を前にすると、誰もが鼻の奥がつんとするような少年になってしまいます。これを戀と呼ばずになんと呼びましょう!」

もう、魔女は顔を林檎のよつて真つ赤にわせて俯くだけで、何も言わない。

何も言えないよつな状況に、俺が仕向けた。

「貴方のためならば私は全てを捧げられます。貴方のその微笑が独占できるのならば私は何もかも投げ打てます、貴方に愛されるためならば私は・・・・・」

「あの、宰相閣下」

そらひて森の魔女への愛を説いたとしたじりひで、森の魔女に口を挟まれた。
さつきまでの恥ずかしがつていた様子は微塵も無く、しれつとした表情をしている。

「今言つた事、本当ですね?私のために全てを投げ打てるといつ言

葉」

「え、はい、そうですが」

今度は俺がじぶんもじぶんになつて答えた。正確には全てを投げ打てるというのは魔女の微笑が独占できたらどうこいつ条件付だつたはずだが、たいした違いは無い。

「じゃあ、イングリットを解放して私に預けてくださいね」

あ、と俺は一瞬間抜けな声を出して、ぴしゃりと片手で顔を覆う。俺が魔女から手を話した瞬間に、魔女はひらりとまるで魔法のように俺の元から離れる。

甘い言葉をささやいて魔女に本題を忘れさせようとこいつ試みは、さら上を行く魔女に計略によつて利用されたのだ。いや、これは自滅か。

「それは出来ません

もつ色仕掛け作戦は通じないと諦めて、きつぱりと断る。それから俺はどかっと部屋に置かれた豪華な椅子に座つた。魔女は世間知らずではあるが決して馬鹿ではない。その上でいつと馬鹿三兄弟の二つ名で知られるこの国の王子たちこつて男に対して無駄に強い耐性を持つてこりのだった。

「では、私もイングリットと回じよつて監禁しますか？」

魔女が両手を広げて囁く。

「まさか。また森が襲つて来たら」まつますから

先代の魔女を先代の国王が監禁したとき、怒り出した森が急速に増殖して、王都が木々で覆い尽くされた事があったという。そもそもどうして国王が魔女を監禁しようとしたのかは定かではないが、同じ事が今の時代にも起ころるのは「めんだった」。

何せ、そういうことが起こつて事後処理に追われるのは俺だ。

「じゃあ、イングリットも開放しなければいけませんよ」

「力技に、出るおつもりですか？貴方はあくまで人と森の間に立つ存在でしょう。そこまで一個人に肩入れすることは森が許さないはずですが？」

魔女がその気になつたら人はかなわないが、それはしないだろう。森と人との境界線に立ち、その双方が境界線を越えないようにするのが仕事である魔女自らが境界線を越えるなどという話は聞いたことも無い。

「いいえ」

魔女は予想通りに首を横に振る。

「ただ、私はイングリットを次世代の森の魔女にするつもりがあると、そういうことです」

魔女は予想外のことを言った。

「いいでしょう。あの少女については貴方にお任せします」

衝撃の事実を伝え終わって、さて反撃開始とばかりに口を開きかけていた魔女は俺の言葉が理解できずに一瞬固まつた。

「あ、相変わらず決断が早いですね・・・」

「それだけが、私のとりえですからね」

俺がいつもの口癖で答えつつ、椅子から立ち上がりうつする魔女を手で押し留める。

魔女が何かを言つよりも前に部屋の外に誰も居ない事を確認して部屋に鍵をかけた。ここは一階だが、念のために窓にカーテンも引くと、部屋の中は薄暗くなつた。山の中腹に立てられたこの城の窓景は荘厳だつたが、やむを得ない。

「御安心ください、魔女殿。決して魔女殿をどうこうしようというわけではありませんから。いえ、ですから何もしませんって。何もしませんって言つていいでしょ。その手の上の種をしまつてください魔女殿っ！」

ただの植物の種でも魔女が持てば凶器になる。何かを誤解して凶行に走ろうとした魔女に俺はすがりつくように懇願した。

「とりあえず男と暗闇で一人っきりになつたら手近にある武器を手にとつて相手が混沌するまで力の限り殴り続けなさいって親友だった女の子が昔教えてくれたわ」

「それは力のないフツツーの女の子の場合ですっ！魔女殿はその気になれば人だつて簡単に殺せるんだからもつとよく考えてから判断してください！」

思わず声を荒げてから後悔する。これでは迫力で威嚇していくように思われるだろ？。

魔女が懐からもう一つ種を取り出したのを見て、俺は再び溜息をついた。もうこれ以上口論を繰り返しても堂々巡りの口論が続くだけだ。

俺は魔女の持つ種には気がつかない振りをして眼鏡をかけなおした。

「私には、娘が一人居ます」

「…………あれ、既婚者だったの？」

「よく言われます。若く見えるからでしょうね」

「いや、そうじゃなくって、貴方みたいな見かけだけ清廉潔白で中身はいつも人のことを小馬鹿にしているような最低な人を好きになるような人が居た事に驚いたのよ」

身も蓋もない言い方にちょっと俺の目が細くなつた。魔女なら俺の性格ぐらい見抜いているだろ？とは思つていたが、こうも神経を逆なでするような言い方をされるとは思わなかつた。

空氣を読め。

そろそろ真面目な話をしようつづ一雰囲気だつただろ？が。

「ああ。さつき私にしたみたいに軟派した女の子に孕ませちゃつたつてこと？」

「…………やつこいつとをいつのまは女性としてどうなのでしょうか？」

「女性じゃないわ、女の子よ。お、ん、な、の、こつ」

いつしょだらう、そんなもん。

俺は遠い田になつて昔のこゝに思いをはせた。

「・・・・・思えば、あのこゝは私も蒼かつた。あんな女性に引つかかつて人生を狂わせられるとは思つても居ませんでした。私がこんな性格になつたのも元はといえばあのクソアマのせいでしたね。・・・・ふふふ。忘れていた憎しみがだんだん蘇つてきましたよ。これが殺意つていうやつなんですね」

ふふふと笑いながら俺は空を眺める。おーい、もどつてこーい。といつ声がどこからか聞こえるが空耳だらう。

「・・・・・・・・・・・・」

俺がさらに遠い、幼少時icamente思ひをはせて現実逃避をしようとしている、急に呼吸が苦しくなつた。見るとツタが首に絡み付いて遠慮なく首を絞めている。

「ま、魔女殿、だから種はしまつてくださいといつたんですつーちよつと現実逃避したぐらいで首を絞めないでいただきたいつー」

魔女の手元にあつた種はいつの間にか芽吹いて強靭なツタを伸ばしていた。それが俺の首に絡み付いているのだ。

背筋に、恐怖が走つた。實に理不尽だ。ほんの少しの気まぐれで人を殺し、個人の我慢で國の存亡すらも左右する。法律も道徳も通じない。

何よりも腹が立つのは、それが魔女自身の力ではなく森という強大な存在の尻馬に乗つたものでしかないという事だ。

「それで、あなたの娘さんがどうしたのかしら？」

「つ、ツタを離してからお聞きください！これでは拷問と変わりませんよ！…」

「あら？ 私に口答えするつもりなのかしら？えいえい」

声色だけはかわいらしく、魔女がツタをさらにきつと締め上げる。将来国を担う事になるであろう馬鹿三兄弟は「あの俗離れした世間知らずつぶりが可愛くてさ～」「街の女のとかと違つて清楚で潔癖つてところも可愛いよね～」「一見いろいろな事を知つているようで無知なギャップがあの娘の売りだな」といついていたが、世間の常識が通じないということは、人を殺す事にも眉一つしかめないのではないだろうか？

人間われわれと、同じ価値観が通用しないということではないだろうか？遠ざかりかけた意識でそう思つて俺が無理矢理引き剥がそうとツタに手をかけたとき

ふつ。と首を絞める力が緩んだ。

「『めんなさいね』

魔女の口から出たのは謝罪。

慌てて魔女を見上げたら、魔女は反省したようにそつと頭を伏せていた。

その様子がとても憐れで思わず許してしまったくなり、ぐつと留まる。

許すのは理由を聞いてから。魔女に人間の常識が通じるのかを確認してからだ。

「イングリットのこと、腹が立つたのよ

「…………ああ、申し訳ありません」

何のことはない。あの少女を監禁した俺に対して腹が立つただけのことだった。

なんとも当たり前な、人間らしい感情だった。

魔女は俯いて黙ってしまった。自分の弟子が受けた仕打ちに対する仕返しにしても、やりすぎたのだと思つたのだろう。

ば仕方がないことだつた。

そもそもここで文句をいふ言ひなどして魔女の機嫌を損ねてしまつて困るのは俺自身だ。歯がゆいが、相手が子供じみている分こちらはよりいつそう大人の対応をしなければいけない。

「……………イングリッシュさんだ」

とつあえず会話をつなげようと、俺は思いついた事を口にする。

「貴方にとつて、『家族』なんですね」

恐らく核心をついたであろう俺の質問に、「そりや」と魔女は即答してから、魔女ははじめて気がついた感情と、即答した自分に驚いて小さく首をかしげる。

あのチツコイ妹以外家族と思つていないうだつた魔女がこうもいい顔をするようになったことに俺は少し感心した。

最も信愛するものたちに裏切られ、その結果自分が生き延びた
問うて魔女とイングリットは同じだ。今、魔女はイングリット
に自分の過去を照らし合わせているのだろう。

だったら平静でいられるはずもない。俺の首を絞めたくなるのは、確かに誉められた行為ではないものの、分からぬ理屈ではなかつ

た。

俺も含めて、人はとかく誤解しがちだが、魔女は見かけによらず幼い。森に愛されているというその特殊な立ち位置と、神にも似た所業の数々のせいでやたらと偉大に見えるだけで、単なる世間知らずの甘えん坊だ。逆に感情のままに動くという事に慣れていない分、いざ取り乱すとどこまでも危険な方向に突っ走っていく。

魔女がイングリットに自分と全く同じ道を歩む事を押し付けなればいいが。と、俺はらしくも無い事を考えた。だが、それは無駄な心配だろう。既に魔女は、イングリットを自分の後継者にするつもりだ。それこそが、イングリットの望む事だと信じ、イングリットと魔女が個々の意志を持つた違う人間だという事も認めないまま。同じような経験をしたからといって、同じような想いを抱くとは限らないのに。

やれやれ、面倒ことはめんだぞ。と、俺は心の中でがりがりと頭を搔いた。

とりあえず、自分と自分の主だけは被害をこうむらないように対策を練つておこう。と思いながら、俺は一人で考え方には没頭してしまつた魔女を見下ろす。

俺の視線に気がついた魔女は、面白い事に気がついた子供のようにきらきらした目で俺を見つめ返した。

「腐死病が絆を結ぶとは、奇妙な事もあるものです」

「どういう思考回路をめぐったのか、そう、魔女は呟いた。

「とにかく、話を戻しましょう」

あまりにも爽やかに笑つた魔女に惚れそうになつて、俺は慌てて眼鏡をかけなおす。娘とほとんど歳の代わらない女に心を奪われそうになつたのは初めてだった。

「私には娘が居ます」

「…………あれ？ そんな手前のところで本題から逸れちゃったんだつけ？」

「…………」

アンタが話を逸らしたんだつ。 と今すぐに突っ込むのはさすがに怖かつた。

「コスマスといつ名前なのですが」

「え？ あの王子の許婚のコスマス？」

「…………」

だからそろそろ黙つて俺に好きなように話せ。 と突っ込みたいのを無理矢理抑える。

「知つているなら話は早いです。 そのコスマスが、イングリットによつて腐死病に感染してしまいました」

え？ と呟く声は魔女のもの。

俺ならばそんな失態は犯さないだつと、 奇妙なところで俺を信頼していたのだつ。 その信頼は重い。

「現在クソおう 王子殿下によつて対処療法が取られていますが、 命も助けたいというのが父親としての本心です。 貴方が腐死病

に対抗するイングリットの体质について調査すれば、何とかベッタラ以外に腐死病の治療薬が作れますか？」

魔女は再び「え？」と咳いて、それから思い出したように魔女のチツコイ妹が俺についた？について解説を始めた。

俺から見れば、絶望的な事実を。

「つまり、腐死病を直す手段は、あの少女も持ち合わせていないと いう事ですか……？」

がくっと膝の力が抜けた。椅子に座っていたのでなかつたら今頃床の上にひざまずいていた事だろう。

「イングリットは潜伏期間中だったから特殊なの。大事をとつて新陈代謝を低下させて腐死病の進行を遅らせる薬を飲ませていたしね。あれによつてイングリットは死を免れていたし、私とロッキンツォンは森に守られていたからこそ使える裏技だったのよ」

そんな俺を同情するような目で見つめる魔女。
その目が癪に障つた。

魔女ならそもそも、その奇跡で腐死病そのものを根絶させられるだろう。と、ライビビに住む誰もが思つてゐることだが、だれも魔女がそうしないことを責めたりはしない。

生きていくためには人が自然を犯さなければいけない以上、自然が人を犯すのも阻止させない。そのためには魔女。森が、森であるための戒めとして設けた存在。
だから、魔女は人に肩入れしない。

そうだというなら、力を貸す気もないのに入間に同情するのもルー

ル違反だろ？。

『助けられる力はあるけど助けない。けど、あなたの悲しみはわかります』・・・・・だあ！？

全てを捨ててでも助けられるならば助けたいと思つ。自分にコスモスを助ける力があつたならば喜んで宰相の地位だつて命だつて捨てる。仮にそのためにライビビを滅ぼす事になつても構わない。その気持ちは魔女』ときには分からぬ。

力があるのに、使おうとしないのがその証拠だ。

「ところで、王子殿下が取つたという対処療法つて何のことかしら？」

魔女が小首をかしげる。

そうだ。いじけている暇は無い。こうなつたら王子殿下の対処療法で、ベツタラの実る春までコスモスの生命を持たせる事に賭けなければいけない。

「風呂に入れる。という事らしいですよ。貴方から教わつたと、王子殿下は仰つていまつたが」

魔女が絶句する。

次の瞬間、魔女は種すらも使わずに、普通の少女となんら変わらぬ力で俺の襟を締め上げながら怒鳴るように風呂の位置を聞いたのだった。

第八幕前編 再び、イングリット

あたしは溜息をついて服の上を見た。

服の上には、コスモスという女性によつて書かれた文字が躍つている。

書くものがないからといって指先を噛み切つて血をインクの代わりにしたり、紙がないからといって服の上に直接書いてきたのには驚いたけれど、よく考えれば国の上層部では日常的に血判が使われているのだとか聞いたことがあった。

しかし、あたしの服の上の文章は一味違う。ライヒビの識字率はあまり高くないのであたしが文字の読み方を知つてるのは奇跡に近かつたが、その文字の表す内容は素直に喜んでいいのか微妙なものだつたからだ。

「イングリット・コスモ・イタカを本日付で一代限りの準男爵に任命する。ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チエミエンス・ニヤマラ・スズラビ・レノハ・コスモス」

と書かれているのだ。つまり、この服があたしを貴族だと認める正式な証書だという事になる。

（文面の半分以上を名前が占めているというのも、どうかと思つけどね・・・・・）

コスモスが事務仕事を嫌うのは、ただ読んでサインするだけでも腕が疲れるからだといつていた。それぐらいならいつそ名前を変えればいいじゃんと、あたしは即座に突つ込んだ。

「はあ～」

村娘がいきなり貴族に出世してしまった。その理由はコスモスによつて聞いたがそもそもどうしてそんな理由であたしなんかを貴族に

したのか分からぬ。

腐死病についての話題は、コスモスがあえて避けている様なのでこちらから切り出す事ができず、ほとんど話題に上っていない。

そのため、今のあたしの状況が分からぬ。

宰相閣下を前にしたときのロッキンツォンさんの奇妙な言い回しも氣になつた。

自分が生きているのか、死んでいく途中なのか。

終わる存在なのか、始まる存在なのか。

それが分からぬ。不安はあたしの不安をより一層募らせた。

「コスモス、早く来ないかな」

幽閉された日から毎日、最低でも一回はこの牢屋を訪ねてくれるコスモスの存在はいつの間にかあたしの心の支えになつていて。コスマス以外の人間はそもそもこの牢屋を訪れないし、腐死病にかかっているといつもこの状況でそれは当然だ。

「はあ～」

あたしはもう一度溜息をついて、それから首をかしげた。牢屋の檻の外側に、なにやらもぞもぞ動く茶色いものを見つけたからだ。暫く目を凝らして、それが魔女の館に居た「アサさん」と同じ猫という生き物である事を思い出す。確か魔女は人食・・・・じゃなくて大喰らいでグルメの「アサさん」と、方向音痴で盗癖の「マサさん」という猫を飼つていたはずだ。

（・・・・・あれ？）

あたしは魔女から聞いていたマサさんの身体的特徴を思い出す。

(茶色い子猫、だつたわよね)

田の前に居るのは茶色い小さな猫。
どうやらこれがマサさんらしい。

あたしは思わず眩暈を感じて天・・・・・ではなくて牢屋の天井
を仰いだ。

(嗚呼)

王都と魔女の館がどのくらいはなれているのかは知らないけれど、イタカの村から王都まではかなり近いと聞いていたから、きっと大人でも五日はかかる旅程なのだろう。ついでに言つとライヒビは地形的に山あり谷あり川ありなんでもありの地形で、お城で飼われているいく一部の馬以外はその地形を乗り越えることが出来ないため普通は王様でも何処かに向かうときは徒步だ。

ちなみにイタカの村は結構低い山の頂上にあった。標高が高いため空気は薄かつたけれど、王都までの街道はちゃんと整備されていたから困ることはなかつた。

・・・・・で！あたしの言いたいのはそういう事ではなく！

「マサさん、だつけ？あんた、方向音痴にこも程があるでしょ！どうやつたら道に迷つただけで魔女の館からここまで来れるの！あんたひょつとして国境をまたいだ事があるとか言わないでしょうねえ！？」

マサさんはあたしの怒鳴り声に驚くこともなく、つぶらな瞳であったを見つめたまま「ちぢら元マチマチ近寄つてくる。

「あんたもうちよつと警戒心つて物を・・・・・」

「……・盗癖も、あんたの特徴だつたつけ？御都合主義にも程があるけどそれってひょっとしてこの牢屋の鍵だつたりしないわよねえ？」

そんなことはないだらうと思ひながら、わたしの眼がキラーンと輝き、子猫がひるむ。

「一体どうしてマサさんガ鍵を持つているのか解からぬけど、おとなしく渡してもうおうかしら？」

十分後、ムギヤーといふ猫の悲鳴が再び城中に響き渡つたといつ。

牢屋から廊下に出て、ドアから出るのをすがに描いだらうと窓から飛び出そうとして寸前で間に合つた。ガラスなどといふ高価なものが窓に使われているのは国王や王子といった、城の中でも一番上の人たちの部屋だけで、牢屋しかないここには木窓も何もないただの穴といった感じの窓しか開いていなかつたのだが、そこから見える地面は途方もなく低かつた。

（あ、そういうえばお城つて部屋を縦に積み重ねているんだつけ？）

建物を大きくするのに、横に広げる代わりに縦に広げよつといふ発想は分かるけど、そんなことをしたら重みで一番下の部屋とかがべしゃつて潰れそうな気がする。

まあでも、実際にこんな風に部屋が縦に積み重ねられた建物があるのだから不可能ではないのだろう。

だけど、ここで問題になるのはどうやって地面に降りるかという事だ。まさかここから飛び降りても足の骨を折らないといふことはないのだろうから、どうにかして降りる手段はあるのだろう。あたしは改めて窓の下を覗く。ここに着た時には田隠しをされたいたが、まさか兵隊さんがあたしを担いでこの城壁をよじ登ったわけではないと思う。

「あ、梯子か」

あたしは木の、高いところに生っている果物を取るときに使うはしごのことを思い出した。長い長い梯子があればここまで登つてくることもできるだらう。

（でも、ここから梯子持つてきてくださいって叫ぶわけにも行かないわよね）

そんなことをしたら元も子もない。鍵を取り上げられて牢屋にもう一度放り込まれてそれでおしまいだ。

あたしは仕方が無く、窓枠をまたいだ。

（えーい。女は度胸よ！）

確かにそんなことを昔言っていた人が居た気がする。女は度胸と尻と太もも・・・・・だったつけ？

（度胸は解かるけど、どうして尻と太ももなんだろう？結婚してからは亭主を尻に敷いて太もものマッサージをさせるって事かなあ？）

あたしは度胸でもう片方の足も建物の外側に出して

びゅううん。

きやあ。

てな感じに、急に吹いた突風に驚いてイモリのようになに城壁に張り付いた。

あ！

気がついたら体が全部建物の外に出ちゃってる！
つまりあたしは今手と足の力だけで壁にへばりついているわけで。
カツチンコつて、怖くて固まっちゃった！

一人しか居ないのに妙にシリアス。

何で悪役も居ないのにこんなに緊張しているのかと思うと情けなくて涙が出てきた。

けれど、ここで気を抜いてはイングリットの・・・・じゃなくて、イングリット・コスマ・イタカの名折れ。そう心に念じて、あたしは匍匐後退を開始した。

・・・・・亀並みの速度で。

城壁に起伏はほとんどない。フェリントーナから輸入した建築技術だろう。

あたしは八歳の女の子が城壁を這い降りなければいけないという事態も想定しないでこの城の設計をしたフェリントーナが嫌いになった。

フェリントーナが他の国にやや嫌われる傾向にあるのは、うまく立ち回つて甘い汁をすりつづけているということもあるだろうが、こういうところもあるに違いない。

とりあえず生きて再び地面に立てたらフェリントーナに苦情を申し立てる手紙を書こうと思いつつ涙を流す。

そろそろと城壁を這い降りる。

そろそろ。

そろそろそろそろそ・・・・・・・・・・・・(ちょっと

休憩) そろそろそろ。

イモリのように壁に体を貼り付けての行軍は案外疲れる。

あたしは痛くなつて熱を持ち始めた手をフーフーしようとして両手を離

した。

手は真っ赤にはれでいて、ヒレヅビヒル城壁の形に歪んでいる。あたしはもう一度恨みがましく城壁を睨みつけて、それからわよとんとした。

城壁と手を交互に見比べて、かくりと首をかしげる。

状況確認。今、あたしは両手両足を使って起伏の少ない城壁にしがみついていたわけで……って、

(手、離しちゃ駄目じゃん!~)

頭の中が真っ白になるのと同時に体が傾いた。どうせ元に浮かべた顔はロッキンショーンさんのもの。でもいくらロッキンショーンさんでも「都合主義」にこじに表れたりはしないだろ? あたしはさやーっと悲鳴をあげることもできず、引きつった笑みを浮かべながらまつをかさまに転落していった。

第八幕前編　再び、イングリット（後書き）

マサは、迷子になつた挙句に世界を一周した経験があります。

「命を救うのは、これで一度目でしようかね？」

聞いたことがある声に呼び戻されて、あたしは目を開けた。城壁から落ちた瞬間にとっさに目を閉じたのだが、いつまで待っても体を碎くほどの衝撃はやつてこなかつた。

代わりに背中に感じたのは、ポカポカ暖かい手の感覚。

目を開けると、ほっとした表情のロッキンソンさんが居た。

「ロッキンソンさんつー！」

「……まつたぐ。空から女の子が降つてくるなどと、ロッキンソンさんは困つたように頬をほりほりとかく。それからあたしをおろして、「怪我はありますか？」と聞いてきた。

「…………まつたぐ。空から女の子が降つてくるなどと、ロッキンソンさんは困つたようにはいまだ一流芝居でも取り扱わない話題でしょう。そもそも、受け止める側も女の子だとしたらこれから先どうラブロマンスを展開したらいいかわからないじゃないですか」

呆れ混じりにそういうながらも、本氣でラブロマンスの展開方法とやらを思考しているロッキンソンさんの顔はちよつとおかしかつた。ぶつぶつと、「私は宰相とは違つて両刀使いではないんですね」とか、「せめて年齢の差とか身分の差とか、そういう分かりやすい障害がないと恋は燃えませんよね」とか呟いている。

「両刀使い？」

恋愛をするには片方が剣士でなければいけない理由もあるのかな？
ロッキンソンさんは「まあ、いいでしょ。これについては今後

の課題とこゝ事にして保留しておきましょう」とこゝてあたしに向
き直つた。

「それにしても、貴方は何で空から降つてきたんですか？階段に見
張りでもいて、逃げ出すことができなかつたんですか」

「へ？ カイダン？ 何それ？ 梯子みたいなもの？」

「……いえ、はい、まあ梯子みたいといえばそうなのですが……
そうですね、貴方には高層建築物に関する知識がないんでしたね。
帰つたらお見せしますよ、魔女の館の地下室に行くのにも階段が使
われていますから」

「へ？ ロッキンションさんは怖いとせよくわからぬわ」

私は目をぱぱぱぱとした。

ロッキンションさんは苦笑して、「帰つたらお見せしますよ」とい
つた。

それからちよつぴり遠い目で私が閉じ込められていた牢屋を見上げ
てから、私のほうを向き直つた。

「いま、私の姉が貴方を解放してもうかるように宰相に掛け合つて
います」

それが、ロッキンションさんがこゝに居る理由なのだとこゝにとせ
すぐに分かつた。

「私は傍にいても足手まといになるだけなので、城の中庭で暇つぶ
しをしてくるわけですが、とりあえず」

貴方が腐死病だということ、隠していて御免なさい。と、ロッキンツォンさんは頭を下げた。

「私にも、私の姉にも、ああいつ事態は想定できなかつたんです。貴方の村の事情を聞いていたので、もう少し貴方が落ち着いてから教えようと思つていたのですが、それが裏目に出てしまつたことについては残念に思います」

「…………うん、まあ、いいけどさ」

怒る前に謝られてしまつては、あたしのほうから詰問する」とは出来ない。

ちょっと卑怯だと思つた。

「つきましては改めて貴方の今の状況について改めて説明させていただきたいと思います。立ち話もなんですので、歩きながら話しますようか」

まるでお役所仕事のようなロッキンツォンさんの言葉に、あたしは首を傾げつつもうんと頷いた。

結論から言えば、魔女の館で宰相閣下にロッキンツォンさんが言った事は真つ赤な嘘だつた。あたしは腐死病に対する免疫など持つて居なくて、腐死病の潜伏期間が終われば数日で死に至る状態らしい。あたしは、特別ではなかつた。

村の人と同じように、腐死病によつて死に至る存在だつた。

「姉と宰相閣下の交渉が終わつたら、貴方に蒼人参を投げします。もう裏技が使えるような悠長な状況ではなくつてしまつましたし腐死病の潜伏期間は過ぎてしまつましたから」

「うらわざ?」

「姉が貴方に飲ませていた、苦いほの薬ですよ。あれによつて新陈代謝を抑えることで腐死病の進行を遅らせ、蒼人参が実る春まで持たせるつもりだったんですね」

なるほどなるほど。

だからあたしが何の薬か聞いたときにも魔女さんは言い淀んでいたし、ロッキンソンさんは惚れ薬だなんて言い訳したんだ。

……いや、惚れ薬はさすがにないと思つたけどさ。

「じゃあ、あのおこしこいつの薬は何だつたの?」

「それはすでに姉が説明していると思いますが、あれはただの栄養剤です。魔女の館に来た当時の貴方の体調では到底固体物の消化は受け付けられなかつたでしょ?」

ふうん。

あたしは、魔女によつて寿命を延ばされてたのか。

結局は、腐死病で、生き残ることができたのは……あれ?

「ロッキンソンさん。あたしが王都に居るつて事は、ひょつとしてあたしから王都の人たちに腐死病が伝染してしまつて事じゃないんですか?」

「直接的に貴方から、という事はありません。宰相閣下の事だから貴方の居る場所には誰も近寄らないようにしてはいたはずですし、王都に来る途中はまだ潜伏期間でしたからね。運がよかつたんですよ」

そつか。

何はともあれ、あたしから腐死病が伝染しなくてよかつた。もしもそんなことが起きたらあたしはあたしが許せなくなつてしまつだろうから。

それにしても、延命措置の方法があるんなら何で魔女は他の人に教えないんだろう？

「延命措置が取れる場合というのが限られているからですよ」

ロッキンツォンさんがあたしの心を読んだように「そういうて、あたしは思わずびっくりしてしまつた。

「延命措置が取れるのは、腐死病に感染してから一時間以内とか、そういうとても初期段階だけなんです。貴方のように潜伏期間である場合は特例としていつでも延命措置が取れます、そうでなければとても難しいことなのだということはわかるでしょ？」

あ、うん。

感染後一時間じゃ、黒子ぐらいの大きさのしみがあるかないかってぐらいだもんね。年がら年中腐死病に感染する可能性について考慮している人なんて居るわけがないし、気づけたら奇跡だろ？

「そして、これまた貴方のような潜伏期間の患者は例外になるわけですが、延命措置を行うと困った事が起きてしまうんですよ」

また、あたしは例外かい……

本当はいいことなんだろうけど、なんか仲間はずれにされた感じで妙に気分が悪いなあ。

「すなわち、腐死病の暴走です。場合によつては『怒る』とも言ひますが、延命措置を取ると腐死病の感染力は急激に上がつて、それこそ国一つがあつたりと全滅してしまうぐらいの感染力を持つてしまひます」

「す、す、いんだ。」

国が滅びるって言われた・・・・・
見落が下さるからこの裏が理屈

けの人間が死ぬんだろう。

あたしは背中に冷や汗をたらしつつ、ロッキンツォンさんを見る。ロッキンツォンさんはあたしとほんの一歳違いらしげが、身長が高くて歩幅が大きいのであたしがロッキンツォンさんと一緒に歩こうとするとき少し早足にならなくてはいけない。そのためロッキンツォンさんがゆっくり歩いていっているつもりでもあたしの額には努力の汗がじみ出でていたりするのである。

「まあ、それはそうとして、今後の貴方の処遇ですが」

急にロッキン・ジョンさんが立ち止まって、慌てて停まらうとしたあ
たしの足ももつれた。

わ！ 転ふ！

すゞく冷静なロッキンジョンさんがすばやくあたしの体をキヤッチ。ちゃんと立つのを手伝ってくれてからもうこちび、「今後の貴方の遭遇ですが」と言った。

「腐死病が治つたとして、貴方に身を寄せる宛てはありますか？な

いとして、自分で何処かの町や村に行つて生活費を稼ぐ事ができますか？」

あたしはぶんぶんと首を横に振る。頼れる家族も、一緒に何かをしてくれる人ももう居ない。それはあたし自身がコスモスに言った事。自力で生活費を稼ぐと言うのも却下だ。仮に腐死病が直つても、腐死病で滅びた村の住人だというだけで周囲の風当たりは冷たい。あたしが子供だと言う事もあって、どこに行つても邪険にされるのは想像ができた。

今後の先行きが急に不安になつて肩を落としたあたしに、ロッキンツォンさんは眉をしかめる。

「プライベールという町を知っていますか？」

ロッキンツォンさんは、全く関係がない話を始めた。

「魔女の館から歩いて一日ぐらのところにあるちいさな町です。貴方の知的レベルの低さから判断して私が何を言いたいのかあなたには全く理解出来ていらないと思うのではつきり言うと、その町は一度、腐死病に滅ぼされかかりました」

あたしははつと息を呑んで、それから首をかしげる。滅ぼされかかったと言う事は、滅ぼされなかつたと言う事だらう。腐死病でも滅びなかつた町の存在など聞いたことがない。

「ベンド山といつ山の山奥にある少し閑散とした町なのですが、その時期がちょうど狩りのシーズンでしてね。町の伝統の熊狩りのために大半の男性と一部の女性は町を離れて山にこもつていたんです。だから町に居たのは留守番に残つた女性や子供たちだけでした。運がよかつたと言うべきなのか、腐死病が流行つたのはちょうどそん

なときだつたので、大半の人間は難を逃れる事ができたんですよ

「…………運がよかつたなんて、いえないでしょ」

熊狩りに参加しなかつた女性や子供なんかの弱い人間だけが腐死病で死んだと言う事なんだろう。

町は滅びなかつたかもしぬないけれど、それは幸運ではない。生き残つた人間がどんな気持ちになるのか、あたしは身をもつて知つていい。

「そうですね。生き残つてすまないと零していた人も確かに居ました。ですが、口に出して言う人こそ居なかつたものの大抵の人間は運がよかつたと思つたようですよ」

「…………そ、うなんだ」

そう思う事が悪いと言うわけではない。

現にあたしだつて心の片隅で自分はラッキーだつたと思つてゐる。今あたしが生きてゐるのは、村の人達があたしに生きて欲しいと願つたからなのに、自分が幸運だつたんだと思つてしまつてゐる。

生き残つてよかつたと思う、醜い自分が居る。

その気持ちに向き合つて、生きていかなければいけないのだろう。

「貴方が知つてゐる人間で、プライベールの生き残りは三人います。一人はこの国の宰相、ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマコ・チエミエンス・ニヤマラ・スズラビ・レノハ。そして森の魔女、サチ・アデライト・ジェディラル・マダリテリテールティング・メズアマティティテルト・ハルと私、サチ・アデライト・ジェディラル・マダリテリテールティング・メズアマティティテルト・ロッキンツォンです。あと、その服に頭の悪そうな字を書いた方と

貴方が知り合いなら、ナタリエル・テリテマ・ゲンテリリエール・トマロ・チヒミエンス・ニヤマラ・スズラビ・レノハ・コスモスさんも一応あの街の人間の血を引いていますね

あたしはほんやりとロッキンソンさんの話を聞いて、暫く立つてそれが人の名前なのだと漸く気がついた。

・・・・・長いよ！！

まあ、名前の長さが本題じゃないので、突っ込みは避けておくけど。

「ロッキンソン、さん？」

「そう。私や姉や宰相は、運よく腐死病から逃れることができたプライベールの生き残りなのですよ。・・・・・まあ、私や姉は熊狩りに参加したから生き残ったわけではないんですけどもね」

まあ、そこはいろいろとややこしい事情があるのですが、省かせていただきます。と、ロッキンソンさんは言つて苦笑した。

「宰相も、元は平民だつたんですよ。でも腐死病に感染したプライベールの人たちを救うために王都まで直訴に行つたんです。当時は流血沙汰とかもあって処刑台に立つたこともあるそうです」

「そ、そんな人に宰相やらせてるのかこの国は……」

「それで結局彼は、『テメエが何にもしてくれねえって言つなら俺が何とかするから、俺に権力よこしやがれ！』って国王に唾を吐きかけて宰相の地位に納まつたそうですね」

「……い、いろいろ型破りなのね」

王様も、宰相閣下も。

「さて、本題から逸れてしまいましたね。話を戻しましょう」

そういうてポンと手をたたくロッキンツォンさん。なんだかロッキンツォンさんの言葉や言動には人を惹きつける力があるような気がする。演説上手だ。

魔女から、魔女の住んでいた町が腐死病あつたと言う話は聞いていたけれど、こうして改めてロッキンツォンさんから具体的な名前を挙げられると話の重さが変わってくる。

「解かりますか？貴方も私達も、同じように腐死病によって家族を失つたんですよ。人を殺し、本来人と人との間の絆を切り裂く存在であるはずの腐死病が、貴方と私達をめぐり合はせたんです。これもまた、縁、なんでしょうかね？」

腐死病が、人を結び合わせる。

同じ生死の苦しみを知っているものどうしの絆と言つのは、ひょつとしたら家族の絆よりも強いかも知れない。

腐死病が絆を結ぶとは、奇妙な事もあるものだ。

「そこで、姉からの提案です。貴方、森の魔女のあとを継ぐ気はありませんね？」

「え？魔女？しかも何で否定形で問い合わせ？」

あたしは一瞬目をぱちくり。

「縁、ですよ。腐死病で家族を失つたもの同士、寄せ集めで新しい家族を作つちやおつという姉らしいじつに本能的な発想です」

「ちよ、ちよっと待つて！」

あたしに森の魔女の後を継ぐと…？」

「無茶だー無茶言つなーっ！」

「ええ、それで構いません。姉の後を継ぐ氣はないと、やつこつこ
とですね？」

改めて確認され、ぐつ、と答えに詰まる。
ロッキンションさんはなぜか厳しい口調。…………あれ、ひょ
つとして今あたし、責められてる？

「…………やつこつわけじや、ないけど。身寄りがないのは確
かだし」

あたしがやつこつと、ロッキンションさんはあたしを指差した。
いや、正確には、あたしの服を、だが。

コスマスが血で文字を書いた、服の上を。

「コスマスさんとお知り合いのようですが、あの方に頼るわけには
いかないのですか？」

「…………それは」

「わからない。」

「正直なところ、あたしは貴方に姉の後をついで欲しくないと思つ
ています。それは貴方が魔女として必要な知識を身につけられるだ
けの頭の『キをしていない』と言つ事や貴方みたいな破天荒そうな方

が魔女になつたら国の恥だとか言う事以前に、魔女になると言う事は、人ならざるものになると言つことですから、人間として培つた絆は捨てなければいけませんし、人間と心を通わせあう事もできなくなります。基本的に、魔女は 独りです「

独り。

イタ力の村を去つた後のように、独りになる。

「もちろん、姉の傍らに私がいるように、貴方が魔女になつても俗世から隔離されるわけではありません。貴方に好意を感じる人間もいるでしきうし、あなたも他の人と変わらないといつてくれる人も居るでしょう」

でも、ヒロツキンツォンさんは言葉を区切つた。

「魔女と人間がわかりあうことは出来ません。人間にとつて大切なのは『人』であつて、当たり前のように人間を優先させます。人を食う獸を『悪』とみなして追い払い、庭に救う雑草を『善』とみなして刈り取ります。それは人間を主体として考えているからです。人間から見れば害悪であると……それは、間違つた考え方ではありますん」

確かに。

人は、危険だといつて熊を狩る。熊は害獸と呼ばれる。

人は、食べるため兔を狩る。兔にとつて人間が害獸だとは誰も思わない。

「けれど、魔女にとつては違います。獸が人を食らうのも人が獸を食らうのも同じ事。腐死病が人を殺すのも、魔女にとつては自然の摂理であつて悪ではないのですよ」

あたしはハツとした。

魔女には腐死病を止める力がある。けれど、魔女であるからこそ腐死病をとめてはいけない。魔女にとつて人間は最優先すべきものではないのだから。

魔女は、人のために存在するのでは、ないのだから。

「一応、もう一度問います」

森の魔女とロツキンツォンさんだけを家族として、人間を捨てて魔女の後を継ぐ気があるのか、それとも人間のまでいるか、決めろとロツキンツォンさんは言った。答えなんて、決まってる。

「貴方は森の魔女になる気がありますか？」

「もちろんよ

「もちろんすぐに答える必要はありません。この件が終わってからはい？」

理解できなかつたらしい。じゃあ言い直そう。

「森の魔女に、なります。だつて当たり前でしょ？ あたしはイタ力の村で、切り捨てられる存在だつたから切り捨てられたのよ。森の魔女が孤独だと言つなら、逆に言えば魔女さんはあたしを絶対に裏切れないつて事じやない」

「ぜつたい、ですか？」

「形のあるものはいずれ失わるわ。あたしはそれを知っているから、絶対つてものに憧れるの。何かおかしい？」

ロツキンツォンさんはがりがりと苛立たしげに頭をかいて、時々舌打をしたり唸り声を上げながら考え込んでしまった。あたしを魔女にしたくないと呟つのはじりやうり本当の事らしい。

「わかりました」

やがて、ロツキンツォンさんは呟つた。

「帰つたら、一緒にチョコレートケーキを焼きましょ！」

「…………一緒に？」

一緒に何かしてくれる人はもう居なくなつた。

昔から家族が欲しかつた。

ロツキンツォンさんは微笑んだ。

「そう。あなたと、私と、森の魔女の三人で一緒にですよ。だつて、家族なんですから」

第九幕前編 再び、イーマ

「コスモス、湯加減はどうだ？」

「服を着て今すぐ出て行け不埒者！」

私が風呂場に入るなり、何故か飛んできた風呂桶に吹き飛ばされて私は風呂場の外の壁に叩き付けられた。

「ひどいぞコスモス！昔から親睦を深めるためには裸の付き合こと言ひのを知らないのか！？」

勿論私だつて女性の風呂に入るつもりはない。これは腐死病のことで気が滅入つてゐるコスモスを元気付けるためのお茶目なスキンシップだ。

「おぬしは親睦を深める前に思慮を深める事じやな！」

「そんなつー昔はよく一緒に入つたじやないか！」

「・・・・・・」

返つてきたのは何故か沈黙。ここで、「子供のころの話じやううが！おぬしは自分が一国の王子であるという自覚があるのか！」という答えが返つてくることを予想していたので拍子抜けしてしまった。

「・・・・・一緒に風呂に入つたことなんてあつたか？」

「忘れてるのか！？昔はお前のほうから俺の風呂に入つてきたもの

なのに」

わざと愕然としたような言い方をすると帰ってきたのはまたもや沈黙。

「…………じゃあ、いいじゃらつ」

一緒に入って良いの！？

私は脊髄反射の勢いで風呂場に飛び込んだ。

「コスモス。背中流しつゝしよう。でもその前にお湯かけつゝよ
う！」

「おぬしは子供か！？自分が王子である事をちよつとは自覚しろー。」

何故かまたもや風呂桶が飛んできた。しかし今回は予想の範囲内だつたので軽く体をひねつてよける。

そのまま浴槽へダイブ！

「へふっ」

久しぶりに、一子相伝城下町仕込超高々度二段階式踵落しコスモス
流が私の顔面に炸裂して、私は風呂の底にたたきつけられた。

ちなみにこの風呂、王族専用の風呂で無駄に広いし無駄に深い。ライヒビに二つしかない天然の湯源の内の一つを利用しているのだが、数十年に一度前兆なしに沸騰するという非常に危険な風呂だと言つ。命にかかる、なんとも恐ろしい風呂場だ。

だが、そんないわくはとりあえず関係がなかつた。

誰彼構わず踵落しを食らわすなんとも恐ろしいゴリラが住み着いた

以上、もはや風呂場は一年中安息の地ではなくなつた。

「誰が」「ココラじゃー！」

再び私の脳天に振り下ろされる 一子相伝城下町仕込超高々度二段階式踵落しゴリラ流。

デブ豚でもこれだけの重量はないだろ？と思ひほどの重い一撃は再び勇者を地面へとたたきつける。もはや駄目かと思ったが、勇者は再び立ち上がった。

「さあ来い！貴様の一子相伝城下町仕込超高々度三段階式踵落しデブブタ流などこの私が跳ね返して見せよう！…」

「なつ！？貴様今可憐なわたしのことを豚と言つたか？！豚と言つたか？！…ええい、そのような無礼を許しておけるか！そこに直れ、私の一子相伝城下町仕込超高々度三段階式踵落し天誅流で改心させてやるわ！」

「来い山猿め！イーマ様が相手をするからこな明田は無いと思えよ！」

「貴様　言つていい事といけないことがあるだろ？…だれが直視すらも出来ない醜いブタザルだ誰が！？」

「自分でより語彙を悪化させている…お前はマゾか？」

「だから誰が悪臭ブタゴリラかと聞いておる？が！？」

ぎじゅーつ。と爪をむき出して猫のよう飛び掛つてくるコスモス。

私たちはそのまま掴み合ひと引きかき合ひの乱闘に突入してしまつ

た。

体格的には男である私のほうが勝つていたが、城下町に足繁く通っているコスモスも私に負けず劣らず喧嘩の仕方を身につけていて、私とほぼ五分の戦いを見せていた。どつたんばつたんと風田場の中を転げまわった結果、両者ともまともに立てなくなるぐらにまで疲弊してひとまず休戦と言つ事になつた。

「済まなかつたな。わつちとしたことがつい熱くなつてしまつた」

「むー先に謝るとは卑怯なやつめ。お前が先に謝つては、私はお前よりも聞き分けがない子供じみた奴と言つ事になつてしまつではないか」

私はそういつて?^{むく}れてみせる。コスモスはそんな私をややあきれた表情で眺め、それからどちらからとも無くふつと吹き出した。再び湯に浸かったコスモスと湯に浸かった私。体中出來た傷に湯がしみて痛かつたが、それが生きている事を私たちに痛感させた。私は改めてコスモスを見る。こつしてコスモスと語り合つのも最後になるかもしぬないという不安と、腐死病になつてもコスモスがいつものように笑つてゐるという喜びで、私の胸は満たされてゐた。

「思えば、お前も大きくなつたものだな」

「なつーそついう卑猥な台詞をレーティーの前で言つくなー」

「え?あーいや、性的な意味では無くて、こつ、もつと呑い意味でだな、昔とは変わつたと」

「やうか?」

疑わしげな声。

コスモスに言わせれば、変わってしまったのは私のほうだろう。
人の心の本質は小さい頃に形作られて変わらない。変わるのはあくまで心の外堀の部分だけだ。

昔に戻りたいとは思わないが、昔のほうが幸せだったような気がする。今だって幸せだと言えばそうなのだが、昔に戻りたいかと聞かれれば私もコスモスも迷い無く肯と答えるだろう。

昔の時間も、今の時間も同じように大切なならば、失つてしまつたもののほうがより重く感じられるものなのかもしねり。

昔の詩人は、こう謡つた。

人は過去に思いを馳せては「あの頃はよかつた」と言い、
未来に思いを馳せては「きっと今よりいいだろう」と言つ。
未来と過去はいつだって、明るい光に満ちている。

コスモスの嫌いな謡だ。

未来や過去に目を配つていては、今だから手に入れられる幸せを見逃してしまうじゃろ。と、そう言つていた。

私にとって今の幸せは、こうしてコスモスと何気ない時間を積み重ねていく事なのかもしれない。

「お前は変わったよ。昔は清楚でおとなしくて優しくて草花を愛でるような優雅さを持ち合わせた、人のことを気遣える子供だった」

「それはあれか？昔おぬしが気品あふれて紳士的で穏やかで、十人いれば十人が振り返るような美貌を備えた、とても親孝行な殿方じやつたのと同じことか？」

素早く切り返すコスモス。

口の悪さは変わらない。

そして、私は気づく。

過去においても現在においても未来においても、私の幸せはいつもコスモスだと言つ事に。

「前言撤回だ。お前は変わらないな」

私の中でコスモスがとても大きなものだと語つ事には変わりは無い。それがイーマ・ライビングの本質なのだろう。

「それはお互い様じや」

コスモスが語つて。

なんとなく、お互いに言葉が詰まつた。けれどもそれは何を話したらしいのかわからぬ重苦しい沈黙ではなく、お互いに、音の無い静かな空気を楽しむような穏やかな沈黙だつた。絡み合つお互いの視線が、言葉よりも雄弁にお互いの気持ちを語つていた。

「のう、イーマ。一つだけ言わせてくれりや
やがて、ぱつりとコスモスが語つた。

「わつちはいつか死ぬ。例え腐死病ですぐに死ぬ事が無くとも、老いが来れば人はいずれ死ぬものじやからな。イーマのほうが先に死ぬかも知れんが、わつちだつていつまでも生きられるわけじやない。イーマよりも先に死ぬ可能性も充分あるじやう。じやがな、イーマにはそれで自分自身を責めてもらいたくないのじや。おぬしは優しいから、知人の不幸を何でも自分の責任に転換してしまつところがある。じやから、忘れんでおいてくれ。いつ、どこで、どんな死に方をしてもわつちは幸せに死んでいったと。おぬしが後悔せねばならんことは何も無いのじやと。おぬしがわつちを幸せにしてくれたのじやとな」

「コスモスは胸に手を当ててていう。大切な言葉を紡ぐよつ。」

「わっちは、イーマに出会えてよかつた。イーマが例え森の魔女にうつりを抜かしてわっちの事をちつとも構ってくれなくとも、わっちの愛しているのは・・・・・・」

と。

そこで、せっかくいい空氣だつたのに、ぶち壊す奴がいた。
私はそれまで静寂を守っていた風呂場の扉をばたんと大きく開けて、
コスモスの言葉を遮つた空氣の読めない奴をにらみつけようと扉の
ほうを見た。

噂をすれば影が差す。

森の魔女が、息を切らしてそこにいた。

「な、何をやつているんですか貴方たちは！」

ハルは私たちを見るなり美しい柳眉を吊り上げた。

「だーつ。申し訳ない申し訳ない申し訳ない申し訳ない申し訳ない
私としたことが魔女殿と言うものがありながらこんな悪臭ブタゴリ
ラに誑かされてしまうとはどう言い訳したらいいか分からない。こ
こは体で払つて罪を償わせてもらおづー！」

私はコスモスと一人つきりで風呂に入っているのがハルの不況を買
つたのかと思ってそう謝り倒したのだが、ハルはより一層鋭いツラ
ラのような軽蔑の視線を私に向けただけだった。

「…………イーマ」

と、背中のすぐ後ろからなにやら物凄くどす黒い気配を感じる。それがコスモスのものだということはすぐに分かった。

前門の魔女、後門の悪臭ブタゴリラ。

悪臭ブタゴリラのほうがまだましだと判断してコスモスに声をかける。

「なあ、コスモス」

「うるさい黙れそして死ね」

取り付く島も無かつた。

むしろ心の孤島に取り残された寂しさがあつた。

仕方なく魔女のほうを向く。

「なあ、魔女殿」

「あなた、本当に延命措置には代償が無いと思つたの？」

魔女のほうがまだましのようだ。
つて・・・・・・は？

「延命措置にはね、当然対価を伴つ。貴方が延命措置に半信半疑のようだつたし、そもそも延命できる段階で腐死病が見つかる事が稀有だつたからあのときには教えなかつたけど、延命措置を施すと腐死病菌は怒り出して、感染力が飛躍的に上がるのよ。それこそ、コスモスさん一人を感染源にして国中に腐死病が蔓延するぐらいにね」

私の顔から、表情が抜け落ちた。

そうだ。確かにあの時、私は疑問に思つたはずだ。

こんな方法があるなら、なぜハルは今まで隠していたのか、と。あの時ハルは、この方法が使える機会がないだらうからだと答えたが、それは隠していた理由にならないことは私自身理解していた。教えたところで大して意味がなくとも、教えたことで一人でも救えるかもしれないと思えば、ハルは惜しげなく知識をさらけ出す人だ。だが、もうそんな過去のことは関係がない。事実として過ぎ去つてしまつて、私は選択肢を選び終えてしまつた。

天秤の片側が空だといつていたのは、いつたい誰だつたろうか？コスモスと国民と、天秤にかけるのを嫌がつて現実逃避した挙句、正しい取捨選択ができなかつたのは、ほかの誰でもない、この私だ。そしてそのしわ寄せがこれだ。

森の魔女は、王子である私に対しても国民全員の死刑を宣告したのだ。

「嫌じや・・・・・・・嘘じやるつ？」

そして、私よりも衝撃を受けているのは、その手で国民を殺すと言われたコスモスだ。私の犯した罪にもかかわらず、コスモスにまで罪を背負わせてしまつていて。

無力なら、せめて自分で罪を背負えればいいものを。

イーマ・ライビビは、自分のケツすらも女に拭わせるような愚図だつたのか

コスモスの顔は真つ青になり、風呂に入つていてもかかわらず塞いかのようにながたがたと震えている。

いや、違う。

コスモスが恐れているのは国民の死ではなく知り合いの死。私や、

城下町の知人たちの顔が頭に浮かんでいるのだろう。

私もコスモスのように田の前のことだけに気を配つていればよかつたのかもしれない。

それが言い訳だといふことは判つてゐるけれど。後の祭りだといふこともわかつてゐるけれど。

「魔女でも、馬鹿につける薬は持ち合はせていないわ

まるで私の考えなど見透かしているよつこそつこつて、魔女は冷ややかに笑つた。

「でも、コスモスさんと貴方の生命だけは、私が名誉をかけて救います」

ハルはそういって、何かをじろんと風呂場に放り込む。やがて流れてくるひんやりした空氣で、私はそれが巨大な氷であつた事を知つた。

氷と聞いて思い浮かぶのは、植物を長期にわたつて保管するための氷漬け技術だ。生で無ければ効果を發揮しない薬草は、一度ハルアナに輸出され氷漬けにされてから再輸入される。それを日陰で保管して、何とか必要な時まで鮮度を保つのだ。

そして、腐死病のための薬草と言えば一つしかない。

蒼人参

人参のような橙色の根と、蒼い実をもつ稀少な薬草。すぐに、青い実が湯の上に浮かんできた。

ハルはそれを腰につるしていた別の薬草と大雜把に混ぜ合わせて、無造作に私とコスモスに差し出した。

「半分こ、しなさいね。コスモスさんだけではなくて今は貴方も腐死病に感染しているのだから」

ハルは、いつものように幼い笑顔で笑つた。

「魔女殿、これはちゃんと二人分あるのか？」

「ないわ」

ハルは当然のように、二人分の薬を持っていないことを告げた。

「でも、コスモスさんは貴方を差し置いて一人だけ薬を飲んで助かるとは思わないだろうし、貴方はコスモスさんを助けるために何とか薬を飲ませたいと思うでしょう？それで一人とも薬を飲もうとしなかつたら、薬がある意味が無いじゃないの」

「いや、私が言おつとしているのはそつじゃなくて」

私は、それが誰のための薬であるのか聞こつとして、止めた。

これがイングリットを助けるための薬であることは間違いが無い。わざわざ重い氷の塊を王城にまで持ってきたことを考へても、もう、イングリットの死は秒読みなのだろう。ここでイングリットの名前を出せば、ハルは迷った末にイングリットを選ぶだろう。今は、ただ死を目前にした私たちを見て感情的になっているだけだ。時間を置けば冷静さを取り戻す。

「さあ、どうしたの？半分こだから一人分には満たないけど、薬を飲んだ上で延命措置を行えば、腐死病だつて何とか退治できるわ。さあ」

おずおずと、コスモスが手を伸ばす。コスモスが握ったのは、薬の半分。

残る半分は、イングリットの分では無くて私の分。私は「スモスとハルから田を逸らすようにして、受け取った蒼人参を飲み下した。

「イーマは悪くないからな」

ハルが風呂場から立ち去つて、暫くたつた頃、ぽつりと「コスモスは呟いた。

それが、一瞬「イーマが悪いんだからな」と聞こえて相当神経が参つてゐるのだと自覚した。

いろいろと考えすぎるのが、私の悪いところだらつ。

どうしても、魔女の言葉が頭から離れない。

コスモスが目の前に居るのに、コスモスが目の前にいるからこそ、他の事について考えてしまう。

腐死病が國中で蔓延してゐることについて考えてしまう。

自分がコスモスに対処療法を教えなければ、被害はもつとずっと小さくて済んだのにと後悔してしまう。

けれど、ああ。

ここで私が罪悪感を抱くことは、コスモスにも罪悪感を抱かせる事になつてしまつ。

とりあえず、國民の事ではない。
コスモスのことだ。

「ところで、コスモス。おまえ、魔女殿が来る前に何かいいかかつたよな？」

「え？」

「ほんつ。と言つ感じでコスモスの顔が唐辛子のよつと真つ赤に染まつた。

「そ、そうか？ わつちは覚えていないぞ」

下を向いて落ち着き無く体をゆするコスモス。忘れたことにしてとぼけよつとするコスモスのために私は口添えした。

「『イーマが例え森の魔女にうつつを抜かしてわっちの事をちつとも構つてくれなくても、わっちの愛しているのは』のところで中断されていたぞ」

私がそういうつてコスモスの目を覗き込むと、コスモスはついと目を逸らした。

私がその様子に含み笑いをもらしながら黙つてみていくと、コスモスはおずおずと顔を上げて、それからまた俯いてしまう。暫くしてもう一度トライするも、結局は耐え切れずに視線を逸らしてしまう。私は調子に乗つて、コスモスの視線を追いかけ始めた。

私が右行けば視線を左に逸らし、正面に立つと視線を上に逸らし、逃げ道が無いと悟つたのかしまいには両手で顔を覆つてしまつ。

「そ、その、じゃな

ふいに、コスモスのほうから私に視線を絡めてきた。あまりに急な動作だったので思わず私が視線を逸らしそうになつてしまつ。そんな、真つ直ぐな視線だつた。

コスモスの金色の髪が、紅く染まつた耳が、首筋が、どこか潤んだ目が、かすかに震える首筋が、私の心の現に触れてときめきの音を奏でてくれる。

「わっちは、イーマのことを愛しちょる・・・・・これで満足か？」

最後の最後にはやつぱり目を逸らして。それでも大切な言葉ははつきりと紡いで。

コスモスはコスモスらしく愛の告白をした。
分かっていた事でも、実際にコスモスの口から言われた事が嬉しくて、私はコスモスをぎゅっと抱きしめてしまう。

それから、コスモスの肩を抱いた。

「私も、コスモスのことが好きだ」

私は誠意を持つて答える。女王に忠誠を誓つ騎士のように誠実に。ここで紡ぐ言葉に、嘘は無い。

だから、ここで思つてることをすべて言つてしまわなくては、これからずっと言えないだろう。

「私は、人とは少し考え方が変わつていて、突拍子のないことを平気でやつて、自分の運命さえも認めようとせずに逃げてばかりいるどうしようもない男だ。だが、こんな私でもお前を愛している事に嘘は無い。お前の全てが好きだ。王家の血筋がお前のために全てを投げ出してもいいという私の願いを踏みにじつてしまう事もあるだろう。誰かのために、お前のことを後回しにしなければいけないこともあるだろう。でも、忘れないで欲しい、コスモスが、私にとつてかけがえの無い存在だという事には変わりがないのだと。私がコスモスのことを、心から好きなのだと言つことを」

だから、と私は一度言葉を区切つた。

彼女に理解できるかどうかわからなかつたけれど、言葉にしておくべきだと思ったから。

「だから、辛いときに、一人で抱え込まないでくれ。コスモスは強いから、なんでも一人で抱え込んで、たいていのことは一人でも解決できてしまうだろう。苦しみも乗り越えられてしまうだろう。でも、一人で何でも出来なければいけないという考えは間違つていると思う。いっそ乗り越えないでくれ、解決しようとしてないでくれ。他人の手を借りる気が無いのなら、努力なんて放棄してしまえ」

それは、「スモスに言つ葉であると同時に、自分に向けて言つ葉でもあつた。

だから、わかる。誰かを頼るという事が、口で言つ以上に大変だということは。

「一緒に、乗り越えて行こう」

どんな苦境も、一人なら、大丈夫。

他人に迷惑をかけないために自分が被害をこうむるよつに努力するのは、もう止めよう。

腐死病が王都で蔓延して、国民に散々迷惑をかけて、いつそ開き直つてしまつたのかもしれない。それでも、いい。

権力を持つものとして生まれたのだ。それを使つべき唯一の時にくだらない悩み事にうつつを抜かしていたら、自分が軽蔑する、王位を押し付けようとしてくる兄たちにすらも申し開きが出来ない。

口だけで誰かを頼れといつても、それは無責任なだけだ。

誰かを頼れというなら、態度でしめそつ。自分の持つている重いものを、コスモスの肩にも、半分乗せよう。

「腐死病を、退治しよつ」

まずは、私から。

国が滅びかかっているというプレッシャーと、沢山の都民が死にかかっているという重責を、一人で分け合つことにした。

れる知識は計り知れない。書籍数延べ七百万冊。石版記録が七十万枚。文化的価値のある絵画が七万枚。時代別の国の地図が七千枚。祖先が残した暗号と思われる書類が七百枚。一部紛失してしまったらしいが、代々の国王の肖像画が七十枚。王家の家宝が七点。書庫と言つよりも既に博物館といったような国家書庫に、私の記憶が正しければ私自身始めて入る。

国の全てがあると言つ謳い文句は嘘ではない。だから、この国と腐死病がどうかかわってきたのかも分かるはずなのだ。

「…………わからんな」

私は貴重な書物の一つをどさりと「読了済み」とかかれた箱に放り込むと、硬い木の椅子に寄りかかった。

国家書庫の欠点を上げるとするならば、それは整理の悪さだ。時代別に並んでいるかと思うと急に作者の名前順になつてしたり、かと思つと王族の書いた書物だけは別枠に用意されていたりする。おまけにこの書庫を利用したであろう代々の王族が読んだ本を好き勝手な棚に突っ込んでいくから、ただでさえ混沌とした書庫の中がもはやカオスと化している。

それだけならまだいい。売ればそれだけで金貨何十枚分もの価値がありそうな本に落書きがされていたりするのは何でだろうか？

ひょっとして王族は王族でも、三歳児とかがこここの本を閲覧しているのでないだろうか？

ついでに言つとその落書きの中になぜか見覚えがあるものがいくつも混じつているような気がするのは何でだらうか？！

「…………」

私は幼少のころに思いをはせた。

あー、そう言えばあの頃はお絵かき帳が無かつたんだつけ？

じゃあここに来たのって一回目か。

「なんじゃ、もつ音を上げたか？」

「コスモスが別の本を読みながら私を茶化していく。ちなみにコスモスは一度に三冊の本を読んでいる。目は一つしかないのにどうやって三冊もの本を同時に読んでいるのだろうか。

「ふむ。こうしてみるとあれだな、まじめに本を読んでいるコスモスと言つのもなかなか可愛い」

私がそう言つと見る見るうちにコスモスの顔が真っ赤になる。あ、読む本の数が一冊になつた。

「それで、そう言つコスモスのほうは何か進展があつたか？」

「うむ」

・・・・・あつたのか。

「イーマ、わっちの仮説があつているか、検証してみて欲しい」

そういうて彼女が差し出したのはこの国の地図。それも時代別のもので十枚以上に及んだ。

そして、その地図のあちこちを埃だらけになつた手で指差しながらコスモスは私に仮説を説いた。私はにわかに信じられなかつたが、コスモスはちゃんと裏づけまで取つていた。

腐死病を撲滅する一縷の可能性が、コスモスによつて示されたのだった。

第十幕。再び、ハル

ここはどこだろ？・・・・・

地面を踏んで感じるのは、やわらかい土の感覚ではなく固い床の感覚。

息を吸つて感じるのは、じめじめした森の空気ではなく人間臭い街のにおい。

下を向いて、顔が映るぐらいにつるつるに磨かれた床を見たとき、私は恐怖を感じだ。

ここは、人間の縄張りだ。私のような存在が不用意に足を踏み入れていい場所ではない。

右も、左も、上も、下も石で作られた壁に閉じ込められた、ここは人間の住む巣の中。

私が昔捨て去つた古巣に、もう私の居場所は無い。

冷静さを取り戻して初めて、自分がとんでもない事をしたのに気がついた。

（あの蒼人参はイングリットを救うためのものだつた）

あの蒼人参は人間なんかのために使つていいものではなかつた。

（あの、人間め）

あの小賢しい人間は私が蒼人参を誰のために持つてきてくれたのかちゃんと理解していただつた。それなのに冷静さを失つた私をたしなめる事もせず、ぬけぬけと同属のために薬を使つた。

人間にとつては人間を救う事が正義だ。

けれど、こうして魔女をだました事には罰を与えなければいけない。

腐死病でライヒビが滅びようと知ったことか。人間は自分たちの犯した罪を悔いつつみんな死んでしまえばいい。

「…………はあ」

気づいている。わかっている。本当は助けられない私への言い訳をしているだけだというのは自分自身で一番理解している。森の魔女はライヒビにおいて絶対の存在だ。けれど、森の魔女の力を持つしてここまで暴走してしまった腐死病は止められない。言つてしまえば、森は今私の声が聞こえないほどに怒り狂っているのだ。人の分を超えてまで生き残ろうとした愚か者どもに我を忘れているのだ。

「…………」

私はただ単に、ライヒビの人たちを助けられないのではないかと、自分の意志を持つて助けないのだと思い込みたいだけだ。助けたいと言う気持ちを自覚してしまったら、自分の無力さを悔いなる事になるから。

魔女は人と森との境界線を守るための存在。たいていは人の側がその境界を乗り越えようとするが、今回は森のほうが悪い。私は魔女として森を諫めなくてはいけない。

森の怒りは理解できる。自分で勝手に腐死病にかかるおいて、運命を受け入れようとせずに無理矢理生き延びようとする人間に対して森が怒りを感じるのはもっともな事だ。けれど、それで、それだけのことで人を全て滅ぼそうと言うのはさすがにやりすぎだ。私に、それを止める力は、ないけれど。

「あ、魔女さん！」

と、不意に後ろから呼びかけられた。

結局私が救えなかつた少女の、無防備な声だつた。

気がつかなかつた振りをして歩み去つてしまつ」とは、私には許されない。

ちゃんと、ごめんなさいと言わなければ。

・・・・・ イングリット

私がややためらいつつも、小さな声で少女の名前を呼ぶなりも、

「『魔女さん』ではなくて『師匠』ですよイングリット。呼び方は大切です。自分にとって相手がどんな立場にあるのかを明確にするためのものですからね」

聞こえてくるロジキンソジオノの声。

まるで、姉妹のように和やかに会話する一人を見て、それからロッキンツォンの、『師匠』の意味に気がついて、私は下唇をかんだ。

(言わなければ)

言わなければ。もうイングリットを助けることは出来ないと、イングリットは死んでいくのだと。

「ねえ、イングリット」

私は意を決して振り向く。

そこには、笑つてゐるイングリットと、同じく笑つてゐるロッキンツォンと、そして何故か彼らと共に愛想笑いを浮かべる宰相が居た。思わず、ロッキンツォンに問いたくなる。

でも、返つてくる答えが怖くて聞けない。ロツキンツォンが人の側にたつ存在だと答えたなら、私は本当の意味で一人になつてしまふか

う。

早くイングリットを家族にしなければ。一人になる恐怖にはもう耐えられない。

ああ、でも。

ここで真実を話したらイングリットは私から離れていつてしまうかもしれない。魔女が人間なんかのためにイングリットを蔑ろにしたと知つたら私の前からいなくなってしまうかもしれない。

私は結局、言葉に詰まつた。

イングリットがそんな私の顔を不思議そうに見上げてくる。

「宰相閣下」

私は結局、イングリットのことを後回しにして宰相に向き直つた。イングリットの前から逃げるように宰相に歩み寄る。

「コスマスさんのとつた延命措置と言つのは、大きな対価を伴うものです。はつきりいふと、腐死病の感染範囲が爆発的に跳ね上がるんです。このままでは　　国どころか、大陸そのものが滅びかねません」

「・・・・・対処療法を王子殿下に教えになつたとき、貴方はその事もちゃんと王子殿下にいつたんですか?」

確認するよつに問つ宰相。宰相は無表情で、私を責めるつもりなど毛頭無いようだ。

もつとも、責めても意味が無いと割り切つてゐるだけなのだろうが。私は首を横に振つて、もう一度イングリットのほうを向く。

「それでね、イングリット・・・・・いえ、ロッキンツォン

結局は逃げるようにロツキンツォンのほうを向く。

「コスモスさんが腐死病に感染していたのよ。だから仕方が無かつたの。それで……」

言葉を区切った私に、ロツキンツォンはまさか、と呟く。

「姉さんは、家族だと言つた、大切だと言つたイングリットよりもコスモスさんのほうを優先させたんですか？」

針のようない私の心に突き刺さつたロツキンツォンの声は、しかし、怒氣を含んでは居なかつた。長い間一緒に暮らした姉妹だからこそ分かる、それは軽蔑だつた。

ああ。

ロツキンツォンに、今、私は見捨てられた。

ロツキンツォンは宰相と同じ人間の側に立つてゐる。

私は最後の希望のように、すがるようにイングリットを見て、目を見開いたまま硬直した。

イングリットの着ている服。赤黒い模様の入つたややすくすんだ色合の服だと思っていたのだが、それは私がイングリットのために作つた私とおそろいの植物で出来た服だつた。

そしてその上に書かれてゐる模様は、文字だ。コスモスさんの字で、イングリットを貴族にすると書かれてゐる。

貴族は、つまり人間の階級。

イングリットも結局は人間を捨てられないのだ。

私の体の芯の部分が一瞬かつと熱くなつて、それから急激に頭が冷えた。

（なんだ。私が苦しまなければいけないことは何も無いんじゃない）

守らなくてはいけない存在が無い事が、こんなに楽な事だとは思わなかつた。

自分の周りに居るのがみんな人間なら、氣を使うことは無い。

みんな、死んでしまつて構わない。

むしろ、早く死んでしまえばいい。早く死んでしまつてくれ。そうすれば、もう悩まなくて済むから。

自分が人間を捨てきれない事とか、人間が自分にとつて何かとか、考えなくてよくなるから。

宰相が近くを歩いていた部下を捕まえててきぱきと指示を飛ばすのが、ぼんやりとした私には何故か遠く感じられる。人間が、人間を助けるために悪あがきをするさまを、こうして高嶺の見物と言つのも悪くない。

意識は遠く、まるで私は夢を見ているような心地だった。

気まぐれな心の波に揺られて、私の意識は遠く、遠く、と・・・お・

「えつと、事情はよくわかんないけど、まあ、師匠が病氣の人を放つて置けるような冷徹さを持っているとは思わないし」

私を現実へと引き戻したのは、意外な人物の言葉だった。

私はまじまじとイングリットを見る。

「だつて、死にかかっている八歳の子供を可愛そだからつて言つ

て家中に運び入れちゃうようなお人好しなのよ？あたしだって師匠がそんな人だつたから今、こうして生きていられるんじやない

助けてくれてありがとう。と、イングリットは今ながらお礼を言う。

今この瞬間にイングリットを見捨てようとしていた、その、私に向かって。

数日前、魔女の館で言つたのと同じ暖かさで、違つた親しみをこめて。

「ロッキンソンさんから聞いたわ。魔女さんが、あたしを弟子にしようとしている事。あたしを家族にしてくれようとしている事、聞いたわ」

「…………私を、許してくれるの？」

「いや、だからあたしは事情がよくわかつていらないんだけど……。まあ、とりあえず、許してあげるわ。だつて、家族。家族だからね」

一度、繰り返すように家族といった。

この場において、二度、家族といった。

何度も言うと軽く響いてしまうから、大切な言葉は胸の内にだけしまつて置くべきだと誰かが言つていたのを私は思い出す。けれど、それは違うと思う。

大切な人と大切な思いを分け合いたいと思う。言葉はそのためにあるのだから。

倉庫に山と積まれただけの宝に意味が無いように、口から紡がれない言葉など意味が無いのだ。

だつてほら、この子の言葉が、私の心をこんなにも軽くしてくれる

んだから。

「師匠は、魔女だから大手を振つて人を助けることは出来ないでしょう？ だつたら、あたしやロッキンツォンさんのために頑張ればいいじゃない」

この子は、強い。

私は思わずそう思つた。

「・・・・まあ、そういうなら私も姉さんの手助けをするのは^{やぶや}者かではありますん」

私とイングリットの会話を黙つてみていたロッキンツォンが、楽しそうに笑つていつた。

第十一幕。再び、コスモス

ライヒビ王国が誇る国家書庫内。

「――カカ山脈中腹にあつたカニミ村、ジェマ村、政令都市ナグタール。コミコギ峠にあつたビーマ村。死火山レノハ山のカルデラ内にあつたマルク村。マーラ山カルデラ湖のほとりにあつた漁業都市セメティレウス。シマ山にあつた隠れ里ミルガン。リサ高原にあつたケマ街、ノレマーヌ自治区。避暑地ロマヌ山、ベンド山にあり、今でも細々と生存者が暮らすプライベール町。裸山の上に作られたチチコマ村。歴史上最多くの人が死んだとされるシミレム台地のサルメール男爵領、そして、イタカ山にあつたイタカ村」

イーマが、わづちが調べた資料と地図を照らし合わせていく。ライビビも地盤変化や火山の隆起などによつて百年単位で考へると相当地形も変わつてゐるが、それらを考慮に入れて改めて検証してみると、一つの事実が浮かび上がつてくる。

「腐死病が蔓延してゐるのは、標高の高いところにある村や町ばかりだ」

統計学的に考へて、絶対にありえない確率だ。

本当に、どうしてこんな事に今まで気がつかなかつたのだろうと思ふが、何十枚もの地図を一つ一つ年代記と照らし合わせなければいけない作業は骨だつた。

「つまり、ベツタラ……じゃのうて、ええと

「ベツタラであつてゐる。蒼人參と言つのが一応は正式な名前にな

つていいと言つただけだ

「蒼人参の実る春まで待たなくとも、ただ単に標高の低いところに逃げ込めばいいということじゃな」

わっちは得意満面といった顔をする。イーマがエライエライといつてわっちの頭を撫でてくれた。ちょっと悔しそうな顔をしているのは、わっちの方が先に腐死病への対抗法を見つけ出したからだろう。わっちは機嫌のいい猫のようごくぐいぐいと頭をイーマに押し付けた。

「だか・・・・・それで、ビうじたものかな」

急に思慮深い顔になるイーマ。その顔は精悍で、わっちは一瞬見とれてしまった。

「何か問題があるのじゃな?」

「ある。國中の人間に腐死病の事を通達して、混乱を一切きたさないようここにこの対策について教え、國民が避難するための施設と食料と水を確保し、老人や子供が逃げ遅れて腐死病にからないようにヘルパーとして城から兵士達を派遣するとしてよう。どのくらいの期間が必要だと思つ?」

「・・・・・一年?」

「そのくらいか、下手をするともつとかかる。腐死病が蔓延するまでに三日。その後で死に至るまでに最長でも一週間。苦しい判断だが、少しでも多くの生命を救うためにはここから遠く離れた片田舎の村は犠牲にするしか・・・・・無いだろ?。それでも救えるのはせいぜい、三千人

三千人。

国の人口の十分の一にも遠く及ばない。

彼は、三千人を救つてそれで自己満足できる程強くない。下手に頭がいいせいで、考へてもしょうがないような事にまで想像をめぐらしてしまつ。

救えた命よりも、救えなかつた命のほうが重い。

「…………」

イーマは、ぎりと歯を噛み締めて手に持つた地図を握り締めた。その目は虚空を眺めていたが、思考を放棄しているようではなさそうだ。むしろ、一人でも多くの人間を助けるために全力で打開策を考えているようだ。

「所詮、あなたの思考能力じゃあ人の限界は超えられないという事ね」

声に驚いて振り向くと、書庫の入り口に魔女がいた。身にまとう白い服は素朴ながらも神々しく輝いていて、堂々と王立ちする姿はまるで窮地に現れる英雄のようだつた。

「魔女殿、か。ここは王族の人間しか入れないはずだが、どうやって兵士達を言いくるめたのだ?」

イーマが噛み付くよつて言つ。実際、掴み掛かりそうな迫力で魔女を睨みつける。

「宰相閣下の紹介でナコとか言つ侍女が出てきてね。あの娘、お城のアイドルか何かなのかしら? ナコが微笑みかけたらこの書庫の門

番たちはみんなイチロだつたけど

「…………やつぱり、あやつ、魔王か何かじやろつか」

まさか国家書庫の門番まで侍女に絶対服従を誓つてゐるとは思わなかつた。

「さて、話は戻るけど、所詮人間の貴方には人間のできることにしか考えが及ばないようね。例えば、伝説に出てくるエルフの民が出てきて助けてくれるんじやないかとか、実は今の状況が夢で眼が覚めたら何事も起こつていなかつたとか、そういう奇抜な発想は出来ないのかしら?」

明らかな挑発に、イーマがますます視線を鋭く尖らせる。

魔女はチヨイチヨイと不意に現れた手に後ろから脇をつかまれる。

「姉さん。絶望的状況にある人にそういう言い方をするから空氣読めないと言われるんですよ。ちゃんとした言い方しましょ。『あなた方はなんて無脳なのかしら、目の付け所が全然違いますよ』って」

「あら、その言い方では駄目よ。口調は丁寧だけれどものすゞく毒を含んでるもの。前半部はどうにかしなければいけないわ」

「…………魔女殿」

イーマが魔女を呼んだ。

「それでは姉さん、こんなのはどうですか?『貴方達はとても有能ですね。そこまで突飛な目のつけ方をなさるなんて』といった感じ

「

「…………魔女殿」

「ロッキンション、それでは皮肉になつてしまつわ。前半部はよくなつたけれど、後半部は悪化してるもの。ここはいつそ、後半部をばつたり省略してはだつかしり」

「…………魔女殿」

「うへん、そつあると、『うなりますね。『貴方達はなんてすばらしいオツムをしておいでなのかしり』つて」

「…………まじょど・・・・・・・・・・ああ、いや、いい。氣の済むまでやつてくれ」

力なく俯いたイーマ。

なんだか先ほどまでの精悍さのカケラも感じられなかつた。なぜか魔女とロッキンションの後ろにいるイングリットが、ちょいちょいと、魔女をつづいた。

「どうしたの？ イングリット？」

即座に尋ねる魔女。何故か親しげだった。

「いえ、多分だけれど、師匠とロッキンションさん以外状況を理解していないんじゃないかな」

実に的確な忠告だった。何故かイングリットのせうて後ろに立つ私の父がこくこくと同意するように頷く。

「ああ、それならそうといつてくれればよかつたのに」

そうして、イーマのほうに向き直る魔女。

「腐死病は空気感染で蔓延する。それは規模が国レベルになつた今でも変わらないわ。だつたら蔓延する前にその空気を浄化してしまえばいいだけの話じゃない。腐死病の蔓延を王都だけにとどめることができたら、あなたたちの才能を持つてすれば王都の人達全員を避難させることぐらい朝飯前でしょう」

にやりと笑う魔女。野性味を感じさせる白いハ重歯がきらりと光つた。

ほとほと、魔女の力は上限が無い。

雲に乗つて空を飛ぶとか、未来が予知できるとか、ゴスロリの少女ばかり集めてレズハーレムを作つてているとか、興奮すると刻の声を上げながら太陽に向かつて走り出すとか、すっぽんぽんでも往来を平氣で歩けるような変わつた男にしか興味が無いとかと言う眉唾物の噂も、実は真実なのではないかと思つてしまつ。

「これだけの力が人間のものになつたら、どれだけ素晴らしいだろうな」

さすがのイーマもあきれ氣味に呟く。

魔女が採つた方法。

口で説明するのは簡単で、人間には絶対に不可能な方法だつた。

魔女はそもそも風呂場でわづちとイーマに蒼人参を飲ませたときか

らこの方法は思いついていたと言う。

ただ、それでももう王都は救う事ができないから、王都を救うにはとっくに手遅れだという事で投げやりになつていたらしい。例え國中の人間が生き残つても、王都の数千人が救えないと無力感に絶望するならばいつそのことみんな死んでしまえばいいという、魔女ならではの考え方はわつちには到底理解ができなかつたが、いざれにしろみんな助かるのだ。何も言つまい。

どこで何があつたのかは分からぬが、魔女は人を救おうとし、イーマとわつちはその方法を提供した。それがここで必要な唯一の真実だらう。

「コスマス、呆れて間抜け面をさらしている時間は無いぞ。都民を非難させるのがまだだからな」

イーマは言つ。

雨を降らせる。

ライヒビ全土に、これでもかと言つぐらじやんじやん雨を降らせると言つのが、魔女のとつた方法だつた。空気感染する腐死病はその特性ゆえに雨で流れてしまつ。既に感染してしまつてゐるであろう王都の人間は別として、そもそも腐死病が蔓延しなければ感染後の対策を取る必要は無い。

その効果は、覗面だつた。

森の魔女は、それこそ理屈を越えた力によつて奇跡を起した。

「私の力といつのは、ちょっと違うけれどね」魔女は言つ。「これは、森という漠然とした意志の力。私は森に頼み込んだだけに過ぎないわ。本来、人の起こした事の始末は人がつけなければいけないのだけれどね」

「ん? 今回の件は、腐死病だから天災じやう?」

わっちがそういうと魔女と魔女の妹が即座に「違います」と首を振った。

「腐死病は天災だけれども、腐死病の少女を国の心臓部といえる王都につれてきたのは人間、わざわざ隔離しておいたのに興味本位からその少女に密会した上、腐死病にかかってしまったのも人間、延命措置をとつことによつて、国中に腐死病菌を振りまいたのも人間。腐死病は確かに深刻な問題だけれども、自然の摂理にのつとつたものであるから放つておいて国が滅びることは無いわ」

わっちも含めてその場にいた数人がしゅんとする。思うところがあるのだろう。

「魔女殿、最後に一つだけ、いいか？」

王子が魔女に向き直つて言う。

「魔女殿なら、腐死病そのものを撲滅する事ができるのではないか？天候そのものすらも左右できるあなたなら、腐死病ぐらい、根絶やしに出来るのではないか？」

してはいけない質問だと、彼自身わかつてはいるのだろう。

魔女は決して人間のためにあるのではなく、あくまでも人と自然との間を取り持つ存在なのだから、人の味方ばかりは出来ない。人が自然を侵略するのも、天災によつて人が滅びるのも同じように阻止する。人とそれ以外とのボーダーラインを守るための存在なのだから。

「あなたは、愛する人が凶悪な殺人鬼になつたとして、その人の殺

人を止めるためにその人を殺せる?」

魔女の間に、父の宰相は私を見て、私は王子と父を見て、王子は私と魔女を見て、魔女の妹はイングリットと己の姉を見て、イングリットは魔女と魔女の妹を見て、魔女は、平等に全員を見た。今見た相手が、きっと彼ら彼女らにとつて愛する人なのだろう。

「殺したりは、できんな・・・ん、いや、すまない。詮無い事を聞いた。ゆるしてくれ」

「かまわないわ。人間の事を最優先に考えるのは、人として当たり前の事だから」

それは、まるで自分は人間ではないというような言い方。

「魔女は、人じゃないわよ」

心を読んだように魔女はそういった。

けれど、魔女と人も互いに歩み寄れるかもしねない。

いつの日か、人と森との境界がゆるくなつたらそういう日が来る。ただし、それは人間がこの世界で苦労して勝ち取ってきた特権を全て捨てればの話だ。

わっちはイングリットを見た。

彼女は魔女の弟子になるのだという。

そして、わっちは名を抱くものだ。

人と森との間に存在する魔女の、さらに魔女と人間の間にある存在

それはどちらから見ても架け橋となる、希望なのかもしれない。

第十一幕。再び、コスマス（後書き）

あと三時間後にヒューロークを掲載します。

閉幕。魔女の弟子

「いい? 上から順番に粉紫蘇、ニニヤラワの根、春椎茸、黒花、真珠草、犬酔わし、鬼喰らい、踊り茸、海花、海野菜、フコノシラセ、ボウボウ草の汁、南唐辛子、根無し大根。これがキノコに当たったときの薬の材料よ」

「…………おねえちゃん、空氣読もつよ」

師匠がそういうて、家族にだけ向ける碎けた口調のロッキンツォンさんが的確な突込みをした。

ちなみにあたしは、キノコに当たってベッドの上で苦しみもだえている。

あたしを弟子にしたのはいいが、何かにつけて薬の作り方を教えたるのは師匠の悪い癖だ。そりやあたしだって魔女になるためにはいろいろな薬の作り方を覚えなければいけないけれど、腹を抱えてベッドの上をぐるぐるするあたしを見るなり、嬉々としてわけのわからぬ薬草を沢山持ってきて講義しだすのは止めてほしい。こつちは死ぬほど苦しい思いをしているのだ。薬を飲ませてくれてから作り方を説明してくれてもいいのではないだろうか。

あたしは涙目で師匠とロッキンツォンさんを見る。

渋々薬を調合し始めた師匠と、それを監視するロッキンツォンさん。あ、なんか本当に楽しそう。

いいなあ・・・・・

薬を飲み終わつたらなんか即座に元気になつてしまつたので、ベッドから飛び出そとしたらロッキンツォンさんにチョイと首筋をつかまれてベッドに連れ戻された。

「絶対安静」

「じゃあ森の散策をしながらリハビリつまむ」

「却下。そもそも食中^{しょくあた}りのリハビリなど聞いたことないわよ」

「でも、家中より森のほうが落ち着くし」

「一眠りすれば起きてもいいから、暫くはおとなしくして頂戴」

そう

魔女の弟子になつてから、森の空気が変わつたように感じられる。なんだか、森が新しい存在に感じられるようになつたと云つか、森に親近感を感じるようになつたと云つか、とにかく、森に受け入れられているような感じがするのだ。

これが、森の『愛情』と言う奴なのだろうとあたしは漠然と理解している。

それはとても気持ちよくて、暖かくて、あたしも森に対しても何かポカポカとした感情を抱くようになつてきた。

でも、その感情に全身をゆだねちゃおつとすると何故かコスモスや王子様の顔が頭に浮かんできてる

なぜか、あたしはそれがとても名残惜しく感じるのだった。

それがどういうことなのかは、なんとなく分かる。でもはっきり口にしようとするとなつて、すぐ霧散してしまつて、掴みどころが無い。

あたしはあたしが逃げ出れないように監視しているロッキンジョンさんをちらりと見て、ベッドの中で軽い溜息をついた。

ふと、窓の方を見る。

窓脇に置かれた植木鉢と、その中身。

オレンジ色の細い根を懸命に伸ばし、青い小さな実を一粒、ぶら下

げている植物。

決して群生する事の無い、けれどもとても貴重な実。本来は全く人参とは違う植物なのだが、橙色の根をしているという事から、蒼人参とよばれる植物。この小さな実は、きっと誰かの命をつなぐ。

蒼くてちこちな、命のカケラ

閉幕。魔女の弟子（後書き）

さて、これにて「ちいさなカケラ」は終わりを迎えました。

「どうせ昔書いた作品なんだから、全章一括掲載でよくないか？」

とも思ったのですが……

やってみたかったんですよ。

連！載！

それはともかく、ほぼ一か月近く、お付き合っていただきありがとうございました。

今後の予定ですが、これからひと月ほど間をおいて、短編を一つか二つ、投稿しようかと思っています。では、その時にまた。

2011年7月27日

夏詠水面

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5742u/>

ちいさな力ケラ

2011年7月27日17時45分発行